Fratres~フラトレス~　~The Crazy Cafe~

御奈坂　緋結華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｆｒａｔｒｅｓ～ フラトレス～　～Ｔｈｅ　Ｃｒａｚｙ　Ｃａｆｅ～

【Ｎコード】

Ｎ７６０６Ｘ

【作者名】

御奈坂　緋結華

【あらすじ】

時に働き、蹴り、殴り、撃ち、斬り、戦い、騒ぐ。

一風変わった喫茶店「フラトレス」で繰り広げられる、人外ギャグコメディー。

Prologue Day. 0

長閑な朝の陽射しを浴びながら、俺は店のドアを開けた。
ふわりと漂ってくる珈琲の匂い。
誰よりも早く来る俺だけの特権だ。
店内に入ると、まずは窓を開けていく。
爽やかな風が入り込んできて、篭った空気を押し出してくれる。
換気を終えると、次は調度品の掃除。
朝と夜、毎日欠かさず綺麗にする。
テーブルを濡れた布巾で拭き、椅子の位置を整える、見た目から綺麗にしておきたいからな。
客席が終われば、そのままカウンターの内側へ。
前日に片付けた調理器具を並べなおして、倉庫から豆や葉を取ってくる。
湯を沸かしながら各機材のチェック、急に点かなかったら困るからね。
沸いた湯を使って最初の珈琲を淹れる、うん、今日もいい感じだ。
開店準備も済んだところで、俺は淹れ立ての珈琲を飲みながら一服する。
紫煙がゆらゆらと漂う様を見ながら、俺は後から出勤してくる仲間を待つ。
起業して、この店を共にオープンさせた大切な仲間…なのだが。

「チッ、また寝坊してやがるなあいつらは。」

流石にそろそろ起きてもいい時間帯だ、そもそも9時から来ている俺でさえ割とゆっくりした時間配分だろう。
と、そう思った矢先。
ドアに付けられたベルを鳴らしながら、４人の待ち人が入って来た。

眠たそうな顔が三つ、呆れ顔が一つ。
まったく、あれほど夜更かしはするなと言っておいたはずなんだがな。
「おいド阿呆ども、とっとと起きねえと今日のランチメニューに加えんぞコラ。」
「……どうして朝はまたやってきてしまうん？」
寝惚け面かましたた弟に渾身の回し蹴りをお見舞いする。
その勢いでテーブルの角に頭をぶつけると、声にならない呻きを上げてのたうち回った、流石にこれで目覚めただろう。
暫くそれを眺めていると、突如起き上がり、天井に向かって唸り始めた。
「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉん！」
「まさか…暴走！？」
そのままの勢いで更衣室へと走っていく、チィ、馬鹿を一人取り逃した。
そして振り返る。
すでに一人は目覚めの一服を始めている、あぁ、俺の珈琲まで…。
残った一人、図体だけ無駄にデカイ馬鹿はいまだ夢の中に居るようで、ふわふわとおぼつかない足元のまま更衣室に向かって歩き出す。
ふむ。
俺は迷わず、手にしていた煙草をその阿呆に押し当てた。
一瞬の空白。
「って熱い！？ちょ、酷っ！兄さん、いくらなんでも酷くない？？」
「おぉ目覚めたか木偶の坊、とりあえずその薄汚い面に熱湯ぶっ掛けてしゃきっとしなさい。」

「火傷だよねぇ！？確実にそれ火傷確定だよね！」
「ぎゃあぎゃあと朝っぱらから五月蝿い奴だな、だったらしっかりと睡眠とって働きにきやがれ。」
ぶつぶつと文句を言いながらカウンターで火傷を冷やし始める。
それを一瞥し、唯一しっかりと起きているらしい一人に話しかけた。
「すまないなカオリ、馬鹿が三人も居ると起こすのに手間取ったろ？」
「もう慣れたし、最近は物理的手段で叩き起こすから。」
「それは頼もしいことだ。じゃあカオリはレジのチェックを頼む、俺は店の前を掃除してくるから。」

慣れた手つきで香織はレジへと向かい、俺は掃除用具入れから箒を取り出し店の外へ。
通勤や通学のラッシュを終えた商店街は、とても静かで寂れた雰囲気がある。
まぁ何処の店もシャッターを閉めていれば当然なのだが、皆中で開店準備をしているのだから仕方がない。
俺は細かい砂埃を箒で掃き取り、舞い上がらないように水を撒き始める。
すると幾つかの店舗もシャッターを開け始め、少しずつ活気が満ちてきた。
もう３０分もすれば朝市を目指した逞しい主婦の方々が、家の諸事を終え、買い物袋を携えて闊歩し始めることだろう。
何人か商店街の人々が挨拶をしてくれたり、今日も頑張ろうと応援してくれたりする。
うん、この雰囲気が俺はとても好きだ、夢見ていた景色そのものと言えるね。
俺は掃除を済ませ、お隣の店舗のご主人に挨拶を終えると、晴れや

かな気分で店内に戻った。
まぁそこで気分は一変するが。
まず、先ほど俺の珈琲を奪い取って一服をしていた男、ヒロトがテーブルに突っ伏して寝ている。
次は俺に煙草を押し当てられたアホ、ホカゾノがウザってぇテンションで珈琲を淹れる練習をしている。
……まぁこれは別に間違っていない、単に鬱陶しいだけだ。
そして更衣室に暴走しながら走っていった弟、キヨシが珈琲を待ち望む客のようにカウンターで煙草を吸っている。
カオリは既にレジの起動を済ませ、更衣室に向かったようだ。
俺はベストの内側に忍ばせていたガスガンを取り出すと、その三人に容赦のないマガジン掃射を決めた。
むくりと起き上がるヒロト、大丈夫、ヒロトは起きれば働いてくれる、単に低血圧な所為で朝が驚異的に弱いだけだ。
次に弟くんへと狙いを定める、既に逃げ始めている辺りは慣れている。

「まぁ逃げるなよ弟くん、逃げたって結局は同じなんだぜ？」
「いやだって仕事はもう済んだし、珈琲くらいは良いでしょ！？」
「その仕事とはいったい何だ？」
「あ……着替えるでしょ、店を見て回るでしょ、今日も兄さんはきちんと仕事をしているなって感心するでしょ……俺は今日も頑張ろう！」
「そうかそうか、そんなに閻魔様と珈琲を飲みたいか。」

迷わずに撃ち続ける、悲鳴が木霊する。
ガシャッ！
チッ、弾が切れた。
俺は新しいマガジンをリロードすると、既に見える範囲から消えているド阿呆を探しに出かける。

弾薬を薬室に装填し、猫なで声で声を掛ける。

「トシユキく～ん、馬鹿だから拷問ＤＥＡＴＨ！」
「何で！？てかウチは特に悪いことしてないじゃん！」
「おやおや～？そっちから声がしたなぁ。」

俺は最高にハッピーな笑顔で靴音を響かせながら、ゆっくりと裏手の倉庫へと足を向ける。
中で恐怖に慄く馬鹿の顔を想像すると、今日も一日頑張ろうって気分になるね、ゾクゾクシチャウ。
扉をゆっくりと開けると、中にはこちらに引きつった笑みを向けるカスが一匹。

「さぁ、楽しい殺戮ショーと洒落こもうか。」
「いやいやいや！だから何故ウチに撃つの！？」
「う～ん……ただの気分かな、一日の始めに精神のハリを取り戻さないとさ。」
「めっちゃとばっちり！？」
「まぁそういうことだから、おとなしく死んでくれや。」

何か言おうとするのすら遮るように、俺は幸せいっぱいな笑い声と共に銃口を馬鹿へと向けた。
こうして俺たちの店、フラトレスは開店する。

7月25日　Day. 1

……ミーンミーン。

……ミーンミーンミーン。

……ミーンミーンミーンミーン。

ウザい。
これ以上ないほどにウザい。
ただでさえ今朝の事で機嫌が悪いのに、このクソッタレなオーケストラの所為で尚更イライラする。
あのド阿呆が食器を割る音の方がよっぽどマシだ、溜まった分のストレスをいくらか発散できるからな。
馬鹿の骨が奏でるリズムはたまらねぇ、管楽器にも負けない音色だ。
それに悲鳴のコーラスと血の飛び散る拍手まで加われば最高なんだ、皿一枚くらいの損失なら安い。

……ぶるる。

ヤバいな、思い出したらゾクッと来た。
さ、今はそれよりも早急の用を片付けるとするかな。
この忌々しい暑さから抜け出すには、とっとと仕事を済ませて涼しい我が家に帰るのが一番だ。

……一応帰りに店を確認してから寛ごう、下手をすれば店が半壊してても不思議はねぇ。

蝉の非生産的な雑音を必死に無視しながら、俺は目的の店へと向かう。
隣町の珈琲豆専門店。
いつも俺が豆の注文をしている中々の優良店だ、店長さんとも仲良しだし。
別にわざわざ歩かず素直に電車を使えば良いのだが、無駄な金は使いたくない。
住宅密集地帯の並木道を気だるげに歩きながら、滴る汗を拭う。
そろそろ車の免許でも取るかな。
学生時代から取ろうと思いつつ暇がなかったからなぁ、時間は掛かるけど休みの度に教習所行くか。
意外に早歩きだったんだろう、気が付けば駅前の繁華街に着いていた。

てか通り過ぎてるし、かったりぃ。

少し戻って目的の店に入る、あぁ涼しいって幸せ。
カウンターに立つ店員が俺に気付いて笑顔を向けて会釈する、相変わらず店員の質は良いな、ウチの馬鹿共も見習ってほしい。
適当に手を振って奥の事務所に入っていく、ちゃんと許可は取ってあるぞ、不法侵入じゃないから。
戸を開けると中で店長の板橋さんが珈琲の味見をしていた。

「こんちは板橋さん、また新しい銘柄仕入れたのか？」
「お、また直接来たのかい？電話くれたら配達に行くのに、暑いのに真面目だねぇ。」
「格安で仕入れてもらっておいてそこまでさせられないッスよ、それに毎回のお礼も兼てるんだから。」
「気にせんで良いのに。まぁ座りなよ、折角だし飲み比べしていくかい？」

「面白そうだな、是非とも。」
俺はパイプ椅子を引き寄せて座ると、板橋さんが幾つかの珈琲を出してくれる。
「ちょっとマイナーな制作者だから味は判らないが、香りは悪くないよ。」
「エメラルドマウンテンに似てるな、んじゃいただきます。」
俺は全部の珈琲を少しずつ味見する、合間に水を挟んで僅かな違いを楽しむ。
「うーん、こいつはイマイチパンチに欠けるな、これはアイス向けの味だ、こっちはエスプレッソかな。」
「結構感覚が良くなってきたね、頑張ってるじゃないか。」
「サンキュー。とりあえずウチでもちょっと試してみるから、これとこれを追加で少し貰えるかな？ここに今日の発注分が書いてある。」
「了解、ちょっと待ってな。」
板橋さんが発注書を見ながら奥の倉庫にいなくなる。
しかし、相変わらず気楽な店長だ、だからこそ取引先をここに決めたんだが。
暫くすると板橋さんが注文品の入った紙袋を持って倉庫から出てきた。
「てか君は今日非番かい？私服なんて珍しいじゃないか。」
「今更だね店長。あぁ、久し振りの休みだよ。あの馬鹿共に店を預けるのは不安すぎるからな。」
「休みの日まで仕入れとは働き者だな。もし時間があるなら車で送

ってあげよう、在庫確認の途中でね、終わるまで珈琲でも飲んで待ってなさい、３０分くらいで終わるから。」
「良いんですか？助かるッス、暑い中帰るのは億劫で。」
笑いながら板橋さんが珈琲を淹れてくれる、この匂いはエメランの最高級だ、毎回ありがたいね。
さて、待っている間に店へ電話でもいれとくか。
俺は携帯を取り出すと、店の番号を呼び出して通話ボタンを押す。
数回のコール音のあとで、向こうと繋がった。

「はい、フラトレス珈琲店でございます。」
「カオリか、俺だ。」
「あぁ、どしたの？用事？」
「いや、店は……と言うより馬鹿共はちゃんと働いてるか？」
「うん、珍しく食器も割らないし真面目に働いてるよ。」
「なら良かった、引き続きしっかり頼むわ。何か買ってきて欲しい物はあるか？」
「あたしはないけど……ねぇ、何か欲しいものあるかだって。」
するとドタバタ音がして、蝉にも負けない声量で声が聞こえる。
「俺はアイスが食べたいよお兄さん！安いのをできるだけ！」
「「煙草！！」」
「判った、特になさそうだな。板橋さんに送ってもらうから帰りはもう少し遅くなる、それじゃな。」
「気をつけてね。」
最後に背後で騒ぐ声がしたが、とりあえず放っておこう。
それからは美味い珈琲を飲みながら板橋さんを待っていた、たまには静かな場所も良いな。

ゆっくりした時間が流れる場所は、自然と心を落ち着かせてくれる。
ウチの店もそうしたいのだが、最近じゃあの騒がしさを楽しみにして来る常連さんが増えちまった、まぁ売り上げが安定するのは良いことなのだが。
すると、在庫確認を終えた板橋さんが戻ってきた。

「待たせて済まないね、それじゃ行こうか。」
「わざわざすみません、ありがとうございます。」
「気にしなくて良いよ。先に幾つか寄るとこがあるから少し時間は掛かるけどね。」
「大丈夫ッスよ、お願いします。」

板橋さんの車の乗り込むと、幾つかの取引先に立ち寄ってからフラトレスへと走っていく。
フラトレスがある木野塚商店街に着くと、車は静かに停止した。

「ありがとうございます、助かりました。」
「またいつでも来なよ、新しい豆を用意しておくからさ。」

会釈すると車が走り去っていく。
俺はまた暑い夏の商店街を歩きだす。
途中駄菓子屋に立ち寄ってアイスを買い、煙草屋でセッターを二箱買っていく。
さらにパン屋でケーキを買うと、両手に大荷物を抱えて店に向かう。
にしても暑いな、店なら涼しいだろう。
だが、何か聴きたくはない音が聞こえてきた。
皿の割れる音と、笑い声。
嗚呼、折角わざわざ買ってきてやったというのに。
俺は先に自宅へとケーキ等を運び込み、倉庫へ豆をしまってから自

室へと向かう。
壁にかけてある刀を掴むと、俺は騒がしい店内へと歩いていった。
暫く悲鳴が途絶えなかったのは言うまでもない。

8月4日　Day. 2

相変わらず暑い日々が続いている今日この頃、皆様如何お過ごしだろうか。
俺は苦手な暑さと戦いながら、毎日一生懸命仕事をしている。
朝は早くから料理の仕込みをしたり、店の前を掃除したり、意外にやる事が沢山あるんだ。
でも眠気は朝の静謐な空気を吸えば落ち着くし、体を動かしていればけだるさも抜けていく。
でも忙しいからって鍛練は怠らない、今でも毎日刀と銃には触れている。

……毎日馬鹿が下らない戯言を欠かさないからね。

まったく、その所為で店の壁には刀と銃が掛けてある、いつでもすぐに使えるようにさ。
別にウチはミリタリーショップでもなければ和風の茶菓子を扱ってるわけでもない。
静かで落ち着ける場所を目指した、普通に洋風の喫茶店だ。
本当はこんな物騒な物は店の景観も損ねるし置きたくはない、何より趣味で集めた物は部屋に置きたいのだが……。
だってさ、アンティークな調度品に混ざって日本刀とショットガンが置いてあるっておかしいじゃないか。
最近は見慣れてきて調和がとれてきちゃったから、それが凄い嫌だ。

「おっはよー兄さん、今日も早くからご苦労さん！」

俺は躊躇いなく壁のショットガンを掴むと、素早くショットシェルを装填し、薬室に弾丸を送り込む。

僅か０．５秒の動作スピード、慣れ過ぎた、戦場かここは。
最早見なくても馬鹿の眉間を撃ち抜けるテクニック、片手でも手ブレなし、プロだねこりゃ。
指に力を込める、扉が開くと同時に撃ちだす。
扉が開き、俺はトリガーを握る。

――俺は無理矢理、弾丸の軌道を変えた。

既に発射された弾が銃口から飛び出すよりも速く、銃を上に蹴りあげる。
弾は銃身内でぶつかり、天井に向けて撃ちだされる、あぁ、また電球が割れた。
さて、この始末はどうつけようか。

馬鹿のとった行動は単純明快、要は俺が撃てないようにすればいい。
少しは賢いじゃないか、まさかカオリを盾にしながら入ってくるとはね。
確かにこれでは撃てない。
いや俺は撃ったが軌道を変える必要になった、無茶な動きをしてでもだ。
事実馬鹿は被弾せず、今も驚いた顔でこっちを見ている。

「うわ、撃ってきやがりましたよお兄さん。」
「でも無理矢理当たらないように蹴りあげてるし、相変わらず化け物だなぁ兄さんは！」
「ふむ、蛆の湧いた脳みそで考えた割には賢い回避法だなぁクズ共。」
「でしょ！流石はウチのおつむ、いやいや誉めないで、ノーベル回避賞は後日ね。」

「……だけどさぁ、ちょっとだけ間違えたよなぁ、うん、少しだけ詰めが甘いよ。」

カオリは掴まれていた腕から逃れると、一目散に事務所へと走っていった。

「完璧な作戦勝ちだよ兄さん、負け惜しみは潔くないなぁ。」

「君の低能ぶりは怒りを通り越して哀れみさえ感じるよ。あのさぁ、盾を使うってのは賢いと思うよ、カオリを盾にするのも正解だ、俺がお前らに撃てなくなるからな。でもそこで気付くべきだった、間違えたよなぁお前らは……盾にした人が俺にとっての何なのか、もっと深く考えるべきだった。」

俺はショットガンを壁に戻すと、カウンター席の板を外し、中から彼のブリテン王が振るいし剣を取り出した。

「そんな所に隠し武器が！？」

「さぁて、今日は釣りに出掛けよう。黄泉でバス釣りと洒落込もうか……お前達だけだがなぁ！」

数時間後。

「こんちはマスター、いつもの珈琲……どうしたトシユキくん、その顔は。」

「いえ、何でもないッス……。」

「いらっしゃいませ沢井さん。そこのクズはお気になさらず、どうぞこちらの席へ。」

「彼はまた何かやらかしたのかい？」

「お恥ずかしながら馬鹿の教育不足でして、怖いもの知らずで困ります……そうだなぁ？」

ヒィと小さく悲鳴を上げ、傷だらけの馬鹿がテーブルを必死になって拭きあげる。
沢井さんは苦笑しつつ、俺が淹れたブレンドを飲む。

「うん、やはり朝は珈琲だね。」
「その通りですね、私も朝から暴力ではなく珈琲を楽しみたいですよ。」
「あはは……。そういえば昨日までそこに掛けてあった刀はどうしたんだい？」
「今朝、天寿を全うしましたが…何か？」

沢井さんが身震いしつつ、哀れみの目でホカゾノを見る、黙祷までしてやがる。
さて、そろそろお昼時だな。

「そこのカス、厨房に行って準備しやがれ。涙で味を変えたら……言わなくても判るよな？」

鬱陶しいくらいにわざとらしく走っていく。
チッ、もうふざける程度には回復しやがったか。

それからは忙しかった。

流石にこの時間帯はふざけてる余裕もない、カオリを呼んで五人で目まぐるしく働く。
大体は気が付けば１５時を過ぎている。
そろそろ休憩を挟むか。

「そこの馬鹿二人とヒロト、ちょっくら休憩行ってこい。カオリはもう少し待ってくれ。」
「んじゃ～行ってくる～。」
「さ～て煙草だなぁ。」
「疲れた～。」

ぞろぞろと気の抜けた三人が厨房の奥に消えていく、少しは客に気を遣え。
溜め息を吐いた俺を、カオリと一部のお客さんが苦笑して見ている。

「一緒に休憩してきたら？落ち着いてるし、あたしでもどうにかなるよ。」
「…すまん、忙しかったら呼んでくれ、どちらにせよすぐ戻る。」

店をカオリに託すと、厨房へと入る。
厨房の奥の倉庫に裏口の扉があるんだ。
吸い殻を適当にされると厄介だからと、わざわざ吸い殻入れまで用意したスペース。

「いやぁ、それじゃつまんないでしょ！」

ん？
何か会話に熱が籠もってるな。
気配を消して、とりあえず聞き耳。

「そろそろライオットシールドを買ってちゃんと防がないと流石に死ぬよ。」
「いや、それなら鎖かたびらでしょ。不意に斬られても大丈夫！」
「いい加減やめとけば良いじゃん。」

良いこと言ったなヒロト！
てか斬られること前提の会話を初めて聞いたわ、しかも自然な雰囲気なのが謎すぎるだろ。
流石に今日はやり過ぎたか？
頭の何処かが更にいかれたのかもしれない、加減するべきだろうか。

「あ、名案を思いついた。」

……何だか嫌な予感しかしやがらねぇ。

「兄さんの刀を奪えば良いんだ！」

……あん？

「兄さん秘蔵の大典太とか、あの辺りをウチらが構えてたら攻撃できないでしょ、兄さんの破壊力じゃ確実に叩き斬るし！」
「確かに、傷もつけたくないから銃も撃てないな。……どうしたヒロト、どこ行くの？」

無言でヒロトが遠ざかるのを感じる。
流石はヒロト、危険察知が上手くなったな。
そこに居たら無関係でも無事じゃ済まないからさ。

キィ……。

振り替える二人。
最高の笑顔の俺。

「や……やぁ兄さん、に、兄さんも休憩……かな？」

「あぁ、そうだよボブ。ボクはとても疲れているからね、ははは。」
「あ、あはは……ボブ、まさかお兄さんは俺たちの会話を……。」
「ハハハ、まさかそんな……ねぇにいさグハァ！」
「テメェが探してた刀はこれかぁ？」
「あ、相変わらず至るところに隠してあるね…お茶目だなぁ兄さんは。」
「――辞世の句はそれでしまいか？」
「兄さんそれ今世紀最高のギャグ。」
「……滅殺？」
「何で疑問文ー！？」

――さて、今日も変わらない毎日だね。

8月17日　Day. 3

夕方になり、静かに夜の帳が落ちる頃。
俺は既に閉店作業を進めていた。
食器を棚に戻したり、グラスを布巾で磨いたり。
このゆったりとした時間が俺は好きだ、今日は邪魔な奴らも出払ってる。

今日は近くに流れる九十九(つくも)川で、年に一度の花火大会がある。

俺たちが店を出している商店街も積極的に参加していて、今回からは俺たちも出店を開くことになったんだよ。
正直言って金にはならない。
祭りを盛り上げるのと宣伝を兼てるから、まぁ出来る限り安く提供しようって事らしい。
用意した物を売り切ればプラマイゼロ、売り切れなきゃ赤字が確定、要は生産性なしの残業なんだが。
またどういうわけかあの馬鹿共がテンション上がっちゃってさ、やる気出してるし、付き合いってもんもあるからなぁ。
物凄く渋々ＯＫを出したんだが、あの時のアイツの言葉が不安でならない。

「兄さんはお客様だから、手伝わなくて良いから！」

や、偉そうな事を言いやがるけど出費は俺の金だからね？
まぁ資材調達から会場準備まで全部自分達で頑張るからなんて言われたからね、ちょっと感動しつつ頑張れなんて言ってしまったわけさ。

後で通帳を確認したら少し……いや、かなり予定よりも金が減っていたが。
でもこれも勉強だよな。
これで資材調達とか任せられるようになったら俺も楽になるし、最初の頃は俺だって失敗してたし。
それに結構期待してるんだよな、あいつらそれぞれの休みの度に調べたりしてたみたいだし。
……一応カオリを監視役にしたから多分大丈夫だろ。

時計を見てみると既に１９時を過ぎている、丁度花火大会が始まった時間だ。

花火を打ち上げるのは確か２０時くらいだったかな、今からなら間に合うか。
最後のグラスを磨き終わり、店の防犯を確認していく。
制服から私服に着替えて、よし、行こうかな。
人気のなくなった商店街を、九十九川に向かって歩いていく。
通学路に出ると、はしゃぎながら走る子供達が脇を抜けていった。
いつもなら注意するけどさ、今日はご愛嬌かな。

川沿いに出ると、そこは光の森だった。

川の左右に出店の光が並んでいて、独特の賑わいをみせている。
何処の出店にも出店者の店名が看板になってる、凄い判りやすいな。
さて、ウチの店はどの辺りにあるんだろうな。
あいつら一切位置を告げないで行きやがって、この中から探すのは大変だっつうの。
ん、たこ焼きじゃん。

店名は……あぁ、惣菜屋の菅野さんか。

「いらっしゃい！お、喫茶店のマスターじゃないか、珍しく私服だなぁ。」

「あはは、お疲れ様ッス。」

「あれ？でも確か出店出してなかったか？兄ちゃんは休みかぃ？」

「あぁ、なんか他の奴らが頑張るからって。だから労いの品を買いに。」

「そうかいそうかい！ならこれ持ってきな、二つくらいで良いかい？」

「ありがとうございます、ではまた惣菜買いに行きますね。」

テンション高い菅野さんから出来たてのたこ焼きを受け取って、会釈しつつその場を離れる。

はぁ、相変わらずクソたけーテンションだよまったく、無駄に疲れるなあれは。

土手添いに並ぶ出店に視線を巡らせながら、馬鹿の出した店を探す。

すると、凄い賑やかな一角を見付けた。

そして何故だか溜め息が出た。

何となくだが、あれがウチの出店に思える。

まず看板に「超美味い？これが噂の！」って書いてある、最悪に汚い文字だが。

大体看板に疑問符浮かべてる時点でまともな気がしない、それに最近出店の噂などまったく聞いていない。

何が怖いって、何を売ってるのかが書いてない、食べ物だろうと言うのは判るが。

「食いやがれー！美味いに決まってるのさ！」

「暇なら食え、腹一杯食べよ！」

「もぐもぐ……美味いよこれ。」

ソースの匂いがするから、焼きそばかなぁ。
匂いは美味そうだ、こういう場所だと尚更だな。

「よぉ、意外に盛況じゃないか。」
「へいらっしゃい！美味いよ焼きそば、お兄さんも食ってきな！」
「いやウゼえから、もうそういうノリはお腹いっぱいだから。」
「ノリ悪いねぇお兄さん、冷やかしなら帰んな！」
「……仕方ない、この差し入れは俺が一人で食うかな。」
「お疲れ兄さん！流石は兄さんだぜ気が利いてるなぁ、もうこの照れ屋さん。」
「いただきま～す。」
「いやごめんなさいマジ調子乗りました。」
「初めから健気にそう言えば素直にくれてやるのに。」

俺は屋台の裏側に回ると、置いてあったテーブルに袋を置く。

「さてヒロト、ちょっとお兄さんとお話しようか？」
「いや、大丈夫。」
「黙りなさい阿呆予備軍！何でお前はもりもりと焼きそば食いやがってる？」
「腹が減ったから仕方なく。」
「ったく、赤字が確定する様を身内に見せられるとはな。カオリはどうした？」
「今は休憩。アイツらが頑張ってるから暇だって。」
「だろうな、アイツら無駄に清々しい顔してやがる。ウザいうえに暑苦しい、おまけに呼び込み方に礼儀がなさすぎる。まぁ残念なことにそれが最近じゃウチの売りになってるが。」

てかマジで売れてるな、あのテンションの高さが客を呼んでるのか。

またあの馬鹿は調子に乗りそうだ、欝陶しいだろうなぁ。
振り替えると既にヒロトがたこ焼きを貪っていた、どんだけ食うんだこいつは。

「んじゃ～ちょっとしたパフォーマンスといきますか、キヨシ！」
「はいよ！さぁ燃え盛れお兄さんの秘蔵酒！」
「おのれ貴様ー！」

俺が買っていた高級梅酒が、焼きそばなんぞをフランペしてやがる。
次の休日に飲もうと思ってたのに…。

「やーめーろーよー、高いんだよー。」
「あ、兄さんが泣いた。」
「あっはっは、これで邪魔者は戦闘不能だぜ！」
「さぁやりたい放題だ！みんな見てごらん！この梅酒の炎の向こうには、なんと悪魔がみっともなく泣き喚く貴重な光景が！」
「ほらほらもっと燃えるぜーってギャース！俺の前髪がー！」

あはは、あはははははは。
だから嫌になる、自分の浅慮さに腹が立つ。
やはり馬鹿で阿呆に店を任せるなんて間違いだった、夢物語も甚だしい。
カオリがいなくて良かった、俺が起こす光景は壮絶だからな。
実はこの時は既にカオリは帰っていたらしいのだが、俺がゆらゆらと馬鹿共に歩くのを見て静かにヒロトを避難させたらしい、懸命な判断に恐れ入る。
俺がズボンの裾に隠していた忍者刀を二本取り出すと、お客様が笑顔のまま後ろにさがった、お気遣いに感謝致します。
左右逆手の体勢で、躊躇いなく二人の首筋に振り下ろした。
だが流石は百戦錬磨のゴミカス共、抑えきれない殺気を感じて一瞬

で避けやがった。
置いてあった酒ビンが、代わりに首とさようなら。

「ヤバいねキヨシ、兄さんガチだ。」
「まさか真剣まで手に入れていたとは、流石はお兄さんだぜ！」
「いやいやそこの前髪チリチリ、冗談じゃなく殺されちゃうよ！」
「空から見下ろす世界はきっと美しいだろうなぁ。」
「既に死亡確定！」
「ふはははは！神も憐れむゴミ共め、悪魔を怒らせた痛みを知るがいい！」

そこからは大暴れしたからあまり記憶にない。
覚えているのは、細切れになった服を必死に抱えながら走る馬鹿共と、それを見越したカオリがヒロトと一緒に店を回す光景だった。

9月2日　Day. 4

「３９．２℃、完全に風邪だね。」
「うぅ、最悪だ。ゴホゴホッ！」
「お盆まで働いてたもんね、疲労で体調が崩れたんだよ。店は……あいつらはあたしが見とくから安心して休んで。」
「すまん、助かるわ。」

冷えピタを額に貼って横になった俺は、心配そうな顔をして出ていくカオリを見送った。
とたんに部屋が静けさに包まれる。
街の喧騒は遠い。
それも当然か、この家は店の裏手にあるからな、この時間帯はまだ子供も帰ってきていないだろう。
時計には１０時１２分と表示がある、いつもなら馬鹿共を叩きのめし終わって漸く落ち着いた頃だ。
……大丈夫かな、何かスゲー不安になってきた。
ちゃんと仕込みは終えたかな、今更珈琲が淹れられないとかないよな。
まさか未だ扉に「ｃｌｏｓｅｄ」なんてぶら下がってないよなぁ……。

あぁ、心配だ、全力で見に行きたい。

でもダメだ、身体がいうことをきかん。
久し振りな風邪のせいかな、こんなに深刻だとは。
うぅ、ダメだ〜。

…。

……。

……。

あ、寝てたな俺。

頭痛ぇ。

「ぷぷぷ、無防備な寝顔晒しちゃって、うぷぷ。」

……判る、目を開けなくても判るわ。

こりゃあれだ、きっと今目の前にぶっ飛ばしたい顔があるに違いない。

あの薄汚い面をニヤニヤさせて俺を覗き込んでるだろうよ、まったく忌々しい。

ここはアレだな、ぶっ飛ばそう。

今の俺ではきっと大した威力が出せない。

なら初めから眉間の一ヶ所狙い、今の最大出力で打ち抜いてやる。

せーの、オラァ！

パリンッ！

「ってあっつ！」

「……起きがけにアクティブだね兄さん。」

熱い熱い熱い！！

何！？何！？

「あはははははは、兄さんトカゲの尻尾みたいにのたうち回ってる、あはははははは！」

クソがテメェ今それどころじゃねぇ！
全速力で熱さの原因を叩き落とす、何だこれぐちゃぐちゃしてる。
そして馬鹿はまだ笑ってやがる、冗談じゃねぇ熱すぎる。
俺は布団から這い出して枕元を見た……お椀？
白い何かが布団に散りばめてある、多分お粥。
見上げると腹を抱えてヒーヒー言ってる馬鹿がいる、その手には別のお椀と蓮華。

とりあえず全力でぶっ飛ばした、そりゃあもう風邪が悪化しそうなくらいに。

漸く痛みが引いたところで、馬鹿を踏み潰しながら問い掛ける。

「おい貴様、一体これは何の冗談だコラ。」
「酷くない！？ウチは兄さんの為を思ってお粥をお持ちした次第ですよ！？」
「ほぉ、そりゃあご苦労なこった。で、何で俺の顔にお粥が降ってきたんだ？」
「それは兄さんがいきなり殴ったからじゃん！」
「そんなifは知らん、死ねやボケェ！」
「理不尽！？」

再びラッシュ、格ゲーなら連打系の必殺技が出てる。
ひとしきり殴ったら、とりあえず汚れた枕や布団を取り替える。
ぴくりとも動かなくなった馬鹿は端に蹴り飛ばし、半ば朦朧とする意識の中で洗濯機を回しに行く。
洗っておけば放置するよりはマシだろう。
にしてもヤバいな、流石に暴れすぎたか。
部屋に戻ると馬鹿は居なくなっていた、あれだけ痛め付けたのにまだ生き返るか化け物め。

あー、もう良いや、寝よう。

……。

……。

……。

ピコピコ、ドカーン！

……。

ザシュッ！ザシュッ！

……。

てってれってー、てててててー！

「あのさヒロト。」

「はい？」

「ゲーム楽しいか？」

「これはちょっと簡単すぎますよね。」

「そうか。」

「はい。」

……。

ピコピコ……ピコピコ。

「あのさヒロト。」

「はい？」

「俺が風邪を引いてるって知ってる？」

「知ってますよ、だからこうして看病に来てるんです。」

「だったら頼む、気になるからゲームは余所でやってくれ。」
眠れないのはマズい、流石にそろそろちゃんと休まないと。
「あぁそっか、判りました。んじゃ俺は店に戻るんで、何かあったら店に電話ください。」
「あぁ、そうするよ。」

ヒロトとピコピコが遠ざかっていく、やっと寝れる。
でも何だかんだと二人とも優しさで来てくれたんだよな、ちょっとくらいは我慢すべきだったか。

「ところがどっこい、世の中そんなに甘くない眠れない！」
「帰れ。」
「随分冷たくあしらうじゃあないか？」

そりゃ冷たくもなる、阿呆がマイク持って現われたらな。
もう二度と見たくないくらい最高に楽しそうな笑顔だ、いや参った、絶対確実に不吉だねこれは。

「さぁ、傘に穴が開いてないか確認する作業に戻ろうか。」
「やや、俺はそんな地味な働き者じゃないぜ！」
「これはあれだな、純度１００％で嫌がらせだな？」
「むふふ、いやいやお兄さん、ボクがそんなことするように見えますか？ぷぷっ。」
「ニヤニヤしながらマイク持参で病人の部屋に来たら間違いなく嫌がらせだろうド阿呆！」
「違いますとも、俺はお兄さんが安らかに眠れるように子守唄を歌うため馳せ参じた次第でございますのことよ！」
「よし帰ろう、今すぐ帰ろう、さぁ帰ろう！」

「まぁまぁとりあえず一曲目いってみよー！」

このあとはひたすらに地獄のメドレーだ。
俺は必死に眠ろうとした、アニソンが響き渡る自室で。
体力があれば刹那の時間さえかけずに塵へと変えてやるのに、あぁクソったれ。
耳を塞ぎながら布団に籠もっていると、もう一人の馬鹿が乱入してきた。

「そんなことより俺の歌を聴けー！」
「なにぃ！おのれ、負けるか！唸れ俺の美声！」
「ふふん、天使の声と言われたウチに勝てるかな？」

あぁ安心しろ、どちらも下手ではないだけだから、確実にお世辞だから。
最高にハイなテンションで歌いまくる二人、頼む死んでくれ。
ひとしきり歌い終えて、馬鹿共が俺に向かって問い掛ける。

「「どっちが上手かった？」」
「どっちでも良いわ馬鹿共が！もういい貴様ら表へ出ろ！」
「そこで現れるのが真打ちってもの。」
「「ヒロト！？」」
「さぁボクの歌を聴くんだ。」

紡ぎだされるメロディ、まさに美声、先程までのジャイアン共とは比べるべくもない。
流石にこれは聴いてた、出てきたタイミングは最悪だったが。
てかさっきから気になっていたんだが、毎回ちゃんと伴奏がついてるのはどういうカラクリだ、いつの間にスピーカー仕掛けやがった。

「ブラボー！」
「自分で言った！？」
「わたくしも敗けられませんわ！」
「誰！？」
「ま、敗けてなんかやらないんだから！」
「ツンデレ！？」

はぁはぁ、結局ツッコミなのか俺は。
ダメだ、もう体力が……。

……。

「大丈夫？」
「あぁ、お陰さまでぐっすり眠れたよ。」
「あいつらはキチンと叱ったから、今は反省文を書いてる。」
「昔から特にあの馬鹿は反省文が好きだな、遅刻の常習犯だったから。」
「まだたまに寝坊するけどね。」
「その分生傷が減らないけどな。」
「そうだね。じゃあもう寝ようか、明日からまたよろしくね。」
「あぁ、任せておけ。」

……。

「ふはははは、死ねクズ共！」
「あはは、兄さんが最高に楽しそう、死ぬかもなぁこれは。」
「良いから走れ、諦めたらそこで人生終了！」

「わぉ、諦めるってめっちゃ重い！」
「貴様らの額もあの皿たちのように粉々にしてくれるわー！」
はい、今日もいつも通りです。

9月16日　Day. 5－1

パリーン！

「……。」

「……。」

「なぁ馬鹿野郎、今日は何枚目だ？」

「えっと、俺は二枚目？」

「ボケろつったかテメェ！」

「ちゃんと報告したやんかー！」

「テメェのどこが二枚目だとボケェ！鏡見て生まれ変われカスがー！」

「そういう意味じゃないー！」

「お兄さん荒れてるなぁ、この間の風邪の時にふざけすぎたかな？」

「いい加減にしないとそろそろ本気で殺されちゃうよ？」

「いやいやカオリさん、お兄さんはいつでもガチで殺しにきてるから。」

「ねぇ珈琲まだー？」

「ヒロトくん、仕事しようか。」

あの風邪を引いた日。

翌日店に行くと皿の数が半分に減っていた。

これはアレだ、神様が殺しても良いんだってお許しをくれたんだな。

元気になった体で渾身の抜刀術、馬鹿野郎共は瀕死。

余計な出費がかさむ。

折角節約してとあるイベントを企画していたのに、お陰で一週間先延ばし。

お客様にも恵まれて、今日の売り上げが入ればやっと取り戻せる。

中止にしようか迷ったが、一応雇用者の俺としては夏休みの代わりを作ってやりたい。
そろそろ話すかな。
半殺しにした馬鹿を放置して、洗い物をしている二人に声を掛ける。

「来週は三日間店を閉めるから、それぞれ準備をするように。」
「あれ、何かあるの？」
「夏休みが取れなかったからな、ちょっと皆で二泊三日の温泉旅行を企画してみた。幸い今年の夏は売り上げも良かったからな。」
「やったー！パリンッ！」
「……でだ、多少余裕を作りたいから今週は頑張ってくれ。」
「ツッコミ諦めたね。」
「よっしゃー、気合い入れて売りまくるぜー！」
「なぁ板橋さん、何か食えよー！」

ゴッ！

「失礼しました。板橋さん、気にせずゆっくりしていって下さい。」
「……トシユキ君死ぬよ？まぁ折角だし私もカンパしよう、珈琲のおかわりとＢＬＴサンドを貰おうかな。」
「気を遣っていただきすみません。カオリ、ＢＬＴを一つ頼む。」
「はーい。板橋さん、ありがとうございます。」
「気にしなくて良いよ、ここは落ち着けるからね。」
「おいヒロト、塵に変えるよ？」
「さて、夕方からのタイムセールに行かなくちゃ。」
慌てて店の財布を掴み走り去るヒロト、まぁ働くならばいいか。
「おい愚弟、今の内に倉庫の整理と在庫管理してこい。」
「Ｓｉｒ，ｙｅｓ　Ｓｉｒ！」

「普段からあれくらい働けば良いのに。」
俺は呆れつつも珈琲を淹れて、ベーコンの良い匂いのするＢＬＴサンドを板橋さんに手渡す。
「ありがとう。来週は新作のブレンドが完成するから週末にでも届けさせるよ、ラテにすると美味いよ。」
「それは良いですね、最近ちょうどラテの注文が増えてるので。」
「客層が変わったのかな？」
「はい、高校生が増えてきましたね。お陰で夕方以降は賑やかになってますよ、文化祭が近いみたいで。」
「話し合いでもしてるのかな？」
「そうみたいです。喫茶店を計画してるらしくて色々と相談されました、その内豆を買いに行くと思いますよ。」
「お、斡旋してくれたのか、ありがとう。」
「まぁ高校生なんで少し割引くらいしてやってください。」
「あぁ、良いのを探しておく。」
するとちょうど賑やかな話し声が聞こえてきて、間もなく件の高校生達が入ってきた。
「マスター、この間の話どうなりました？」
「ちょうど良かった、そちらにいらっしゃるのが例の珈琲豆を扱ってる板橋さんだよ。板橋さん、ちょっと相談に乗ってあげてくれますか？」
「勿論だとも。こんにちはお嬢様方、私が板橋だ。こんなオッサンで良ければ私が教えてあげよう。」
「やったー、ありがとうございます！マスター、昨日と同じ組み合わせで四人分お願い。」
「うん、任せなさい。そっちの広いテーブルが良いだろ、カオリは

タマゴサンドを四つ。」
「じゃあ待っている間に何を出すのか教えてもらえるかな？」
それから暫く会議をする五人を横目にしながら、混みはじめた店を回していた。
結構真面目に話を聴いていたようで、板橋さんが帰る時に妙に嬉しそうだった。
旅行を宣言したからか馬鹿野郎共は真面目に働いていた、これからもそうしてくれたら殺さなくて済むのに。
因みに真・馬鹿野郎無双のカスは終始気絶していた、当たりどころが悪かったか、まぁ邪魔だから蹴り飛ばしておいたが。
そのまま週末まで忙しく、割れた皿の数が奇跡的に一枚だけという最高の一週間だった。
……初めてじゃなかろうか、こんなに平和だったのは。
その報告の際に馬鹿が発したコメント。

「刮目せよ、これがウチらの本気だ！」

殺意が湧いたので夜まで再起不能にしておいた、筈なのだが、二分後には普通に旅行支度をしてやがる、なんて生き物だアレは。
だが、明日からの温泉に気持ちが浮ついていたのだろう。
俺はまだこの時、いつもなら予想できる筈の事態に頭が回らず、その旅行の日となったのだった。

9月23日　Day. 5－2

「準備はいいか野郎共ー！」
『おー！』
「あたしは野郎じゃないぞー！」
「準備はいいか皆の衆！」
『おー！』

太陽が眩しい朝っぱら。
デカい旅行鞄を転がしながら、俺たちは駅前へと向かっていた。
これから新幹線に乗って群馬に行き、山奥の山荘に泊まることになる。
向こうに着いたらバスで送迎って流れだ、時間はしっかり守らないと乗り遅れる。
つまりだ。

「おい馬鹿共と二人、良く聞きなさい。」
「何さ兄さん。」
「そうだな、特に貴様は良く聴いておけ。今回は時間厳守、さもないと置いていかれる。」
「何で？待たせれば良いじゃんか。」

……メキ、グチャ、ドスッ。

「はい、守らないとこうなります。」
『……はーい。』
「よし、じゃあ行こうか。」

ゴミクズと化した馬鹿を担ぎ上げ、荷物は纏めて引きずっていく。
朝のラッシュにもまだ早い、街は閑散としている。
俺は心地よい清涼な空気を吸い込むと、いつの間にか隣を歩いている馬鹿に荷物を投げつけた。
そりゃもう渾身の力で、奴の巨大な金属製トランクを。
ほぼゼロ距離の投擲、鈍い音を立てて吹き飛んでいく。
だが良く見ると馬鹿はしっかりトランクを受け止めて、軽やかに着地した。

「なぁ、何でお前は生まれてきたの？」
「あっはっは、愚問だよ兄さん。ウチは新世界の神となるためグハァ！」
「そうかそうか、まだ眠いのか。さ、寝言ほざく口は早急に閉じようか。あと心臓止めようか。」
「おっけ、今一つ目の心臓止めたわ。」
「俺が存在ごと消してやるわボケェ！」
「カズ君、とりあえず朝だから静かにしようよ。」
「あぁ、悪いカオリ。」
「……ぷぷっ、そうだよ兄さん、朝は静かにね、ぷふっ。」
「早朝から皆さん申し訳ありません、俺は今からこれを壊します。」
「冷静に殺害予告！？」
「はいお兄さん、村正。」
「ありがとう弟くん、これなら静かにあれを葬れるよ。」
「ホカー、俺たちは先に行ってるから。」
「あたしはもう知らないよ、朝からカズ君をおちょくるから死ぬんだよ。」
「ちょ、マジで死亡フラグなのこれ！？」
「日常の些細な判断から死に直面する事もある、勉強になったな馬鹿。」
「いやいやいや、これくらいの光景、高校生とか普通にやってるか

ら死なないから。」
「ふむ……平和だよな日本って。」
「寧ろ常に何処からか武器を取り出す兄さんがおかしい！」
「皆無用心だなぁ。」
「そういう問題！？」
「あっはっは、さっきから驚きの連続だね？」
「この化け物！」
「最後に言い残す言葉はあるかな？」
「まだまだ生きてはびこってやるんだ！」
「夢を大きく持つのは素晴らしい、叶わない夢でも少しは素敵だ。
さぁ、そろそろ時間も危ない、手短に済まそうか。」
「すかさずダッシュ！」
「待てやコラァ！」
「へへーん、馬鹿が見るー！」
「疾く逝ね下朗！」

駅に向かって猛ダッシュ、今なら光の速さで奴を消せるぜ。

さて、走ったお陰で早く駅に着いた。
都会行きの急行に乗って、そこから群馬に向かう。
始発でまだ空いている電車に乗り込み、五人は溜め息を吐いた。
朝から無闇にテンションを上げすぎた、何より無駄に暴れすぎ。
旅が始まって最初の移動で既に刀を抜いた、しかしそのお陰で流石に大人しくなったな。
今は腫れた顔を冷やしながら疲れ切っている、煙草の吸いすぎだなこいつは。
まだこの辺りでは大人しくしていた、弟くんは単に眠いのかテンションが低い、ヒロトは低血圧。

俺は一時の休息を噛み締めるように景色を眺め、ゆったりと背中を椅子に預けた。
まだ都市部には着かないからと、隣では早起きした三人が耐え切れずに寝ている。
今ならと思い、折角なのでカオリとの時間を楽しんだ、幸い周りには誰も乗っていなかったからな。
電車が駅に近くなると、文字通り三人を叩き起こす。
頭を撫でながら後ろを歩く三人を気にしつつ、乗り換えのローカル線へと乗り込んだ。
手動で開ける扉、小さすぎる車輌、通り過ぎていく人のいない駅。
他に乗客がいないことを良いことに、やおら歌いだす馬鹿。
俺は無視して眠ることにした、これからまた疲れそうな予感がしたからだ、保護者って大変。
中途半端な歌声を耳にしながら、少しずつ眠りに落ちていく。
そして馬鹿のシャウト、俺キレる、寝る前に軽く８０コンボ。
弟くんがＫＯのゴングを叩く。

「ふん、クズが図に乗るなよ！」
「ウォォォォ！ウチはまだまだやれるぜー！」
「ラウンド2、ファイ！」
「宿に着くまで永眠しやがれクソッタレ！」
「血沸き肉踊る！これぞ究・極・奥・技！オラオラオラオラ！」
「ふふん、容易く凌げるわボケェ！見よ！そして食らえ！旋牙連山拳！」
「そんな事より俺の歌を聴けー！」
「またそのパターン！？」
「ホカー、窓から飛び降りてみて。」
「無茶ぶり！？流石に死ぬから！」
「ほら飛べよ化け物、背中を押してやるからよ。」
「ホカゾノー、期待してるよ～。」

「飛〜べ！飛〜べ！」
「Ｉ　ｃａｎ'ｔ　ｆｌｙ.」
「人間やれば出来るさ、さぁ、飛んでごらん。」
「じ、じゃあって無理ー！」
『えー』
「どんだけ死んでほしいの！？」
「馬鹿の飛翔に全米が泣いたら良いなぁ〜。」
「希望！？」
「ホカ、それでも芸人か？」
「五月蝿い黙れ！」

ガヤガヤと街の喧騒にも負けない騒がしさで、俺たちは目的の駅まで喧しかった。
あぁ、結局寝れない。
駅に着くと、宿までのシャトルバスが停車していた、急いで駆け込む。
流石に観光シーズンからずれているからか、このバスにもあまり乗客はいなかった。
乗っているのはお婆さま方だけ、一応馬鹿共は黙らせておく、俺たちの五月蝿さじゃお年寄りには辛い。
岩だらけの山道をひたすらに登り、山を越えるとそこから宿まで下っていく。
頂上からの景色は絶景で、珍しく五人で息を飲んで魅入っていた。
遥かなる地平線と、山肌に掛かる雲。
否応なしに自分達が雲の高さにいることを教えてくれる。
緑豊かな山道を下り、山々の間に建てられた宿に辿り着いた。
バスから降り、長い廊下を男性に連れられて歩いていく、ちょっと懐かしい。
昔家族でここに来たな、一度目はまだ祖父も生きていたし、二度目は家族団欒だった、だからこの宿を選んだわけだし。

部屋は二つ。
俺とカオリ、馬鹿三人をそれぞれ分けた、じゃなきゃ絶対寝れない休まらない。
荷物を置いて一休み、茶菓子を食べながら一服する。

「こうして旅行するのは新婚旅行以来か、久し振りですまないな。」
「何か余計なのはいるけどね、子供が。」
「まったくだ、保護者ってのは大変だよ。図体ばかりデカい。」
「昔と変わらなくて良いんじゃない？あたし達はいつまでもこのままだよ。」
「そうかもな、それも悪くない。」

隣では既に騒ぎ始めているらしい、どうやら茶菓子を奪い合っているようだ。
さて、折角だし風呂に行こうか。
俺とカオリはお風呂セットを用意すると、静かに露天風呂に向かった。
長い階段を登って別れる、流石に混浴はないからな。
幸い誰も入っていなかった。
湯船に浸かり、ゆったりと寛ぐ。

「あぁ、やっぱ温泉って良いよなぁ。」
「しかーし！兄さんに寛ぎの空間などないのだった。」
「果たしてお兄さんに安らぎの瞬間は訪れるのか、次週最終回！そこで彼が見た物とは！」
「薄汚いカスの一物だろうよ、切り落とすぞ雑種。あと死んでくれ。」
「あぁ、気持ち良いな温泉。」

躊躇いなく泳ぎだした馬鹿を踏み潰して沈める。

「ほぉ～ら、捕まえてごら～ん。」
「気持ち悪いもんをぶるんぶるん振り回すな、目障りだ！」
「俺の愚息を気持ち悪いだなんて、酷い！」
「見たくもねぇもん見せられたら誰だって同じ反応を示すわボケェ！」
「あはははは、あはははは。」
「満面の笑みでお湯を飛ばすな、突き落とすぞ！」
「ツンデレ？」
「あはははは、殺すよ？」
「またまた兄さん、素敵な笑顔で言うこと違うっていやぁー！」
「引き千切ってやろうかあほんだらー！」

むしり取る勢いで馬鹿に掴み掛かり、巨大な水飛沫が高く跳ね上がる。
それは敷居を越えて女湯にも届いたらしく、低く重い声が向こうから聞こえてきた。

「ホカゾノ～、後で覚悟しなよ～？」
「ヤバイ兄さん、真打ちが登場だ。」
「呼び寄せたのは貴様だろうが！」
「カズ君、任せる～。」
「結局執行人は兄さん！？」
「わ～い、殺そう！あはははは。」
「わぉ、福笑いもびっくりな笑顔で凶器振り回してるよ……何処から出したのそれ～！？」
「キヨシ～、酒でも飲もうぜ～。」
「お、流石はヒロト、用意が良いなぁ。」
「さっき売店に売ってた地酒。」
「いつの間に買ったん！？」

「ヒロト〜、後であたしにも〜。」

本当に誰も来なくて良かった、これじゃ追い出されてもおかしくない。

二人は酒を飲み交わし、二人は走り回ってる、迷惑極まりないな。

さて、それから風呂を出て皆で人生ゲーム、持参はキヨシ、どうやって持ってきたのか、あの鞄は某猫型ロボットのポケットと同じ構造か？

夕食も騒がしかった。

馬鹿が無闇にバイキングだからと張り切って、吐きそうなくらいに山盛りにするからだ。

俺は疲れてダウン、一人で寝始めた。

だが数分もしない内に馬鹿共がやってきて飲み会を始めやがる。

「五月蝿せえぞ貴様らー！やるならテメェらの部屋でやりやがれ、ぶっ殺すぞ！」

「止めてー、この距離は当たるー！」

リボルバーをひとしきり撃ちまくり、漸く床に就いた。

あぁ、まさか明日もこんなだろうか。

9月24日　Day. 5－3

穏やかな朝日と爽やかな風で目が覚めた。
軽く伸びをして、窓の外を見る。
長く連なる山々と、晴れ渡った青い空。
少しだけ残る眠気がやんわりと抜けていって、俺は朝の緑茶を淹れる。
お湯を沸かしている間にカオリも起床、二人でお茶を飲みながら朝の穏やかな時間を満喫する、幸せな一時だ。
時計を見ると7時を過ぎている、そろそろ馬鹿共を起こしに行くか。
俺は朝食のメニューを予想しながら、自分の鞄からシグ・ザウエルP226を二挺取り出した、大学時代から持っている骨董品だ。

……いつまで経ってもこの銃口の向く先は変わらないなぁ、成長しろ馬鹿。

弾を装填し、ガスを注入する。
そしてスライドをコッキング、薬室に弾が送られる。
準備完了、さぁて朝の軽い運動でもしましょうか。
カオリに敬礼して部屋を出る、目指すは向かいの馬鹿三人。
扉の向こうから、何かが動く気配はない。
鍵は開いている。
静かにノブを回し、気配を殺して部屋に忍び込む。
目の前に敷かれた三つの布団。
一人は掛け布団です巻きにされ、窓際に転がされている、寝相が悪かったんだろうなぁ、あれではこの季節蒸れるだろうに、下手すると死んだかも。
しかしそこに残る二人の姿はない、朝風呂に行ったか……或いは。

素早く踏み込み、両手の銃を左右へと向けた。

ガキンッ！

四つの銃口がぶつかり合って、重い金属音を発した。
静寂の後、ゆっくりと銃口が下ろされる。

「流石はお兄さん、読まれていたか。」
「ふん、たまには早起きじゃないか二人とも。」
「俺が朝風呂に誘ったら起きてくれたんですよ。そしたら銃を手渡されて、お兄さんが襲撃してくるって。」
「いつもこれくらいちゃんと起きてくれたらな。馬鹿は何故す巻きに？」
「あまりに寝相がウザいのと、夜中最後まで騒いでいたから。」
「ナイスな判断だヒロト、きちんと上下を縛ってるのも高得点だな。
さて、朝飯を食べに行こうか。とりあえずそこの馬鹿を起こそう、各自構えろ。」

ニヤリと笑った三人が、迷わずにトリガーを引いた。
約１００発もの弾丸が、気持ち良さそうに寝ている馬鹿に撃ち込まれていく。
あぁ、最高。
一発ごとに感情の高まりを感じる、笑いが抑えられない。
濡れる（笑）！！
サディスティックにハイテンションだぜー！

「お兄さんマガジン替え始めたよ、止める気ゼロだよ。」
「ホカは既に起きてるのに、朝からヒロイさんの狂った笑顔を直視して心閉ざしちゃったよ、一層布団に潜っちゃったよ。」

「これはもうあれだ、カオリさん連れて先に朝飯に行こう。」
「そうするか、ヒロイさん引くほど楽しそうだし。」

二人が静かに銃をしまい部屋から出ていく、しっかり朝食のチケットを俺の財布から抜くのも忘れない。
遂に高笑いが口から零れだす、もう止まらない。
ちょうどマガジンを替える際に、うるうるとウサギのようなつぶらな瞳で見上げてくる馬鹿。
その瞳はこう訴えていた。
もう止めて、起きたからもう止めて！
さてここで常識問題です。
圧倒的優位な立場の俺が、現在進行形で虐げている馬鹿からの切なる願いを素直に聴いてあげるでしょうか？
言うまでもありませんね、そんなこと天地がひっくり返ってもありえません。
寧ろ弱々しく弱者が懇願する姿は、いっそ燃える、嗜虐心に火が点いちゃう。
あぁ何でハンドガンだけなんだろう、アサルトとかあれば良いのに。

あれ？

俺は何をしにここに来たんだっけ。
あ、三人を起こしに来たんだ。
我に返って目の前を見る。
布団に閉じこもった馬鹿と、数えきれない弾が床に転がっている、どうやら隠し持っていたマガジンは使いきったらしい。

「ごめん、大丈夫かホカゾノ！」
「……兄さん嫌い、兄さん怖い。」
「悪かった、テンション上がりすぎた。」

「もうやだ、帰りたい。」
「泣かないで、ウザい……じゃなかった、ダルい、いや違うな。」
「うわぁぁぁん。」

ゴッ！

泣き出した馬鹿を黙らせる、再び眠りだす馬鹿、いつも力ずくなのは直した方が良いだろうか。
俺は一度部屋に銃を置きに行き、部屋に散らばった弾やマガジンを集める。
さて、少し遅れたが飯を食べに行こうか。
俺は馬鹿を担ぐと食堂に向かう、軽々と持ち上げられるようになったのは俺の成長の証。
仲居さんとかがギョッとした顔で見てくるのを笑顔でスルー、明日までに何回かありそうだしこの光景。
食堂に着くと既に二人分もチケットは渡してあった、先を見越して素晴らしいね。
俺が馬鹿を担いできても、ウチの面子は当然のように驚かない、寧ろ見向きもせず食事すら止めない。
空いている席に荷物を放り投げ、淀みない動作でそのままバイキング形式の朝食を取りに行く。
俺は和風に固めた朝食を二人分、自分と馬鹿の席に持っていき食べ始める。

「この後ゆっくりしたら出掛けてみるか？石段街とか吹割の滝とか見に行こう、麓の駅までは送ってくれるらしいから。」
「ちゃんと調べてる辺りがカズ君らしいね、流石だよ。」
「流石はお兄さん、俺たちを楽しませることを考えてくれてるね。」
「ふうん、面白そうだな。」
「ちょっと忙しいかも知れないが、折角遠くに来たんだから見てお

きたいだろう？」
「あ、朝飯が既にあるわ。いただきます。」
唐突に飯を貪りだした馬鹿を一瞥、すぐにスルー、淋しさでまた泣きそうな顔をしてる。
それすらも華麗にスルーして、今日の予定をまとめる、馬鹿は会話にすら入れない。
理不尽な扱いにいじけてテーブルに伏せる、遂にむせび泣く、この上なくウザい、とりあえずブッ叩く、まさかずっとこのテンションだろうか。
俺たちは食器を片付け、食堂を後にした。
ホカゾノは構ってもらえないからか諦め、黙って後ろから付いてくる、静かだといっそ薄気味悪い、あと無意味に罵倒したい。

よく考えるとこの扱い、某三姉妹漫画の内田の扱いに似ている。

さて静かなホカゾノを無視しつつ、俺たちは旅館が用意してくれたバスに乗り込んだ。
昨日も見た景色に再び感動し、俺はそんな三人を持ってきたデジカメで撮影する、ホカゾノは寝ている、当然そんな絵に容量の無駄遣いはしない。
バスは1時間程で駅前に到着した、次にここへ来るのは17時くらいになるからそれまでに戻らなければならない、携帯で逐一電車の運行表を確かめないといけないな。
まずはここから沼田駅に向かう、吹割の滝が最初の目的地だ。
それぞれ切符を購入し、ホームで電車を待つ。
ふと周りを見回すと、馬鹿が姿を消していた。
黙って静かだからと放置したのは失敗だったかと嘆いていると、いつの間にか隣に立っていた、手には木の箱を持っている。

「何だそれは？」
「こういう寂れた感じの駅に来たら駅弁っしょ！」
「お、お前今年に入って初めて良いこと言ったか？」
「ふふん、ウチは今朝から溜めた力を発揮しはじめたのさ。」
「よし、余計なことはせず黙って食べていてくれ。それと、ゴミはきちんとゴミ箱にな。」
「仕方ないなぁ、吹割の滝までは大人しくしてるよ。」
「未来永劫喋るな。」
「そんなこと言って、兄さんボケがいないと寂しいくせに～。」
「くたばれアホがぁー！」

脇腹に喧嘩キック、不様にも倒れる馬鹿。

「弁当を零さなかったのだけは誉めてやる。」
「蹴りつつ誉める、新しいツンデレを開発したね兄さん！」
「お前はそんなに首と胴が泣き別れたいのか？」
「いやいや兄さん、自分をもっと曝け出そうよ！」
「お前みたいにみっともなく曝したくはないがな。」

弁当をもりもり食べる馬鹿を引っ張って、入ってきた電車に乗り込む。
やはりシーズンを外して正解だったな、殆ど電車は空席だ。
お陰でゆっくりと景色を楽しむことが出来る、旅とはやはり良いものだな。
……吊り革で懸垂を始める馬鹿さえいなけりゃ言うことないのにさ。
もうかったりぃ、無視だな。
「ヴェルファイアー！」

「……。」
「あたしもやってみよ！」
「馬鹿には負けないぜ！」
『ヴェルファイアー！』
「……。」
「さぁ、後は兄さんだけだよ。」
「ヴェルファイアー！」
『ヴェルファイアー！』
「は～い、後ろの5人組のお客様～。壊れるから吊り革で懸垂をするの止めてね～。」
『すみませんでしたー！』

大人しく座席に座って景色鑑賞、調子に乗るとすぐこれだ。
吹割の滝に着くまでは流石にみんな大人しくしていた、まぁかなり恥ずかしかったからな、嫌な汗がびっしょりだよ。
だけどこの光景を前にしたら黙っていられないな。

「凄いな。」
「迫力あるね。」
「岩の割れ目に滝が流れていくのか、へぇ～。」
「滝が割れ目に……割れ目から滝が……。」
「割れ目にイン！」
「はい黙ろうかそこの欲求不満のクソッタレ共！」
「あれ～？兄さん何を勝手に想像してるの～？」
「お兄さん、それはあきません。」
「滝の藻屑となりやがれー！」

ひとしきり馬鹿共を追い掛け回し、結構な勢いでどつきまわす。
土産が見たいと言うので、ぞろぞろと入り口付近の土産屋に行く。
土産屋さんで昼食を買って、滝を見ながら食事を済ました。

次に向かうのは石段街、距離があるから早めに出ないと間に合わないだろう。
電車に乗り、渋川駅に向かう、俺的に見たい本命はこっちだからな。
また人の少ない電車に揺られて田舎町を抜けていく。
流石にここではヴェルファイアはやらない、また怒られたらたまらない。
さて、どんな景色を俺に見せてくれるかな。

9月24日　Day. 5－4

岩の階段、その左右に立ち並ぶ繁華街。
４００年の年月を重ねたその街は、今まで行った中で一番活気に溢れていた。
様々な店があり、そのどれもが個性的だ。
こういった場所は自然楽しくなってくる、土産屋とかは特に楽しい。
昼食を食べたばかりだが、ちょっと何か食べていこうかな。
あの利休庵とか気になる、少ししか居られないが、出来れば存分に堪能したい。

だが、しかしだ。

子守を放棄する訳にはいかないのだった。
カオリとヒロトは問題ない、特に厄介事を持ち込まないからだ。
だがあれは何だ。
キヨシは既に探索に向かったらしい、早急に捜し出して説教せねば。
ホカゾノは何処からか調達した伊香保焼きを貪っている、何で今日は無駄に食いしん坊なんだこいつ。
最後の一つをひょいと奪い取り、唖然とするホカゾノを放置して二人に話しだす。

「とりあえずここでは自由にしよう、猶予は一時間ってところかな。それまでに駅前集合だ、遅れないように。」
「さもないと宿に帰れないって事だね。」
「じゃあ俺はホカを見張るんで、行くぞホカ。」
「うぃ～。」
「あんま調子乗ってはしゃぐなよ？」

「うきゃぁぁぁぁぁあ！」

ゴッ！

「言ったそばから奇声を上げんな、嫌がらせかテメェ！」
「あっはっは、やだな兄さん……嫌がらせに決まってるじゃないか！」

ゴガッ！メキッ！

「良い笑顔だったね。」
「僕らが最後に見たのは、彼の最高の笑顔でした。」
「勝手に殺すな！」
「まだ生きてんのかテメェ！」
「いゃぁぁぁぁ！」
「ここはカズ君に任せて、あたし達はキヨシ君を探しに行こうか。」
「そうですね、こいつはヒロイさんしか物理的に止められないし…警察呼ばれそうな勢いで殴ってるけど。」

さぁてこの馬鹿を機能停止させたらカフェに行くぞ、きっと勉強になるし。

「そうと決まれば早速行こうか兄さん。」
「どうして、お前は、何度殺しても、死なない！」
「いやいや兄さん、愚問だよ、そして今更。」

溜め息しか出ない、誰か聖剣持ってきて。
とりあえず二人で細い路地を登っていく。
その先にある茶房てまりに入る、クラシカルな雰囲気の素敵な喫茶店だ。

俺は珈琲を注文して、店の家具などを見回す。
雰囲気はウチの店に近い、やっぱり喫茶店は落ち着ける方が良いな。

「兄さん、このお店刀とか銃が置いてないよ。」
「……はぁ、当たり前だろ馬鹿。あんなのが壁に掛けてある店はウチくらいなもんだ、原因は貴様だがな。」
「無用心だねぇ。」
「別に用心で置いてるわけじゃないがな。大体俺とお前が居れば大抵の相手には余裕だろ？」
「そうさ、ウチらにはブブさんがついてる！」
「喧しいぞ化け物、魔界に送り込んでやろうか！」
「すぐに制圧しちゃうよ？」
「当たり前のように魔王昇進か……。」

そんな下らない話をしていると、二人分の珈琲が運ばれてくる。
やっぱ珈琲の匂いを嗅ぐと落ち着くな、働いてる気分にもなるけど。
流石に馬鹿にも風情を楽しむ心はあるらしい、大人しく珈琲を飲んでいる。
珍しく、本当に珍しく、俺たちは何事もなくカフェを出た。
さて、後は利休庵ってのに行こうかな、小腹も空いていることだし。

「おい馬鹿、お前あれだけ食べてまだ腹に入るか？」

後ろに問い掛けてみる。
返事がない。
はぁ。
振り替えると遥か後方から走ってくる馬鹿、その手には伊香保焼きが乗っている。

「訊くまでもなかったか…。」

「いゃあ、これ美味くてさ。で、何か言った兄さん？」
「何でもねぇよ、黙って付いてこい。」
「兄さんの背中って……大きいね。」
「伊香保焼き鼻の穴に突っ込むぞ貴様。」
「いやいや、褒めただけだって。で、何処に行くの？」
「利休庵って甘味処だ、何か美味そうなもんありそうだろ？」
「甘味かぁ、ならまだ食える。ウチも行くわ。」
「よーし、店まで競争！」
「え！？」

唐突にダッシュ、きょとんとしたホカゾノ。
華麗なるスタート、決してズルくはないんだよ。
多分奴も判っている筈だ、何しろ必死に走ってくるもの。

負けた方が奢りだろうなぁ。

大切な旅行のお小遣い、最後に買う自分へのお土産代として出来る限り残しておきたい。
そして、こういった観光地の飯は美味いが高い、下手すると不味い。
そんな半分博打の飲食行為に１０００円以上は掛けたくない。
出来るならハイエナのように他人が買った物を少しだけ貰うのが好ましい、不味くても食べきる義務はないし、美味かったら買いに行けば良いから。

「負けるかー！」
「マジ最低！兄さん汚い！」
「ふはははは、最っ高の誉め言葉だぜ！ざまぁみろ、負け犬の遠吠えを聴ける時は近いぜー！」
「鬼！鬼畜！悪魔！魔王！狂人！殺戮者！冷酷！サディスト！」
「言わせておけばー！」

ぶん殴ろうと振り返った瞬間、少し落ちた速度を嘲笑いながら馬鹿が並んだ。

「あっはっは、罵倒されるのに慣れてない兄さんなら怒ると思ったぜ！サラバだのろまな亀さん、ゆっくり追い付いてくるよろし。」
「逃がすかよウサギちゃんめ、狼から逃げられると思ったら大間違いだ！」
「兄さんは夜の狼さんでしょ、ぷぷ～！」
「おのれ貴様、拷問という名の説教をしてやるわー！」

しかし走りながら会話するのは当然ながら体力を使う、そして二人して煙草に蝕まれた肺では長く走れるわけがない。
店に着く直前で急激減速、倒れるように膝をついて汗をだらだら流しまくる。

「どっちが勝ちだ？」
「同時だったでしょ！」
「なら奢りはなしだな。」
「始めから走らなきゃ良いのに…。」
「同感だが、俺たちはいつもだろう。」
「昔からだからね。」

息を整えて、漸く店に入る。
途端に甘い匂いが鼻腔を抜ける、幸せな匂いだなこれは。
あてがわれた席に座ると、二人でメニューを眺める。

「抹茶とか良いな。」
「みつまめって美味そう、ウチはこっち。」

店員に注文をすると、冷たいお茶が運ばれてくる。
そして結構早く注文が届いた、まぁ客の少ない時間だからな。
珈琲の後でも抹茶は美味い、和風ってのはやはり素晴らしい。
ほろ苦さと香りが舌に心地の良い風味を残していく、ウチも抹茶ラテとか始めようかな。

「おかわりー！」
「お前それ何種類目？」
「あと一つで甘味完全制覇！」
「胃もたれしそうな光景だな。」
「兄さん、一応ウチも無意味に食べてる訳じゃない。これは研究開発なのさ、新しいウチの店の商品をね。」
「で？ならウチの料理長の感想をお聞かせ願おうか。」
「これマジ普通に超ウメェ！」
「……死んだほうが良いなお前。」

かなり引いた表情の店員に見送られ、俺たちは店を出た、そろそろ駅に行かないとな。
二人で駅に向かっていると、既に駅前には三人が待っていた、珍しく普通に大人しい。

「悪い、待たせたな。」
「いゃあ兄さんが駄々をこねるから遅れちまったって痛い。」
「下らない嘘を吐くな。」
「宿に帰ったら温泉だな、そしたら卓球でしょ！」
「温泉旅行には不可欠な要素だな、その案は採用。」
「あたしも負けないよ！」
「ウチもどんな手段を使ってでも勝つぜ！」
「や、手段は選ぼうか。」

再び電車を乗り継いで宿の最寄り駅に帰ってきた、物凄く五月蝿い二人を黙らせるのに苦労したが。
待っていてくれたバスに乗り込み、暫く山道の揺れに身を預ける。
ふと見ると、特に五月蝿い二人は疲れて眠っていた、夜のための体力を回復しているのだろうか。
宿に着くとすぐに夕食だった。
直前まであれだけ食べていたホカゾノが一番食べているのが恐ろしい、いっそ清々しいくらいの食べっぷりだが。
さて、風呂でゆっくりと汗を流す。
残暑の中であれだけ走ったりしたからな、結構ベタベタしている。
馬鹿が二人で騒いでいるが、他人のふりを決め込もう、何食わぬ顔でスルーしよう。
ヒロトと二人、黙々と体を洗っている。
後ろからいっきまーすとか聞こえる、飛び込みは危ない、とにかく迷惑。
でも止めたら知り合いだとばれる、そしたら周りからのあの冷たい視線を浴びることになる、心が挫けそうだ。

「キヨシ、兄さんはとことんシカトするつもりみたいだぞ。」
「兄弟なのに冷たいなぁ、おーいお兄さん、一緒に遊ぼう！」

呼ぶな馬鹿野郎、良い歳した奴が下半身も隠さずはしゃぐな。

「駄目だ、お兄さんシカトするわ。きっと関係者ってばれたくないんだな。」
「ならこうすれば流石に……そこの髪の毛短い兄さん、もう諦めなよ、既に冷たい視線を向けられてる事実から目を背けちゃダメだよ、周りにいる困っている人を助けないのが兄さんの騎士道なの？」
「上等だテメェ！今すぐに貴様の息の根止めて、他のお客様に全力で謝罪する所存ですことよ！」

一瞬で奴の背後に回り、全力の回し蹴りをお見舞いする。
首筋に足を引っ掛け、勢いよく温泉の底に叩きつけた。
気絶して浮かんでくる馬鹿野郎、傍で怯えるド阿呆。
直後拍手喝采、と同時に俺謝罪。
早急に馬鹿を担ぎ上げ、怯えるド阿呆はヒロトに任せて風呂を出る。
馬鹿を蹴り起こすと、風呂での記憶が飛んでいた、この技を覚えたら楽だな。
そのまま待っていたカオリを連れて卓球室へ、フロントでラケットと球を借りていく。

「へいへい！兄さん、ビビりじゃないならラケット握りな！」
「はっ！あんま調子乗ってんじゃねぇよ、怯え隠しの虚勢にしか見えねえぞ！」
「ふん、ウチが敗けるなどありえないね！兄さんが不様にも敗者として跪くのを高笑いして見てやるぜ！」
「テメェのその自信、欠片も残らないくらい完膚なきまでに粉々に打ち砕いてやる、覚悟しろよ雑種！」

もうお互いに不様だった、とにかく力押ししかしないのだ。
俺もアイツも、要は無駄に格好つけて打とうとした。
強引すぎるスマッシュはネットに突撃し、無駄に力を込めたスピンは相手コートに入る前に落ちるし、最終的にはお互いの顔を狙い始めてそりゃもうカオス。
続いて二回戦。
ヒロトとカオリが物凄く静かに、だけどお互い一歩も勝ちを譲らず、意外に見応えのある試合になっていた。
そして三回戦。

「キヨシなんぞに敗けるかよ、すぐにお兄さ～んと泣き付くだろう

よ。」
「ろくに試合も出来ない奴がよく言うぜ、吠え面かくのはテメェだよ。弱い奴ほどよく喚くって言うだろ馬鹿め！」
ひたすらに罵倒しあう、一向に試合は始まらない、さっき俺もこんなだったか……。
まぁ漸く始まった試合は面白かった、変な必殺技まで飛び出していたからな。
遊び疲れて部屋に戻ると、三人は静かに素早く寝てしまった。
俺はもう一度温泉に入り、初めてゆっくりと体を休める。
疲れが溶けだしていくみたいに、少し熱いお湯は俺を包んでくれた。
空を見上げると、満天の星空が広がっている。
幻想的な美しさに、暫し俺は見惚れていた。
さぁ、明日家に帰るまでしっかりしなくちゃな。
部屋に戻り、静かに眠る。
また明日も無事に。

9月25日　Day. 5－5

「おはよう兄さん、今日もいい天気だよ～。」
「何だ？朝っぱらから凄絶な笑顔で気持ち悪い挨拶しやがって、呪いの儀式でもするつもりか？」
「酷い、普通に起こしただけなのに。」
「退け馬鹿野郎、貴様ではお兄さんに至高の目覚めを提供することは出来ぬ。」
「ならばやってみせよ！兄さんに笑顔を取り戻せ！」
「任せろ！……べ、別にお兄さんを起こしに来たんじゃないんだからね！」
「うわぁ、ウゼェ。」
「辛辣な台詞をなんて爽やかな笑顔で！？」
「見ろ！お兄さんのこの笑顔を！」
「お前はこれで良いのか！？」
「構わぬ！我、願い成就せり！」
「うるせえぞクズ共！とっとと消え失せろ！」

布団ごしに二人を蹴り飛ばし起床、時計を見るとまだ６時、珍しく早起きだなこいつら。
軽く体を動かしてほぐす、いつでも万全な状態じゃないと一撃で奴を気絶させられない。
カオリが着替えるからと部屋から追い出し、奴らの部屋に入る。
布団はぐちゃぐちゃ、茶菓子のゴミはテーブルに散らばっていて、荷物も片付いてない。

「１０時にはチェックアウトなんだからな、それまでに荷物を纏めておけよ。温泉に入るのは自由だが、まずは部屋を出ないといけな

いんだ。」
「ほらホカ、早くしろよ。」
「お前もな！」
「布団とかもカバーとか外して分けておけよ、マナーだからな。」
「ほらホカ、早くやれよ。」
「だからお前もな！」
「ヒロト様のご命令に逆らうのか貴様！」
「キヨシ～？ウチも暴力を振るうんだぞ？」
「テメェらはいちいちボケないと死ぬ生き物なんか？」
『そうさ！』
「朝から疲れる。」
「そんなんじゃ家に着くまで保たないぞ兄さん。」
「うるさいよ！いいからさっさと片付けろ！」
「ほらホカ、ヒロイさんの言う通りだぞ。」
「お前もだよって、あれ？いつの間にか終わってる！？」
「ホカゾノ遅いぞ！お兄さんが降臨されたし瞬間より片付け及び隠蔽工作するくらいの気概を見せよ！」
「弟くん、隠蔽工作って何の事かなぁ？」
「後にして下さいお兄さん！今こいつに大事な話をしてるんです！」
「勢いで頷くと思ったか馬鹿めが、何を隠した！」
「何も隠してないッス、俺は潔癖ッス。」
「隠しても仕方なくない？すいませんヒロイさん、そこの二人がヒロイさんの刀を二本、初日の夜に酔った勢いでチャンバラやって折りました。」
『ヒロトー！？』
「ほぉ、そりゃ面白い話だな。」
「違うんだよ兄さん、話を聞いて！」
「お兄さん聞いて下さい、悪いのはこいつです！」
「あ、テメェ！お前だって兄さんの刀を持ってきただろ！」
「最初に折ったのはお前だろ！」

「そのあとですぐにキヨシも折ったじゃん！」

……凄くウザイ、筆舌に尽くしがたいくらいウザイ。

判るだろうか、この幼稚園に通う児童の如く下らない責任転嫁。
いや、彼らも薄々気付いているんだろう。
どうせ二人とも俺に殺されることくらい、いつものことだしな。
でも出来る限りの言い訳をしないとねぇ、もしかしたら片方は生き残れるかもだなんて、夢魔だって拒否るくらい甘い夢を見てるんだ。
ならさ、俺の役目ってこれしかないよね。

夢から覚めてもらいましょう。

断末魔さえ叫べないくらい、瞬殺しました。
ヒロトが無意識に一歩たじろぐような光景だね、だって俺が無言だもの。
無表情で無言、それでも濃密な殺意と絶え間なく殴り続ける光景は、きっとどうしようもなく不気味だ。

所変わってフロント前１０時。
すっかり別人の顔になった二人は近くのソファーで落ち込んでいる、誰も慰めない。
俺は部屋の鍵を返し、もう一度風呂に入りたい旨を伝えると、快く承諾してくれた。
荷物はフロントに預け、風呂セットを持って露天風呂に向かう。
あぁ、明日からまた仕事か。
そう思うと、少しだけ寂しくなる。
なら風呂はゆっくり浸かって、一辺も残さず疲れを落としていこう。

「ダイナミックストロークエントリー！」
「アスカー！」
「……。」
「盗んだバイクで走りだす～♪」
「家の風呂じゃ潜れないから、ここで潜るの。」
「アスカチャンス！」

あぁそうか、この疲れは無くならないんだ。
だって常にこうして蓄積するんだもの、終わりが見えないわ。
旅の恥は書き捨てって言うけれど、この馬鹿共はホントに……ホントに。
ヒロトまで楽しそうに歌ってる、相変わらずいい声だけど、ここでは歌うな！
そして毎回のようによくもまぁ下らないボケを思いつくね君ら、ちょっと尊敬するよクソ馬鹿。
もうあれだ、ここにいちゃダメだ。
俺は体を綺麗にしてから、そっと移動して露天風呂へ。
ガラス越しに中で騒ぐ三人を放置して、俺は現実逃避気味に空を見上げた。

……あ、飛行機雲。

「兄さん、なに黄昏てるのさ。」
「空が蒼いなぁ。」
「おやおや、お兄さんはアンニュイですか？」
「お前らが騒ぐからだろ。」

ヒロトくん、君もです。

「そんな時は歌だよお兄さん。」
「さぁ、翼をくださいいってみよー！」
「今～、私の～♪」

歌いだした、俺の安息は消えた。
でも懐かしいな、中学の頃に歌ったな。
でもこの曲で。

「この広い～♪この広い～♪」

歌いながら三人が俺を見てくる、そうそうこんな感じでよく見られてて、見た奴ら潰してたなぁ。

「いゃあああ！」
「ホカゾノ逃げてー！」
「ヒロイさんが魔王の顔をしてる。」
「ふはははは！滅び去れ、愚鈍下劣なるゴミ共め！」

もう決めた、かったりぃから殺す。
みんな壊れちゃえば良いんだ！

「ヤバいよキヨシ、兄さんが覚醒した！」
「全てはゼーレのシナリオ通りに。」
「ヒロト黙れ。」
「ウォォォォォ！」
「これが……初号機。」
「いやいや壊れた兄さんだから！」
「誰か～、ロンギヌス持ってきて～！」
「ボクはカヲル、渚カヲル。でもロンギヌスは置いてきた。」
「マジ帰れ！」

「八つ裂きパーティー！」
「パトラッシュ、もう疲れたよ。」
「休んじゃえ。」
「ヒロトー、キヨシを第一の犠牲者にするつもりか！」
「その声は…ゴミ！」
「覚醒しても尚その認識！？」
「こうなってはもう、誰にも止められないんじゃ。」
「ふざける余裕があるなら止める方法考えろ！」
「お前！いきなりナウシカかよ！って突っ込めよ！」
「判るか！」
「えぇー、一般常識だよ。」
「やってる場合か。」
「考えたんだが、もう誰かが犠牲にならないと止まらないのでは？」
「珍しく真面目に考えてるのねヒロトさん、わたくしもそう思いますわ。」
「おほほほほほほ。」
「壊れちゃった！？」
「じゃあ俺達先に上がるわ。」
「敵前逃亡だと！？」
「馬鹿め、あれが敵だと？あれは魔王、勇者じゃない俺達じゃ勝てない。君にしか出来ない、やれるわね？」
「無理だから、塵にされるから！」
「エクスカリバー！」
「魔王なんてもの取り出すの！？」

甘美な悲鳴が聞こえて、俺は漸く目の前の惨劇に目を向けた。
風呂のお湯は大分減り、その中心には体育座りで泣きべそをかいている馬鹿。
ヒロトと弟くんは既に退避したらしく、風呂場に残るのは怯えて端っこに蹲る一般客の方々。

うぅん、俺は何かやらかしたらしい、何故か家に置いてきた筈のエクスカリバーを握ってるし。
とりあえずお客さんに謝罪、物凄く怯えていて中々話が通じなかったけど、ちょっと肩に手を置いたら必死に謝ってきた、とても優しい方だ。
さて、そろそろ帰り支度をしなきゃな。

「いやいや兄さん、ナチュラルスルーはダメ、絶対。」
「チッ、独りになりたいかと気を遣ってやったんだがな。」
「なら舌打ちとかしないで～。てかこれだけの惨劇を起こしといてなに現実逃避してんの？」
「嘘だ！」
「ひぐらし出ちゃうくらい混乱してるんだね、判るよその気持ち。ウチもよく兄さん怒らせると後悔するし。反省はしないけど。」
「うわぁぁぁぁ！」
「何で剣を抜いた！？ちょ、落ち着いて兄さん！」
「もうこの宿ごと消し去ってやるー、犯罪に満ちたこの想い出と共にー！」
「犯罪って判ってるなら止めてー！」

……。
もう後の事は覚えていない、気が付いたら家のリビングに居たのだ。なんでもあの後、俺は唐突に意識を落としたらしい、自分の精神を守る自衛行動だったのだろう。
ホカゾノはひとまず完全にキマッてしまったお客さん達を宥め、逃げた二人を呼び戻し撤収したとのこと。
カオリは帰り方を覚えていて、ホカゾノはぐったりした俺を抱え、ヒロトとキヨシは俺達の荷物を持ったらしい。
目を覚ましてから言った一言。

「や、ご苦労。」

殴られた、ヒロトさえ金属バット持ち出したくらいだし。
袋叩きってあぁいうのなのか、いゃあ死ぬよあれは。
罰として1週間のパシリを任命された、そりゃもう馬車馬の方がまだ楽してると思うね。
だが1週間経ってみて気が付いたんだ。

原因って俺じゃなくね？

１０月３日　Ｄａｙ．６－１

長閑な朝の陽射しを浴びながら、俺は店のドアを開けた。
ふわりと漂ってくる珈琲の匂い。
誰よりも早く来る俺だけの特権だ。
店内に入ると、まずは窓を開けていく。
爽やかな風が入り込んできて、篭った空気を押し出してくれる。
換気を終えると、次は調度品の掃除。
朝と夜、毎日欠かさず綺麗にする。
テーブルを濡れた布巾で拭き、椅子の位置を整える、見た目から綺麗にしておきたいからな。
客席が終われば、そのままカウンターの内側へ。
前日に片付けた調理器具を並べなおして、倉庫から豆や葉を取ってくる。
湯を沸かしながら各機材のチェック、急に点かなかったら困るからね。
沸いた湯を使って最初の珈琲を淹れる、うん、今日もいい感じだ。
開店準備も済んだところで、俺は淹れ立ての珈琲を飲みながら一服する。
紫煙がゆらゆらと漂う様を見ながら、俺は後から出勤してくる仲間を待つ。
起業して、この店を共にオープンさせた大切な仲間…なのだが。

「チッ、また寝坊してやがるなあいつらは。」

流石にそろそろ起きてもいい時間帯だ、そもそも９時から来ている俺でさえ割とゆっくりした時間配分だろう。
と、そう思った矢先。
ドアに付けられたベルを鳴らしながら、４人の待ち人が入って来た。

眠たそうな顔が三つ、呆れ顔が一つ。
まったく、あれほど夜更かしはするなと言っておいたはずなんだがな。

「おいド阿呆ども、とっとと起きねぇと今日のランチメニューに加えんぞコラ。」
「……どうして朝はまたやってきてしまうん？」

寝惚け面かました弟に渾身の回し蹴りをお見舞いする。
その勢いでテーブルの角に頭をぶつけると、声にならない呻きを上げてのた打ち回った、流石にこれで目覚めただろう。
暫くそれを眺めていると、突如起き上がり、天井に向かって唸り始めた。

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉん！」
「まさか…暴走！？」

そのままの勢いで更衣室へと走っていく、チィ、馬鹿を一人取り逃した。
そして振り返る。
すでに一人は目覚めの一服を始めている、あぁ、俺の珈琲まで…。
残った一人、図体だけ無駄にデカイ馬鹿はいまだ夢の中に居るようで、ふわふわとおぼつかない足元のまま更衣室に向かって歩き出す。
ふむ。
俺は迷わず、手にしていた煙草をその阿呆に押し当てた。
一瞬の空白。
「って熱い！？ちょ、酷っ！兄さん、いくらなんでも酷くない？？」
「おぉ目覚めたか木偶の坊、とりあえずその薄汚い面に熱湯ぶっ掛けてしゃきっとしなさい。」

「火傷だよねぇ！？確実にそれ火傷確定だよね！」
「ぎゃあぎゃあと朝っぱらから五月蝿い奴だな、だったらしっかりと睡眠とって働きにきやがれ。」
ぶつぶつと文句を言いながらカウンターで火傷を冷やし始める。
それを一瞥し、唯一しっかりと起きているらしい一人に話しかけた。
「すまないなカオリ、馬鹿が三人も居ると起こすのに手間取ったろ？」
「もう慣れたし、最近は物理的手段で叩き起こすから。」
「それは頼もしいことだ。じゃあカオリはレジのチェックを頼む、俺は店の前を掃除してくるから。」

慣れた手つきで香織はレジへと向かい、俺は掃除用具入れから箒を取り出し店の外へ。
通勤や通学のラッシュを終えた商店街は、とても静かで寂れた雰囲気がある。
まぁ何処の店もシャッターを閉めていれば当然なのだが、皆中で開店準備をしているのだから仕方がない。
俺は細かい砂埃を箒で掃き取り、舞い上がらないように水を撒き始める。
すると幾つかの店舗もシャッターを開け始め、少しずつ活気が満ちてきた。
もう３０分もすれば朝市を目指した逞しい主婦の方々が、家の諸事を終え、買い物袋を携えて闊歩し始めることだろう。
何人か商店街の人々が挨拶をしてくれたり、今日も頑張ろうと応援してくれたりする。
うん、この雰囲気が俺はとても好きだ、夢見ていた景色そのものと言えるね。
俺は掃除を済ませ、お隣の店舗のご主人に挨拶を終えると、晴れや

かな気分で店内に戻った。
まぁそこで気分は一変するが。
まず、先ほど俺の珈琲を奪い取って一服をしていた男、ヒロトがテーブルに突っ伏して寝ている。
次は俺に煙草を押し当てられたアホ、ホカゾノがウザってぇテンションで珈琲を淹れる練習をしている。
……まぁこれは別に間違っていない、単に鬱陶しいだけだ。
そして更衣室に暴走しながら走っていった弟、キヨシが珈琲を待ち望む客のようにカウンターで煙草を吸っている。
カオリは既にレジの起動を済ませ、更衣室に向かったようだ。
俺はベストの内側に忍ばせていたガスガンを取り出すと、その三人に容赦のないマガジン掃射を決めた。
むくりと起き上がるヒロト、大丈夫、ヒロトは起きれば働いてくれる、単に低血圧な所為で朝が驚異的に弱いだけだ。
次に弟くんへと狙いを定める、既に逃げ始めている辺りは慣れている。

「まぁ逃げるなよ弟くん、逃げたって結局は同じなんだぜ？」
「いやだって仕事はもう済んだし、珈琲くらいは良いでしょ！？」
「その仕事とはいったい何だ？」
「あ……着替えるでしょ、店を見て回るでしょ、今日も兄さんはきちんと仕事をしているなって感心するでしょ……俺は今日も頑張ろう！」
「そうかそうか、そんなに閻魔様と珈琲を飲みたいか。」

迷わずに撃ち続ける、悲鳴が木霊する。
ガシャッ！
チッ、弾が切れた。
俺は新しいマガジンをリロードすると、既に見える範囲から消えているド阿呆を探しに出かける。

弾薬を薬室に装填し、猫なで声で声を掛ける。

「トシユキく～ん、馬鹿だから拷問ＤＥＡＴＨ！」
「何で！？てかウチは特に悪いことしてないじゃん！」
「おやおや～？そっちから声がしたなぁ。」

俺は最高にハッピーな笑顔で靴音を響かせながら、ゆっくりと裏手の倉庫へと足を向ける。
中で恐怖に慄く馬鹿の顔を想像すると、今日も一日頑張ろうって気分になるね、ゾクゾクシチャウ。
扉をゆっくりと開けると、中にはこちらに引きつった笑みを向けるカスが一匹。

「さぁ、楽しい殺戮ショーと洒落こもうか。」
「いやいやいや！だから何故ウチに撃つの！？」
「う～ん……ただの気分かな、一日の始めに精神のハリを取り戻さないとさ。」
「めっちゃとばっちり！？」
「まぁそういうことだから、おとなしく死んでくれや。」

何か言おうとするのすら遮るように、俺は幸せいっぱいな笑い声と共に銃口を馬鹿へと向けた。
こうして俺たちの店、フラトレスは開店する。

10月4日　Day. 6－2

「全員整列！」

ザッ！

「これから各自の任務を言い渡す！心して聞け！」

『Sir. yes sir！』

「ホカゾノ！」

「はい！」

「お前は俺と一緒に料理や飲み物の準備だ、日頃の成果を遺憾なく発揮せよ！」

「了解！」

「キヨシとヒロト！」

『はい！』

「お前たちは店内の清掃及び装飾を担当してもらう、センスの見せ所だ、期待するぞ！」

「お任せ下さい隊長！ヒロトを上手く使います！」

「テメェもやれよ！」

「俺はしっかりキヨシの手綱を握って上手く使います。」

「譲り合いの精神が素敵！凄く不安になってきた！……では各自の健闘を祈る、解散！」

「よし、二度寝だな。」

「俺はスロット打ちに行こう。」

「俺はゲームでもしようかな。」

「おい！何でソッコーサボろうとしてんのお前ら！？」

「だって解散って言ったじゃん。」

「違うわボケ！作業に取り掛かれって意味だよ！」

「なら最初からそう言えば良いじゃん、回りくどいよお兄さん。」
「確かにちょっと軍隊仕様でテンション上がってたよ、悪かったよ！」
「やれやれ兄さんはこれだから、実は一番ふざけてるよね、こっちは真剣なのに。」
「悪かったスミマセンもうしませんごめんなさい！」
「あれ～？謝り方が足りないんじゃない？こっちは随分とモチベーション下がったけど～。」

……ウザい、やっちまいたい。
でも今人数を減らすのは得策ではない、もう昼を過ぎている。

「つかそもそもお前らが揃いも揃って寝坊したからこんなに急いでんだろうが！」
「仕方ないさ、僕らは目覚ましに嫌われた悲しい子。」
「妖精さんにも見放され、昼まで目覚められない悲しい子。」
「あの酒は美味かったなと余韻に浸る悲しい子。」
『ヒロトー！何ばらしてんのー！？』
「結局テメェらが原因じゃねえか！」
「兄さん、悪いのはヒロトです！」
「あんな美味しい酒を不敵な笑みで出すのが悪いんだ！」
「ヒロイさん、こいつら俺より先に封を開けるんですよ。」
「何て計画性のない馬鹿なのお前ら……。」

学習できないのか、もうダメダメ。

「もういい、とっとと作業を始めろ。」
「ならキヨシ、色紙とか買いに行こうぜ。」
「任せろ、荷物は持つぜ。」
「ならウチは仕込んでおいた鶏肉とか味見しないと。」

「節操なく色々用意したからな、味とか不安だ。さ、始めるか馬鹿。」

二人ともカウンターに掛けてあるエプロンを着けると、厨房に入る。すると何故か俺たちより先に、本日の主賓であるカオリが待ち構えていた、既にエプロンも装着済みだ。

「あれ？何でカオリさんがここに居るの？」
「いちゃ悪いの？」
「いや全然いいッスけど。」
「カオリ、部屋で待つんじゃなかったのか？」
「上達したあたしの腕前を見せにきた。」
「ほほぅ、では期待させてもらおう。自分の誕生日の料理を自分で作るってのも面白いが……因みに何を作るんだ？」
「炒飯！」
「……。」
「兄さん！黙ったら駄目だよ！」
「炒飯だと、凄いじゃないか！」
「なんか反応が微妙じゃない？」
「ウチも料理しないと！」
「さて、俺は白身のカルパッチョでも作るか。」
「ちょっと二人ともこっちを見なさい！」

いやいや、俺たちの作る物の中に炒飯って……シュール通り越して恐怖だよ、何かの罰ゲームかと思うわ。
洋風の料理が殆どの中で唯一の中華、もう罠にしか見えない。
結構カオリが練習してるのは知ってたが、まさかまだ炒飯の段階だったとは。
当のカオリさんは早速卵を割っている、しかも１０個ほど、全員もれなく炒飯を丼でご堪能あれって感じだ、俺たち作らなくても満腹

じゃないか。
ホカゾノも同じ事を思っているらしい、カオリをチラチラ見ながら苦笑してる、気持ちは判るぞ。
さて、となると俺たちの求められるのは質だ、量に関してはカオリさんが一人で無双してるし。
まぁカルパッチョは良いだろう、元々がっつりしてないし。
だけど鶏肉とかは止めよう、胃袋がトラウマを抱えそうだ。
ホカゾノに上手く目配せして、伝わったのか鶏肉を仕込んでいたボウルを冷蔵庫に戻す、すまないな、今度の夕飯にでも食べよう、今日は炒飯だ。
ホカゾノは冷蔵庫をがさごそ探して、海老の剥き身を取り出した、まさかエビチリ？
いや、確かにそれなら上手く炒飯に合わせることが出来る、でかしたぞホカゾノ！
心の中でガッツポーズ、お互い目が合ってハイタッチ。
さて当のカオリは何だか馬鹿デカい中華鍋を取り出して、何故かご飯から炒め始めた、そんな鍋この厨房にあったかな？
ご飯を炒めたらその中に解いた卵をブチ込む、あおり炒めなのですね、流石はカオリさんだ。
だけどカオリさん、ご飯一升はやり過ぎだよ、誰かの胃袋が風船に針を刺したみたいに破裂するよ。
ホカゾノを見たら一心不乱に無駄な動きをしながらエビチリ作ってた……腹を空かす作戦か！？
今日ほどお前に共感できる日はないよ、泣くな。
しかし、善意１００％の嫌がらせってこんなに辛いんだ、悪夢だな。
二人して踊ったりしながら料理してるから、厨房は今だけリオデジャネイロ。
さぁここでカオリさん、卵まみれのご飯に追加しますは炒飯の素、本当に練習したんですか？
昨日までの景色が嘘に思える、実はカップ麺にお湯を注いでただけ

だったのかな。
ホカゾノは狂気の踊りに勤しんでる、もうエビチリ作成は進まない、塩の代わりに涙を入れてる。
「お兄さ～ん、壁にテープ直接貼っても……やっぱいいや。」
弟くんが一瞬顔を見せてすぐに戻って行った、だよね、何があったのか想像つかない光景だもの。
厨房に入ったらオッサン二人がリオのカーニバルもびっくりなダンスしながら料理してる光景、正直自分でもおぞましい。
もう最初の目的すら怪しくなってきた、何で俺は踊ってるのか。
気が付けば完成しているカルパッチョにラップして、冷蔵庫にしまう。
さて、客席の様子でも見に行こうかな。
チラッとカオリの方を見ると、なんとあんかけにチャレンジしようとしている。
ホカゾノはそれを見て絶句し、目の前に完成したエビチリを見やる。
そうだよな、炒飯の味のバリエーションを増やす目的で作ったもんな、これじゃ単に胃袋へ更なる負荷を掛けるだけだよな。
俺がさっぱりした物を作ったから別の方向性で攻めたのに、あれじゃエビチリをあんかけ代わりにできもしない。
ホカゾノが遂に崩れ落ちた、殉職したホカゾノに敬礼。
客席に出てくると、そこにはなんと！……俺の眉間へと飛んでくる紙飛行機。
咄嗟に避けると、紙飛行機は厨房の方へ、良く飛ぶなぁ。
「あ、踊りは終わったの？」
「あれ？ホカは？」
「彼は全力を出して敵と戦いましたが、奮戦実らずグリストへと還っていきました。ホカゾノに敬礼！」

三人で再敬礼、君との日々はまぁまぁ楽しかったぞ。
フロアを見渡すと、結構作業は進んでいるようで、特に手伝う事もなさそうだ。

「珍しく真面目に作業してんじゃんか。」
「ふっふっふ、伊達に料理役立たずコンビじゃないぜ！」
「いや、俺は多少料理できるし。」
「早々に裏切り！？」
「ま、まぁちゃんとやったなら良いんだ。」

弟くんが泣きそうだがとりあえず放置しよう、彼らには話し合いが必要だ。
厨房に戻ると、俯せに倒れたホカゾノの頭に紙飛行機が突き刺さっていた、上手く飛んだなぁ～。

「カズくん、そろそろ出来上がるよ！」
「おぉ…ってうぉっ！？」

でっかい丼に山と盛られた炒飯は、我らが日本の象徴富士山が如く、あんかけが雪のようにかけられていた。
ただし、所々片栗粉がそのまま残ってるのが気になるが。

「カオリ、誕生日おめでとう！」
「おめでと～！」
「ひゃっほぅー！」

「うひゃぁい！」
「お前ら、少しは日本語喋る努力をしなさい。」
「二人ともありがとう！」
「俺たちは無視ですよキヨシさん。」
「えぇ、おかしいですね、今日は俺の扱いがみんなして酷い。」
「さて、お待ちかねのご飯を食べましょう。」
「おっとその前に、カオリ、プレゼントだよ。誕生日おめでとう。」
俺はポケットから小さい箱を取り出した、中身は有名ブランドのネックレス。
「ありがとう！大事に使います。」
「ならウチも、おめでとうございます。」
ホカゾノが何かを取り出した、袋自体は薄い。
カオリが開けてみると、出てきたのは意外におしゃれなエプロンだった。
「ホカゾノにしては上出来すぎるだろこれ。」
「うん、かなり意外な感じ。でもありがとうホカゾノ、たまにはやるじゃん。」
「たまにはって…。」
「さて、真打ちは最後に登場ってね！」
「さて、ご飯にしよう！」
「ＨＥＹ！ＨＥＹ！ＨＥＹ！お兄さん、それはちょいとおかしな流れじゃねぇですかい？」
「えぇい五月蝿い、いちいち発音良くするな。それと、ゴミ箱はあっちだぞ。」
「さぁカオリさん、これをどうぞ！」
「おい、シカトかコラ。」

「何だろう……うわ。」
箱から出てきたのは案の定と言うか、ピンクのバイブ、ついでにローション。
カオリはちょいと引き気味、そうだよな、こんな馬鹿腐ればいい。
「あれ、反応が薄いな？」
当然だ馬鹿者、脳ミソに蛆でも湧いてるのか。
さて、残りはヒロト。
だがこいつも下らない物を買ってるはずだよな。
ヒロトはちょっと悩んだあと、手に持っていた包みを脇に置き、新しい箱を取り出した。
「何それヒロト！？自分だけ代わりの物を用意してるとかズルくない！？」
「キヨシ……もっと賢く生きなきゃ。」
「裏切り者ー！」
キヨシ、崩れ落ちる。
誰も気に留めず、ヒロトのプレゼントが手渡された。
中身はマグカップが二つ、どうやらペアになってるようだ。
「ホカゾノに続きヒロトもセンスを感じるな…それに比べてこの愚弟は。」
「止めて～、見ないで～！」
「せめてまともな物とセットだったらまだマシだったろうに。」
「おふざけは程々に。」
「ヒロトだって直前までふざける気満々だったじゃん！」
「黙れよ。」

「はい。」
「まぁまぁとりあえず、今度はあたしからプレゼントって訳でもないけど、ご飯だよ。」

カオリが厨房に行き、デカい丼を四つ持ってくる。
俺とホカゾノもそれぞれ持ってきて、テーブルに並べた。
テーブルには白身のカルパッチョとエビチリと、大食いチャレンジかと思うような炒飯の山脈。
正直に言おう、不味そうだ。
このあんかけが台無しにしている、何もなければまだ食えた、量は馬鹿としか言えないが。
他の二人は初見だからな、唖然とするのも無理はない、もう食い切らなきゃならない流れだしな。
これから終わりなき戦いに従事する胃袋戦士諸君。
明日は無情にも仕事だ、そして恐らくカオリはこの炒飯を味見していない。
己の限界に打ち勝て。
カオリを除く全員の意識が、生き残るという言葉に収束した。

「それじゃあ皆様……ご武運を！」
「？……乾杯！」
『乾杯！』

第一次炒飯事件は、グラスを打ち鳴らす音によって始まってしまった。

１０月１５日　Ｄａｙ．７

昼のピークが終わり、今は夕方に入る少し前。
俺は客もまばらな店内を見渡しながら、洗い終えたグラス等を丁寧に拭いていた。
カオリは店の端に備え付けられた端末で事務作業中、三馬鹿トリオは目の前のカウンターで遅めの昼食を摂っている。
穏やかな昼下がり、外は天気も良く、休みなら皆でバーベキューでもしたくなる陽気だ。

「はぁ～、久しぶりに暖かいなぁ。そうは思わないかいお兄さん。」
「そうだな、最近は少しずつ寒くなってきてたし、秋が近づいてるな。」
「兄さん、珈琲お代わり。」
「自分で淹れろ馬鹿。」

カランカラン。

「いらっしゃいませ～……珍しい客だな。」
「え～？……マジカル！？」

ホカゾノが入り口を見て固まる、そりゃそうだよな。
そこに立っているのは、身長１８０は越える巨漢。
しかし顔は優しげで、どこか親近感を抱かせる青年。
現在はとあるプロ野球チームで活躍している。
彼は俺に挨拶すると、ホカゾノの隣に座った。

「久しぶりカズ。」

「あぁ久しぶり、テレビとかで活躍は見てる、案外元気そうだな。」
「ありがとう、頑張ってるよ。」
「今日は突然どうした？」
「休みが作れたからカズに会いに来たんだ、今練習してるとこから結構近いからさ。」
「ほぉ…ま、ゆっくりしていけ、珈琲で良いか？」
「いやいやいや兄さん、なに普通に会話しちゃってんの？まさか来るの知ってたの？」
「馬鹿かテメェは。今事情を聞いてただろうが。」
「にしても久しぶりだな。」
「ヒロトさんもお久しぶりです。」
「おいおい、俺を忘れるなよ！」
「あぁキヨシいたの？」
「最近扱い酷くない！？」
「まぁまぁ良いじゃねえか……でかくなったな、ハル。」

珈琲を我が弟に手渡す、ハルは苦笑しながら受け取る。
すると事務を終えたカオリがカウンターにやってきた。

「ハル君久しぶり～。」
「お久しぶりですカオリさん。」
「前に会った時よりもっと大きくなったね。」
「カズを越えましたから。」
「やれやれ、空気を読んで越える手前で止まれよな。」
「ぷぷっ、弟に抜かされる兄さん。」
「休憩中も俺に殴られたいとは随分と熱心なマゾだな、表へ出な！」
「あはは、相変わらずって感じだね。」

それからはこれまでのお互いの話をして盛り上がった。
俺たちが居なくなってからの話や、プロになるまでの話など。

「でもカズが居なくなってからはやっぱり寂しかったなぁ、家も広く感じたし。」
「親父たちは元気なのか？」
「元気だよ。リカコが独り立ちしてからは旅行とか行ったり楽しんでるみたい。」
「そうか、なら良かったよ。リカコは元気かなぁ。」
「あの性格だからね、まだ結婚の話も聞かないし。」
「なぁハル、プロなんだしウチに金くれよ！」
「えっ？」
「キヨシ、その馬鹿殺せ。」
「了解ボス！」
「ふふん、キヨシごときには殺されないぜ！兄さんなら話は別だかな！」
「よーし、兄さん張り切っちゃうぞー！」
「や、兄さん。フリじゃないから、張り切らなくて良いから。」

そんなやり取りを見て、ハルが思いっきり笑いだした。

「あはははは、やっぱカズ達は楽しそうだ。俺もこっちに来れば良かったよ。」
「止めとけ、疲れるだけだぞ。」
「そうだね、俺は野球を頑張らないと。」
「今日はいつまでいれるんだ？」
「ん～……夜には戻るよ、明日も早いから。」
「そうか。なら夕飯くらい食べていけ、時間が大丈夫ならな。」
「うん、それくらいなら大丈夫。ご馳走になるよ。」
「一食五千円になります。」
「えぇっ！？」
「ヒロト、やってしまえ。」

「オッケー。ヒロイさん、刀借ります。」
「武装反対！」
「キヨシ、ホカを押さえといて！」
「任せろヒロト！」
「普通に刀がある店ってここだけだろうね。」
「ハル君、珈琲お代わりいる？」
「あ、いただきます。すみませんカオリさん。」
「良いよ、気にしないで。」
「あのう、失礼ですがプロ野球選手のヒロイさんですか？」
「え？あぁ、そうですよ。」
「ボク大ファンなんです！サイン下さい！」
「ありがとう、もちろん良いよ。カズ、何か紙とかあるかな？」
「流石に色紙はないけど、それで良いかな？」
「あ、はい！マスターありがとう！」

少年はサインを受け取ると、お喋りに花を咲かせる母親の席に戻っていった。

「やっぱプロ野球選手ってのは人気者だなぁ。」
「いやいや、他の選手はもっと凄いから。」
「なぁなぁハル君よ～、ウチに金くれよ！」
「もう良いぞハル、そいつ摘み出せ。」
「ほぉ、やるのかハル君よ。ウチに勝てるかな？」
「ホカゾノさん、俺は強くなったんですよ！」
「はいレディ……ファイ！」

馬鹿はハルに突進すると、ハルは腰を落として猪馬鹿を受けとめた。
叫び声を上げて押し出そうとするが、ハルはニヤリと笑ってホカゾノを持ち上げる。
こりゃ負けたな馬鹿。

そのまま外に運ばれてく、哀れ。
すると外で驚いたような声が聞こえて、何故か笑顔になった二人が戻ってきた、誰か後ろにいるな。
ハルの後ろに隠れているのは女性みたいだ、細い足が見え隠れしている。

「兄さん兄さん、今日はマジで珍しい日だな。」
「確かに。俺とこいつが一緒の日に来るなんてね。」
「なんだ二人して気持ちが悪いな、誰が来たって？」
「私のことを忘れちゃったのカズ兄ちゃん？」

は？
まさかとは思うが…。

「久しぶりカズ兄ちゃん、元気だった？」
「ホントに……まさか姫まで来るとはね、今日は何の日だよ。久しぶりだなリカ、お前も真面目になったのか？」
「それなりに、流石に仕事じゃサボったりしないよ。私生活は相変わらずだけど。」
「まぁお前のその女っ気のない格好を見ればなんとなくは想像つく、どうせ休みの日は読書ばかりだろう？」
「何だよもう、久しぶりに会った途端にお説教？」
「違うっつうの。ま、とにかく久しぶりだ、ゆっくりしてけ。」
「いゃあリカコがこんなになってるとは……俺と付き合わないか？」
「黙れ愚弟、余裕のない無様を晒すな。」
「ならウチと。」
「ひっぱたいて良いぞ姫。」
「ハル君よろしく！」
「何で俺が！？」
「てか背高くなったな二人とも、俺はあんまりヒロイさんちに行っ

てないから余計にそう思う。」
「リカちゃ～ん、綺麗になったね～！」
「カオリちゃん、久しぶり～！」

和気あいあいといった風だな、まったく面白い一日だよ。
カウンターには俺の身内だけしか並んでない、てか三馬鹿トリオ、お前らの休憩は終わりの筈だが何でまた煙草に火点けてんだ？
仕方ないな、今日は早めに閉店するか、あんまりお客さんも来ないみたいだし。
ハルにサインを求めた家族も居なくなり、それから暫く客が来ないのを見計らって閉店にした。
閉店作業中もずっと昔話に花が咲いていた、懐かしい話ばかりだ。
ホカゾノがしょっちゅうウチに泊まっていることに慣れたこととか、皆でモンハンやったこと、リカコの遊びはあまりにつまらなそうで付き合わなかったこと。
昔を懐かしむのは歳をとった証拠と言うが、そりゃみんな歳をとったさ。
あんなに生意気だったリカコは今じゃ立派に社会人だし、ハルにいたってはプロ野球選手だ。
俺たちも頑張ってこうして働いている、日々は変わってく。

……でも変わらないものもあるな。

目の前に広がる光景を見れば嫌でもそう思える、誰もが昔のままにこうして集まってる。
大切にしていきたいな。

「ならウチらへの暴力を減らしてください！」
「……ナチュラルに人の心を読むんじゃねえボケ！」
「な～に浸っちゃってんのお兄さ～ん？」

「うるせえぞボンクラ！その口、二度と開けないように縫い付けてやろうか！」
「一番変わってないのってカズくんだよね。」
「俺もそう思います、アルバイト時代の光景と何も変わらないし。」
「カズは相変わらず暴虐の武神だな。」
「私も交ざろうかな。」
『止めとけ死ぬぞ！』

結局ばか騒ぎは夕飯まで続いて、随分と賑やかな1日は終わろうとしていた。
二人を見送りに隣町の駅前まで行く。
ハルの背中をばしんばしん叩く馬鹿二人と、リカコと抱き合ってるカオリ。
俺はヒロトと二人、それを眺めて苦笑する。
二人は切符を購入し、改札を抜ける。

「また来るよカズ！」
「おう、気を付けてな。」
「また来いよこの野郎！それまでにお前を倒せるくらい強くなるからな！」
「俺はもっと強くなってますよ！」
「次はお土産持ってこいよ～！」
「考えとくよ。」
「バイバイみんな～！」
「またね～リカちゃ～ん！」
「カオリちゃ～ん、カズ兄ちゃんと仲良くね～！」
「少しはだらしない生活直せよリカ！」
「余計なお世話だ～！カズ兄ちゃんバイバーイ！」
二人が手を振りながらホームに降りていくのを、俺たちは見えなく

なるまで見送った。
ちょっぴり寂しい気持ちになりながら、俺たちは俺たちの店に帰る。
また明日から頑張ろうか、あいつらがまた来られるように。

10月29日　Day. 8

寒さが身に染みる、本格的に秋が到来してきた。
そんななか俺たちは、ビニールシートと弁当を持ってとある公園に来ている。
紅や黄、橙が織り成す鮮やかな風景。
日本ならではの季節に感動しつつお猪口を傾ける、う～ん、最高です。

パァン！

……。

パァンパァン！

……。

「食らえ、我が奥義を！旋風槍！」
「まだまだ！ウチの技の冴えを見よ！無双連斬！」
「ふん、貴様の剣には決定的に誇りが欠けている！」
「は、お前の体には残念なくらい身長が欠けている！」
「図に乗るなよマウンテンゴリラがー！」
「貴様らには憐れなほどに知能が足りておらんわー！」

容赦ない俺の一撃が、馬鹿共を吹き飛ばす。
地に伏した馬鹿共が動かないのを確認すると、俺は再びお猪口を傾けた。
そう、今日は近くの自然公園に来ている。

紅葉を見るために今日は閉店、まぁずっと休みなく開店していたからな。
たまにはゆったりと休日を満喫したかったのだが、どうやらこいつらは大人しくするという言葉に疎いらしい。
何処からか調達した竹刀と木槍で派手にチャンバラを始めたのだ、じっとしていられない病気なんだろうな。
隣ではヒロトが暖かい日差しの中で昼寝をしている、確かにうたた寝したくなるくらいの陽気だ、これこそ正しい平日の公園の風景ではなかろうか。
少なくとも来て早々に手伝いもせずチャンバラと洒落込むには適さない環境だ、何人か遠巻きに憐れむ目で見ていたぞ。
ひらひらと舞い散る紅葉を、穏やかな気分で眺める。
するとホカゾノが起き上がり、俺に竹刀を向けると突然言い放った。

「テメェがセイバーか？」
「そういう貴様は判りやすいな、その図体……どう見てもマウンテンゴリラだ。」
「ふふん、まぁ年寄りな兄さんはそこで酒でも飲みながら余生を過ごせば良いさ。なぁキヨシ？」
「お兄さんにはもう戦うだけの体力もないのさ、挑発にも乗れない年増だからね。」
「上等だテメェ今すぐ……。」
「へぇ、つまりカズくんより年上のあたしにも喧嘩売ってるんだね？」

隣で俺のお手製弁当を食べていたカオリが、凄く楽しそうな笑みで立ち上がった。

「いやいやカオリさん、全然そんなことないですよ！？」
「そ、そうですとも！カオリさんはずっと若くお美しい。」

「あぁん？今更謝っても遅いんだよ！」
「俺たちを怒らせたらどうなるか、その身をもって思い知れ！」
俺は傍に置いてあった刀袋を掴むと、中からかなり古い刀を取り出した。
初めて手にした刀だ、銘は呂鞘、学生時代からずっと持ってる愛刀だ。
隣ではカオリが俺の鞄からリボルバーを二挺取り出し、弾薬を確認する。

「さてキヨシ、ウチらはあの魔王と戦女神、同時に相手にしなきゃいけないらしいぞ。」
「まったく、悪魔でも失禁しそうな組み合わせだ。でも俺たちは泣いて逃げる訳にはいかないんだ、世界の平和がかかってるからな。」
「あぁ、あれが世に放たれたら大変なことになる、世界が５秒で滅ぶだろうな。」
「な～にファンタジーの主人公気取ってやがる、テメェらはその器じゃねえよ！」
「さぁカズくん、早く片付けてお昼寝しよう。もちろんカズくんの腕枕で。」
「そうだな、手早く済ますか。」
「行くぜキヨシ、最初から全力だ！」
「はっ、俺に指図すんじゃねぇよ！テメェもテメェの身はテメェで守れ！」

戦闘開始。
カオリの精確無比な弾丸が、馬鹿共の額に向かって速射される。
その弾丸の風の中を、俺は迷わずキヨシへと突撃していた。
二人は弾を躱したり弾いたりしつつ、俺の接敵に身構える。
怒濤の如き俺の剣舞が、キヨシの槍を削っていく。

「相変わらずの化け物ぶりだぜお兄さん！」
「ふん。そういう貴様も良く捌く。」
その最中、ホカゾノが少しずつカオリの方へとにじり寄っている。
俺は剣で槍を弾くと、回し蹴りでキヨシを蹴り飛ばした。
「ぐはっ！」
「怯んでる暇はないぜ！行け、カオリ！」
「あたしの本気を見せちゃうよ～！」
カオリはアサルトライフルを構えると、寝そべる姿勢でフルバーストをブチかます。
次々とマガジンを入れ換えて、まさに暴風のように弾が飛んでくる。
俺たちはその中で剣劇を上映する、戦いは苛烈を極め、ふと見ると近所のおじさんたちが観戦に来ていた、何やら賭けまでしてるらしい。
「兄さん随分と攻めが緩いな、もっと来いよ！」
「まだまだ俺らは捌けるぜ！」
「そりゃ悪かった、ちょっと冗談が過ぎたかな？」
俺は刀の動きに格闘術も織り交ぜて、更に攻撃の勢いを強めていく。
優しく手解きするように、しかし確実に実力差を思い知らせるように、より苛烈、より怒濤、暴風の追い風を受けて刀が唸る。
「キヨシ、あれを使うぞ！」
「なにっ、もう使うのか！？」
「兄さん相手に遊んでる余裕がなくなった、今日はカオリさんまで居るんだ、兄さんが本気を出したりしない！」

「大正解だ、戦局の見極めは大事だな。」
「一撃が勝敗を決めるな、このままだと負けるだけだ。」
「よし、いくぞ我らが最終奥義！」
『すいませんでしたー！』

二人が全力で土下座、しばし思考停止。

『馬鹿め、隙だらけだぜー！』
「調子に乗んなよボケがー！」
「舐めた真似してくれたじゃん！」
「もう少し気の効いた技は思いつかねぇのか！」
「いゃあ、これしか思いつかなかった。」
「兄さん相手じゃ隙も作れないし、地味に効くかなって。」
「……覚悟はいいか野郎共。」

刀と銃の和洋コンビネーション、二人は土に還りました。
さて、ヒロトとカオリと俺の三人だけで昼食を済ませると、あとはのんびりした時間が過ぎていった。
馬鹿の体力には底がないのか、ホカゾノはヒロトと一緒にバドミントンを始めた、そういや二人とも部活仲間だったな。
俺は要求通りカオリに腕枕しながら、キヨシとしりとりしてた、当然だが終わらない。
やがて飽きたのかキヨシはバドミントンに行き、俺は片手で本を読んでいた。

「あ、兄さんが官能小説読んでる。」
「死ね。」
「あ、お兄さんが官能小説でハァハァしてる。」
「腐れ。」
「あ、ヒロイさんがラノベ読んでる。」

「黙れ……ってあれ？今の誰だった！？」
「兄さん酷っ、ヒロト向こうで黙っちゃったよ？」
「ヒロトは変なこと言ってないのにね、可哀想だなぁ。」
「ヒロト悪かった、つい流れで。」
「兄さんサイテー！」
「下衆や鬼畜だってここまではしないわ！」
「悪気はないんだ、すまなかった。」
「いや、全然いいんですけど。」
「兄さんの悪魔～、魔王～！」
「女たらし～、守銭奴～！」
「ここぞとばかりにごちゃごちゃうるせえぞ！」
「うわ～、ヒロイくんサイテー。ヒロトくんに謝って！」
「そうよそうよ！謝ってよ！」
「貴様らはめんどくさい女子高生か！？」
「今どき女子高生だってこんなことしません～。」
「だったらやるなよ！」
「てかマジ～、お兄さんの淹れる珈琲ちょべりぐって感じなんだけど～。」
「古いっ！？死語にも程があるぞ！」
「判っちゃうあたり俺らも歳とりましたね。」
「……ヒロトの言葉が一番効いた。」

そうだよな、最近の人に同じこと言っても訳判んないだろうな。
うわ、俺オッサンやん。
本を読む気力も失せて塞ぎ込む。

「勝者ヒロト！」
「俺の実力ならこんなものさ。」
「さぁ勝者にインタビューのお時間です。ヒロトさん、今回の勝敗の決め手は何だったでしょう？」

「年齢に対して容赦なく抉ることでしょうか。」
「流石ですね、さりげなく容赦がないのは味方の時は心強いです。」
「こいつが敵に回ると精神的ダメージがデカい、兄さんは物理的ダメージだけど。」

ボクは心が弱いのです。
さて、そろそろ時間も遅いし、帰り支度をしなくちゃな。

「さぁ、そろそろ撤収！」
「ホカゾノ達は荷物を纏めて、あたしはシート畳んだりするから。」
「了解ッス！」
「よし、俺は監督だな。」
「働けし兄さん。」
「や、俺は年寄りだから。」
「うわ、遂にそれを理由にサボりだした。」
「さ、年寄りは放っておいて片付けよう。」
「確かに俺が悪いが、それはあんまりだよヒロト。」

手早く荷物を片付けると、俺たちは店に向かって歩きだす。
まぁ当たり前のように騒ぐから、随分と時間はかかってしまったが。
ホント、飽きないな。

11月16日　Day. 9

「ねぇヒロイさん。」
「ん～？」
「俺も兄さんって呼んでいい？」
「残念だがダメだ、そうなると馬鹿とヒロトの区別がつかなくなる。」
「確かに。」
「すまないな、別に嫌とかではないんだ。」
「それで兄さん……。」
「ダメって言ったじゃん！？」
「じゃあホカに兄さんの事を神様って呼ばせよう。」
「無理、三行でキレる。」
「ダメかー。」

それきりヒロトは壁に寄りかかって仕事をしなくなった、はぁ。
ふと視線を変えると、ホカゾノが新作のパフェを作ろうと試行錯誤していた。
ウチにあるパフェはチョコとバニラだけ、正直あまりにもメジャーだ。
という訳で、今度から季節毎のフルーツを入れたパフェを考えてもらっているのだが。
何やらメモを書きながら考えてるし、ちょっと覗いてみる。
栗。
ペースト状にしてアイスにしたら美味そうだ。
銀杏。
……どうやってパフェにするんだ？
紅葉。

いや、葉っぱは食えんだろう。
秋刀魚。
いや、秋刀魚て。
鈴虫。
食えよ？
たんぽぽ。
もはや秋ですらなくなった！？
すると馬鹿が下の棚から虫籠を取り出した、おいまさかよりにもよってそれチョイスか！

「馬鹿野郎、こんなとこで実験すんじゃねぇ！」
「え、なに兄さんどしたの！？」
「またいつもの冗談だと思って見てりゃ気持ち悪いもん出しやがって、常識的に考えろアホめ！」
「だから何が！？」
「新作パフェを鈴虫の標本にでもするつもりか！」
「いや、これ栗だけど。」
「……は？」

ホカゾノは虫籠の蓋を開けてひっくり返す。
すると中からは形のいい大きな栗がゴロゴロ出てきた。
……。
ホカゾノは自分が書いたメモを見て、ニヤニヤとうざったい顔になる。

「あれ～兄さん、まさかとは思うけどこのメモで焦っちゃった？」
「……。」
「流石のウチも自分が嫌いな虫を入れるわけないじゃんか、ぷぷっ。」
「いっそ入れろ、そして食え。」

「いやいや、ウチが作ろうとしてるのはたんぽぽ。」
「チョイスの酷さは変わらない！？」
「まぁたんぽぽは手に入らないけどね、別に美味しくもないし。」
「もう栗で良いじゃん！無難だし美味いよ！」
「それじゃ面白くないやん！」
「お前は食べ物にまで面白さを求めるんか！」
「バニラパフェたんぽぽ添え、良くね？」
「要らねえよたんぽぽ！添えただけで味は変わらないじゃん！」
「因みに二百円増しです。」
「クソ要らねーうえに金取るの！？」
「いやいや兄さん、この時期のたんぽぽは高いから。」
「だから栗で良いじゃん！なにお前たんぽぽになんの思い入れあんだよ！」
「青春の代表花……は桜。」
「挙げ句違うな！」
「まぁでも栗はちょっと…。」
「何だよ！栗にトラウマでも抱えてんのか？」
「や、面白さに欠ける。」
「いよいよ黙らねえとブッ殺すぞ！」
「ウチは普通に興味ありません！」
「大丈夫だよ！お前は十分に普通じゃねえよ、ド阿呆だよ！」
「ちょ、そんな褒めんといて、照れるやん。」
「褒めてねえ！」
「さ、そろそろ兄さんもツッコミ疲れたでしょ？諦めてたんぽぽを認めるんだ。」
「認めたらパフェ売れなくなるわ！」
「すみませ～ん、パフェくださ～い、バニラで～。」
言ったそばからお客がパフェを注文してくる、今の会話が聞こえなかったかド畜生。

ホカゾノは嬉々としてバニラパフェを作り、最後にそっと取り出したたんぽぽを添えた、てかもう買ってたんかい！
オーダーリストにはしっかり二百円追加されてる、ホントにやりやがった、あの客馬鹿か？
ホカゾノは得意げな笑みで俺を見ると、またもニヤニヤ笑いに変わる、毎度毎度ウザい。

「ほら兄さん、やはり秋の新作はたんぽぽで決まりだね！」
「判った、たんぽぽは認めてやる。だがせめて春にしよう、秋なんだから栗にしよう。」
「はぁ、仕方ないな兄さんは。やれやれ我が儘なんだから。」
「くぅぅぅ。」

マジムカつく、マジムカつく、マジムカつく！
この「勝った！」みたいな顔がムカつく、春までに細かく刻んで魚の餌にしてやろうか。
するとキヨシが元気よく扉を押し開けて入ってきた、扉壊したら壊すぞこの野郎。

「お兄さんごめん、店の看板壊したー！」
「はぁ！？」
「いゃあ、つい。」
「なにしやがってんだテメェ、馬鹿なのか？遂に脳ミソ沸いたか？」
「いやね、聞いてよお兄さん。ちゃんと事情があるんだからさ。」
「一応聞いてやる、何だ。」
「まず前提として、俺は槍が好きだ。」
「……あぁ、それで？」
「んで、さっき外を掃除してたら脆くなってたんだろうね、箒の先が折れた。もう判るでしょ！」
「つまり貴様は思わぬアクシデントで手に入った長い棒を持ってテ

ンションが上がってしまい、思わず槍の練習を始め、振り回してる最中に勢い余って傍にあった看板を殴ってしまい壊れてしまったと？」

「流石はお兄さん、驚異的洞察力だぜ！まぁ丁度良かったと思ってるんだ。あの看板、結構ダサかったし、替え頃なんじゃん？」

「確かにそうだな、あれは酷かった。俺も買い替える口実を探していたんだ、偉いぞキヨシ。」

「やっぱお兄さんは話が判るや！」

ホカゾノは気配を感じ取ってそそくさと退散していく、因みにヒロトはいつの間にかタバコを吸いに行ったようだ。

お客さんも見慣れているからか、キヨシから少しでも距離を放すために椅子をずらし始めた。

「さてキヨシ、俺は何かお礼をしなければなるまいな？」

「おぉ、まさかお兄さんがそこまで評価してくれているとは。」

「そうだな、ではとても愉快な場所に連れていってやろう。俺も行き付けの場所でな、良く友人と楽しいお喋りをするんだ。」

「それは何やら楽しそうだね、してその場所は？」

「地獄に決まってんだろボケがぁ！ざけんなよテメェ、看板だってロハじゃねぇんだぞ阿呆が！」

俺は怒りに身を任せ、傭兵のスカウトでも来そうな速さで拳銃を抜くと、まさに鬼の形相で乱射した。

逃げ惑う愚弟、チャールズ＝ホイットマンも裸足で逃げ出しそうな勢いだ。

今の俺ならわざわざ時計塔に登までもねえ、機関銃抱えてワーグナー流しながら、どこぞのスクランブル交差点で大暴れできるぜ。

客も引くくらいの笑みでキヨシを蹴り倒しひとしきり悲鳴の旋律を奏でると、俺は何事もなかったかのようにカウンターで洗い物を始

める、やれやれまた無駄な出費がかさむ。

「おいホカゾノ。」
「はいっ！」
「季節の新作パフェはマロンで決まりだ、明日から出す、今日の内に買い物と仕込みを済ませておけ、八百屋のおじさんなら安値で取引してくれる。」
「了解しましたマスター！」

ホカゾノは元気よく返事をすると、逃げ出すように店を出ていった。丁度そこにヒロトが戻ってきて、床に倒れて嗚咽を漏らすキヨシにぎょっとする。

「ヒロト、そろそろ仕事に戻れ、次は俺の休憩だ。」
「はい、判りました。」
「お前は偉いな、余計な手間をこさえない。」

フフフフと笑いながら隣を抜けると、ヒロトは少し震えていた、何か怖いことがあったのかな、フフ。
俺はタバコを吸いに、店の裏に造った喫煙スペースに行く。
するとそこには事務を任せていたカオリがいて、まさにタバコを吸おうとしていた。

「おや、そちらも休憩かな？」
「キリが良かったから……って、凄い顔してるよカズ君、何かあったの？」
「流石にカオリは怯えないな。」
「そりゃ昔から見慣れてるから。どうせあいつらがまた何かやらかしたんでしょう？」
「まったく、カオリには恐れ入る。」

俺はあいつらの下らない話を聞かせ、カオリは溜め息を吐いた。
「はぁ、せっかく仕事が終わりそうだったのに。」
「今日は俺の部屋で飲むか？」
「カズ君から誘ってくれるなんて珍しいね、もちろん飲みたいよ。」
「了解、つまみも何か作るよ。」

一服を終えて、お互い閉店まで頑張る、たまには夫婦水入らずってのも良いだろう。
てか恐らく俺は働きすぎている、たまにくらいは罰も当たるまい。
……甘かったよなぁ。

「それではウチが音頭を取らせてもらいます！」
「おぉー！気の効いた音頭を頼むぜー！」
「良いから早く飲もう。」
「あはは、たまにはちゃんとやれよ～！」
「……。」
「どしたの兄さん、元気なくね？」
「せっかくの飲みの席だ、テンション上げてこうぜお兄さん！」
「……お、美味いなこれ。」
「こらこらヒロト、もう飲んじゃったの？」
「……はぁ、もう好きにしろよ。」
「よし、マジお疲れ！」

俺は無気力にグラスを持つと、溜め息混じりに酒を煽った。
はぁ、今夜はまったりしたかったのに。
目の前ではテンション高い馬鹿共が、俺が用意したつまみを次々と貪ってる、あぁ俺のきゅうりキムチが。
内心落ち込んでいると、カオリがそっと俺の肩に頭を預けてきた。

「いつもお疲れ様です。」
「…その一言で満足だよ。」
「うわ～、イチャイチャが始まった。」
「いや良いんじゃないのか？夫婦なんだしさ。」
「ヒロト、これは黙って見ていてはいけないんだ！全身からひがみや嫉みを絞りだせ、それをお兄さんにぶつけろ！」
「ウチも嫁さん欲しい、ウチも嫁さん欲しい、ウチも嫁さん欲しい！」

俺はそっとカオリを抱き締めると、馬鹿二人に向かってニヤリと笑ってやった。

「ふふん、俺は幸せ者だぜ！」
「ウチのこの魅力に気が付かない世の中の女が悪いのさ、節穴だぜ。」
「俺のこの溢れんばかりの紳士っぷり、あまりに紳士すぎてみな遠慮しているのだろう、いゃあ俺って罪な男だわ～。」

いや、そんな考えに至れるお前らの頭の中が罪だよ間違いない。
ま、今日もうるせえ一日だったな。

12月1日　Day. 10

真っ白な雪が降っている。
ふわふわと踊るように、キラキラした結晶が灰色の空から落ちてくる。
それは俺たちの住む町を覆い隠し、純白の世界を作り上げていく。
今年の初雪。
それは夜の内に地面を隠すと、朝までには止んでいた。
俺は眠気を覚ますため窓を開け、その美しい純白の世界を見た。
まぶしいくらいの白は、光輝いて白銀にも見える。
気の早い小学生たちは、既に雪合戦をしたりと大忙しだ。
楽しそうな笑い声が、俺の口元にも自然笑みを浮かべさせる。

「オラオラ餓鬼ども！ウチに勝てたらそこのカフェで好きな物を食わせてやろう！」
「よ～し、負けないぞー！」
「あのオッサン倒せー！」
「ふはははは、ウチはそう簡単に倒せないぜ！何しろいつも魔王に遊ばれてるからな、貴様ら全員ブッ潰すぜ！」

起きて早々に頭が痛くなりそうな光景だ、可愛らしいちびっこの中にウチの馬鹿が紛れ込んで勝手なことぬかしてやがる。
しかもその馬鹿は、小学生の群れに取り囲まれ、四方八方から雪玉のリンチを受けていた。
いやもう、反撃とか出来ないでしょ、雪を拾う動作の度に１０発は飛んできてる、あれをリンチと呼ばないなら公開処刑だな。

「ちょ、痛い、グホッ、痛っ、おいっ、冷たい！」

「あはははははは！」
「ぶっとばしてやる～！」
「このガキが、ブッ潰す！」

うわ～、大人気なく本気モードかよ。
飛んできた玉を掴んでは、投げた奴の顔目がけて投げ返す。
あれじゃただの悪漢だろうが、ったく。
俺は大暴れする馬鹿に向けて上から声をかけた。

「おいホカゾノ、あんま調子に乗るな。」
「げっ、兄さん。」
「そこのちびっこたち。今から俺がそいつを止める、その隙にブッ倒せ。」
「マスターありがとー！」
「兄さん、何でそっちの味方なの！？」
「子供を嬲るのは心が痛むが、貴様を嬲ってもまるで痛まないからだ！」
「この鬼畜ー！」
「ふはははは、さぁ踊れ！我が掌の上で！」
「俺たちもいくぞー！」

俺は上からアサルトライフルを、ちびっこたちは四方八方から。
ホカゾノは躊躇いなく容赦なく、無邪気な暴力に蹂躙される。
ホカゾノが雪にまみれて動かなくなると、俺は下に降りてちびっこたちを店内に入れてやった。

「もう少ししたら準備できるから、それまでテーブルで大人しく待つように。わかったかな？」
『はーい！』
「うむ、良い返事だ。」

「マスターには逆らうなってお父さんに言われたー！」
「そうだな、挑む相手を間違えるのは良くない。ウチの連中には挑まないのが賢明だ、無闇に強いからな。」
「ねぇマスター、あの人ほっといて平気？」
「あの馬鹿は例え月が降ってきても死なないから安心しなさい。」
『はーい！』

俺は素直なちびっこたちに微笑みながら、開店の準備を進めていく。やがて時間になると、キヨシたちが首を傾げながら入ってきた。

「なぁお兄さん、馬鹿は朝もはよから何で雪風呂に浸かってんの？もしかして自殺志願者？」
「似たようなもんだ、俺がやったからな。」
「そりゃ自殺志願者だ。で、このちびっこたちは何？」
「外の馬鹿を葬るお手伝いをしてくれた勇者たちだ、朝飯くらいは出してやらねば。」
「それは素晴らしいぼうやたちだ。お疲れ君たち、ゆっくりしていきたまへ。」
『はーい！』
「なぁなぁ外でホカが伸びてるんだけど。」

続いてやってきたヒロトとカオリにも同じように説明する。
二人も似たような反応をして、同じくちびっこの頭を撫でたりしていた。
開店してからやってくるお客さんは、楽しそうにご飯を食べる子供に和んでくれたようだ。
俺はその間、ちびっこの家に電話を掛ける、心配してると悪いからな。
さて、そろそろ馬鹿を回収するか。
扉を開けて、目の前の歩道を見る。

そこにホカゾノは居らず、代わりに馬鹿デカい雪だるまが出来上がっていた、通行の邪魔この上ない。
雪だるまには小さなメモが刺さっていて、壊さないでね　ｂｙ足長おじさんと書いてあった、この汚い字は間違いなくホカゾノだ。

「……足長くねぇだろボケ。」
「あ、兄さんだ。」

声のする方を向くと、馬鹿が仕事もせずに二つ目の雪だるまを作成している。
俺はにっこりと微笑みかけると、完成している雪だるまの頭を渾身の拳で粉砕した。

「あー！」
「そしてトドメの回し蹴り。」

胴体も見事に破壊され、俺は満足気に笑いかけた。

「さぁ、働け馬鹿。」
「その前に言うべきことがあるだろー！」
「お前の脚は短い！」
「そっちじゃねえよ！？」
「いつまでサボってんだカス。」
「傷心するウチを労れ！」
「あぁ？」
「ごめんなさい。」
「黙れ、そして腐れ！」
「良いの兄さん？ウチ腐るよ？かつてない腐臭が兄さんを襲うよ？」
「あぁうん早く腐れよ。」
「酷い！もう少し悩んでよ！」

「……はい、どうぞ。」
「悩むの一瞬！？もういいよ、働くよ。」
「初めからそう言えば良いんだよボケ。」
「これは立派な虐めだと思う。」
「なんだテメェ、まだぐだぐだとぬかすのか？」
「すいませんね。」
「とりあえず厨房行って昼の準備だ、忙しくなるかは判らないが。」
「この雪じゃ外に出るのも億劫だからね。」
「せっかくだしこの雪を利用するか。」
「え、どうすんの？」
「昼のピークが終わってから始めるから、まずは店に戻るぞ。」

案の定昼はそれほど混まなかった、まぁこの雪じゃ仕方ないだろう。
さて、ここからは楽しいイベントといこうか。
俺は店の前に一枚の看板を出した。
――雪玉当てゲーム！ウチの従業員に三回投げて一回でも当たれば飲み物一杯無料サービス！お一人様一回まで！
よし、後は呼び込みをかけよう、名前が売れれば問題ない。

「いらっしゃいませー！只今本日限定のイベントを開催しております！よろしければ是非一度遊んでみて下さいませ！」
「そこのお兄さん、ちょっと遊んでいけよ！」
「飲み物一杯無料だよー！」
「面白そうなことやってるな。」
「お、何かまた騒いでるなあの集団は。」

騒ぎを聞きつけて、続々と人が集まってくる、ノリが良い人達だ。
一通り集まったところで俺は前に出る。

「それじゃルールの説明をしますよ。まず雪玉は三個まで、大きさ

は自由、投げるタイミングも自由、一度に複数投げてもいいし、投げれるなら雪だるまみたいな大きさでも構いません。但し中に物を入れたりは禁止、石とか入れたら流石に化け物でも痛いです。」
「そうだぞ～。いくら神の如く慈愛に満ちたウチでもちょっと痛いパンチとかしちゃうぞ～。」
「死にたくなかったら余計なことはすんなよな、お兄さんとの約束だぜ！」
「このように血気盛んな馬鹿共ですので、自重していただけたらと思います。投げる距離は１０メートル、子供は半分の５メートルにしましょう。では私が試してみます、やってみたいと思う方はあちらにある受付に名前をお願いします。」
俺はカオリが用意したテーブルを示すと、早速ホカゾノと向き合う。
「兄さん、ウチに当てるなんてさせないよ。」
「おいおい、これはデモってやつだ、お前が避けたらダメじゃないか？」
「だがあえてウチは避ける！兄さんに当てられるなんて何か尺に触るぜ！」
「……なら避けれないようにする、覚悟を決めろ。」
調子に乗ったうつけには灸を据えてやろう。
「食らえ！我が渾身の雪だるまの下半身！」
「下半身デカっ！？」
「……サイテー。」
「くたばれ……ゴミがー！」
俺は２メートルはありそうな雪玉を、ジャンプして上から片手で思い切り投げ込んだ。

ホカゾノは回避の為に身構える、ふふん、馬鹿を罠に嵌めるのは容易いぜ。
更に俺は石のように硬くした小さな雪玉を、先に投げた雪玉に投げる。
一点突破、初めから脆く作った雪玉は派手に砕け、欠片は雨のようにホカゾノへと降り注いだ。
不意討ち、更に広範囲攻撃。
ルールは破ってない、使った雪玉は二つだけだ、誰もやらないだろうが。
当然雪玉の欠片は命中し、ホカゾノは悔しそうに唸った。

「このようにとにかく当てれば良いので、頭を使って頑張ってください。」
「何十キロもある雪玉を１０メートルも投げれる化け物は兄さんくらいだ！」
「おやおや、負け犬がみっともなく言い訳してるわ、ぷぷっ。」
「マジもうぜってー当たらねえ！」
「大丈夫ですお客様。こいつ人間離れした身体能力はありますが、頭は救いようがないくらい空っぽですので、策に嵌めれば勝てますよ～。」
「おっしゃ、なら俺からやらせてもらうぜ！」

熱いお兄さんが早速チャレンジ、他の人も結構参加してくれそうだ。
存分に身体を動かせるし、ついでに鍛練にもなって一石二鳥だ、暇を持て余すよりはマシだろう。

「俺は昔野球部のピッチャーだったんだ！食らえ俺の速球！」
「ヘイヘイ、カマンッ！ウチに当てたら我らが兄さんの熱い抱擁を受ける権利をやるぜ！」
「あんな化け物に抱擁されたら死ぬわ！」

「お客様……頑張って当ててくださいね。」
「ちょっ、マスター、落ち着いてくれよ。」
「あーあ、余計なこと言うから。」

恐怖に打ち勝てずピッチャー凡退。
その後もちびっこや商店街の熱いオッサン達が次々にチャレンジ、中にはガチで当ててく人もいたくらいだ。
俺が使った手を実践してる人もいた、かなりのコントロールだ、雪玉が小さい分当てるのは難しいだろうに。
５０人くらいチャレンジして、当てたのはその内１５人くらい、結構頭を使った人が多かった。
しかし、ふふふ。
お陰で店の前は随分雪が減った、これで雪かきも楽になるぜ。
真の勝者は俺って感じだな、あはははは！

12月25日　Day. 11

「お兄さん、例のブツは確保したんですかい？」
「ククク、当然よ、俺がイベントを逃すとでも？」
「流石はお兄さんだ、キョキョキョ。」
「因みに貴様は確保したのか？」
「いやまだ。」
「ダメじゃん！お前、もう今日だぞ！？」
「いゃあ、すっかり忘れてた。」
「今すぐ買ってこい馬鹿め、さもないとお前だけパーティー不参加な。」
「イエスボス！ド肝を抜かれるハイセンスなプレゼント期待しとけよ！」
「こやつ、自らハードルを上げてきおった。」
「お兄さんはいつもの如くオードブルの準備頼むぜ！」
「たまには手伝っても罰は当たらないぞ。」
「ふふふ、代わりに皆の胃袋に滅びの時が訪れるぜ！」
「キリストの誕生日にポイズンパーティーは嫌だな、せめてプレゼントくらいマシなもん買ってこい。」
「了解、んじゃ任せた！」
「兄さん兄さん、プレゼント買いに行こう！」
「テメェも用意してないのかよ！？もういいよ、二人で行ってこい！」

慌ただしく二人が出ていき、俺は言われた通りにオードブルを作っていく。
肉食が集った面子だ、こんな日くらいはひたすらに肉料理を作る。
まずは定番の七面鳥。

でも一羽を丸焼きよりはもも肉を人数分焼いた方が喜ぶ、意外に一羽じゃ足りないからな。
他には豚バラの焼き肉ともやしのナムルをレタスで挟んだもの、ナムルは俺の自信作だぜ。
鳥の唐揚げも忘れずに。
肉は漬けこんだものをカリカリに揚げたから、味もしっかりしていて美味いはず。
ローストビーフは二つの味で。
ニンニク醤油なら水菜と、おろしポン酢なら葱をトッピングに。
エビマヨとか焼売、きゅうりのたたきニンニクは昔良く行ってた中華料理屋のパクり。
どうせ酒も飲むからシャンパン以外にも、ヒロト専用焼酎各種割ロックアイス。
生ビールに日本酒、タコわさびとかかきの種は流石に作れないから買ってきた、枝豆はここで茹でる。
かなり作ったから意外に時間が経ってる、そろそろ良い時間だし店に運ぼうかな。
各種料理を大皿に盛り付け、崩れないよう慎重に運ぶ。
唐揚げなんて軽く富士山みたいになってる、崩れたら大惨事だな。
オードブルのためにあいつら昼飯抜いてたからな、楽しみにされるのは悪い気がしない。
グラスは店の物で、酒とかはちょっとだけ冷やしとこう。
料理にラップして、厨房を片付ける。
てか……なんか寂しいな。
今になって思うが、あいつら随分選ぶの長くね？
カオリは部屋でクイズの支度中、パーティーの盛り上げ用だし時間もかかるだろう。
ヒロトは朝から居なかった、一体何処に行ったのやら。
むぅ、静かだ。
外は相変わらずの雪が降っている、最近ずっとだしそろそろ移動も

辛くなる。
流石にこれだけ降られるとホワイトクリスマスとかはしゃげない、東京にいた頃が懐かしいね。
俺は壁の隠し戸棚から陣太刀を取り出すと、静かに素振りをする。
切なく響く風切り音、すぐに飽きてタバコを吸う。
白い煙が薄暗い店内に広がっていく。
あ、暖房点けとこう、きっとみんな寒そうに来るだろうからね、うん。
部屋は文明の利器で暖かくなっていく、俺の心は寒々と冷えていく。
暇だからと銃をカウンター下の隠し戸棚から出し、分解して整備する。
油を差し、シリンダーを掃除する、はっきり言って地味。
どうせなら全部の武器を整備しよう、はぁ。
カチャカチャと、虚しい音が木霊する。
マガジンに弾を装填し、元の棚に戻すと、ほら寂しい。
てか料理冷めるんですけど！
まぁ冷めても美味いような味付けにはしたけどさ、やっぱ作ったからには早く食べてもらいたい料理人心を察してほしい！
あぁ、なんかやるせない。

「ただいま～！あぁ～さみぃ！」
「おぉ、暖かいぞ！流石はお兄さん、気が利いてるね！」
「チッ、おせえんだよお前ら。」
「すいませんヒロイさん、待たせてしまいました。」
「おぉヒロト、何処に行ってたんだよ。」
「買いたいものが近場に売ってなくて、ちょっと遠出してました。」
「ヒロトが遠出なんて珍しいな、ちょっとプレゼントが楽しみだ。」
すると、ちょうどカオリも店に降りてきて、その手にはプレゼントの包みもある。

さぁ、漸くクリパの開始だ。
俺はシャンパンの注がれたグラスを手に取ると、咳払いをして立ち上がる。

「このクソ寒い聖夜にこうして変わらず共にいられることを、俺は嬉しく思う。」
「いや～兄さん、つまんねー前置きはいいから。」
「そうだそうだ、どうでもいいぞー！」
「腹減った。」
「少しは聴いてあげなよ三人とも。」
「ったく、仕方ない。んじゃ乾杯！」
「うぁ、テキトーだな。」
「気の効いた音頭くらい取れないのかね。」
「何様だお前ら！」
「……パクッ。」
「ヒロト～、もうちょっと我慢しようか～。」

ぐだぐだのままクリパ開始、いい加減見慣れてきたな。
始まるやいなやもりもりと飯を食い始める、未だ育ち盛りなのだろうかこいつら、恐ろしい。

「唐揚げ美味いな！」
「フフン！そりゃそうだろうよ！」
「流石は兄さん、レンチンが上手いぜ！」
「喧しいわ！冷食じゃねぇよ！かなりマジに作ったわ！」
「このローストビーフ美味いな。」
「流石はヒロト、伊達な舌は持ってないぜ。」
「あたしもこれくらい作れたら手伝えるのに。」
「気にするな、俺が好きでやってる事だ。」
「よし、ならあたしはクイズで活躍するよ！」

「おぉ、待ってたぜ。」

カオリが小さなホワイトボードを三人に配り、黒のマジックも渡す。

「正解数が多い人にこの一回だけカズ君を沈静化できるチケット進呈！」

「ま、魔神を黙らせるチケットだと！？」

「欲しい！是が非でも欲しい！」

「悪いことしても一回だけ許されるってこと？」

「そうだ。よって俺は参加しない、お前達三人限定だ。まぁちょっとした俺からのプレゼントだな。」

「あたしが考えたクイズに勝てるかな？」

「面白れぇ、いつでも来いやぁ！」

「フ、ボクの頭脳を見せ付ける時だな！」

「チケットは欲しいなぁ。」

「それじゃあ第一問！五月はさつきとも言いますが、六月は何と言うでしょうか？」

「いきなり訳判んない。」

「ムズくない！？」

「馬鹿を馬鹿にし過ぎ、判るわけがない。」

「おいおい日本人、結構一般常識だと思うが。」

三人とも凄い考えてる、割と必死だな。

「それじゃあ答えをどうぞ！」

「”むつき”、きたろこれ！」

「”睦月”、意外に漢字が書ける俺に刮目せよ！」

「”水無月”、これしか思いつかなかった。」

「ヒロト大正解！正解は水無月、睦月は一月だよ。」

「お前さ、せめて漢字で書けよ。」

「あっはっは、無理！」
「ヒロトが良い感じのスタートを決めました！解説のカズ君、この流れをどう思いますか？」
「これは日頃の行いが勘にまで出ていますね。」
「フフン、マジに答えたら可哀相だから手加減してあげたのさ！ウチの本気はこれからよ！」
「ボクの賢すぎる頭脳が深読みしすぎたようだね、次は加減するよ。」
「さぁ戯れ言は聞き流して第二問！」
「酷っ！」
「カオリさんもお兄さんに似てきたなぁ。」
「世界三大美女と呼ばれるクレオパトラ、楊貴妃ですが、最後の一人は誰でしょう？因みに日本人です。」
「何かこれ知ってる気がする！」
「どっかで聞いたなぁ。」
「これって歴史？」

ホカゾノとキヨシが結構自信満々に書いてる、流石に知ってたか。
ヒロトは、何を考えてるかわからんな。

「それじゃあ答えをどうぞ！」
「”紫式部”、よく紫って書けたよウチ。」
「”小野小町”、漢字が簡単で良かった。」
「ヒロト大正解！やはり日頃の行いか！」
「あの自信はどうした馬鹿共。」
「いやいや結構いい線いってたでしょ！」
「俺は断然紫式部を推す！」
「お前の趣味などどうでも良いわ！」
「さぁ続いていこうか第三問！これは答えられるはずのサービス問

題！ＵＨＣトレーのＵＨＣとは何の略語でしょうか？」
「懐かしのマック！」
「元トレーナーを舐めるな！」
「確かにサービスだな。」
マックは略語多いからな、地味に難しい問題かもしれない。
「じゃあ答えをどうぞ！」
「”ユニバーサルホットチョイス”、我ながらそれっぽいな。」
「”ユニヴァーサルホールディングキャビネット”、流石はうつけホカゾノ、馬鹿丸出しだぜ！」
「”ユニバーサルホールディングキャビネット”、トレーナーなら常識だ。」
「キヨシくんとヒロト大正解！ホカゾノ、ホットチョイスって……。」
「ボケのセンスすら感じないわ。」
「うるさいよ！」
「さて三問終わってヒロト圧倒的！やはり日頃の行いが功を奏しているのか！」
「やはりヒロトはこういうとこ手堅いな。」
「ボクの頭脳はこれからさ、やっと暖まってきたぜ！」
「暖まりすぎて茹ってるだろキヨっちゃん！」
「黙れバカゾノ！ブッチギリドンケツの貴様に言われたくないわ！」
「大丈夫、問題は全部で十問あるからまだまだ逆転できるよ～。」
……まぁできるはずがないんだなこれが。
結局終わってみればヒロト８点、バカゾノ０点、キヨシ３点と目も当てられない。
一番チケット使わなさそうなヒロトが勝利し、あまりに無惨な馬鹿二人。

「さ、クリパも佳境だが、そろそろプレゼント披露といこうか！」
「イェア！」
「ヤッホー！」
「イェイ！」
「パーティータイムだな。」
「なお渡す相手はくじ引きで決める、キヨシとかのプレゼントは恐らくハズレだ。」
「失礼な！ちゃんと空気読んでエロに走ったぞ！」
「あぁ、ハズレだ。」
「間違いないな、ハズレだ。」
「聖なる夜にエロって……。」
「まぁいいや、とりあえず引けよ。」

早々にホカゾノがクジを引っ張りだす、相手はカオリのようだ。

「じゃあカオリさん、ウチのプレゼントをどうぞ！」
「ありがとー、では早速。」
「ろくなもんじゃないな。」

ホカゾノはポケットから横長の封筒を取り出すと、カオリに手渡した。

「ディ、ディズニーチケット！？ホカゾノでかした！」
「いつになく真面目なプレゼントだな。」
「せっかくだし兄さんと行きなよ、ペアだから。」
「サンキューホカゾノ、ナイスなセンスだよ。」
「ヤバいよヒロト、ホカゾノが意外に高評価だよ、負けるよ俺たち。」
「いや一緒にしないで、俺も真面目なプレゼントだから。」

「まさか俺だけだと！？」
「馬鹿やってないで早く引けよ、次はヒロトかな？」
「俺のはヒロイさんしか意味がないのさっ！……よしヒロイさんだ。」
「何か期待度上がるな、何をくれるんだ？」

ヒロトはテーブルの下からやたら長い箱を取り出すと、テーブルの上に置いた。
おいおい、マジかよ懐かしい箱だぞこれ。

「青龍堰月刀、わざわざ横浜の武器屋まで行ってきたぜ！」
「ヒロト、愛人になってくれ！」
「兄さんが取り乱した！？」
「いいよ。」
「素直に承諾！？」
「カズく～ん、死にたいの？」
「ありがとうヒロト、大事に使うよ。」
「使われるぞ俺たち。」
「ウチは逃げるぜ！」

そのあとは、カオリからヒロトにブレスレット。
俺からキヨシに革のリュック。
最後はキヨシから、ホカゾノにプレゼント。

「く、よりにもよってこの組み合わせかよ！」
「ウチの台詞だ！何で野郎からエロアイテム貰わなきゃいけない！」
「何故みんなボケなかった！」
「わきまえろアホめ。」
「照れながら渡してね。」
「ヒロトの要求エグい。」

「早くしろよ〜。」
「え、えっと……。」
「ちゃんと照れた。」
「やるんだ。」
「やるんだね。」
「照れ方甘くない？」
「こ、これ、受け取ってください！」

かなり引き気味なホカゾノが、明らかピンクな箱を開ける。

……ブゥゥゥゥゥン。

「さぁ、殺ろうか。」
「判ってたけど、結構殺意湧くね。」
「兄さん、刀借りるね。」
「ヒロイさん、銃借りるよ。」
「ちょっ、落ち着けってみんな！」
「冷静だよ兄さんは、青龍堰月刀の威力を試したいだけさ。」
「鉛弾を浴びてね。」
「血の雨を降らせてやるよ。」
「照れるってより後輩の女子だろあれじゃ。」
「一人ツッコミどこ違うじゃんギャアーーース！」

聖なる夜の雪の中、ボロクソにやられたキヨシは棄てられました。
みなさん、メリークリスマス！

1月1日　Day. 12

元旦の朝。
新年を飾るに相応しい晴れ、初日の出も素晴らしかった。
馬鹿共は年を越してもばか騒ぎしてたが、新年早々俺による鉄槌を食らった。
ヒロトだけはチケットで回避、早速使ったな、これじゃ一年なんてとてももたないだろ。
キッチン、つまり二階の自宅の方。
俺はきちんとお雑煮を用意している、他はかったりぃからパス、別に食べたいわけでもないだろうし。
数の子とかかまぼこくらいは買ってきて皿に切り分けてある、まぁ摘む程度だな。

「おはよーカズくん、改めてあけおめ～。」
「おはようカオリ、あけおめ。」
「おぉ～、お雑煮の匂いがするね。美味そう。」
「餅はたくさん買っといたから遠慮せず食べな、しっかり食べて一年の英気を養え。」
「ならば俺は四つ！」
「ウチなんて五つ！」
「負けるか六つ！」
「七つだ！」
「はよッス、俺は一つでいいです。」
「あたしは二つね。」

何でこいつらこんなに元気なのか、いっそ怖いわ。
俺は大量の餅をオーブンに入れて、しっかり火を通してからお雑煮

に入れた、馬鹿二人は丼。
騒がしく始まった新年。
なら発散させねばなるまい。

「飯食ったら縁日行くぞ、そろそろ出店も始まってる頃だろ。」
「キヨシ！射的で勝負だぜ！」
「おっしゃー！乗ってやる！」
「俺は金魚すくいでもしようかな。」
「あたしは綿飴とか食べよう。」
「みんな乗り気だな。んじゃ片付けたら準備しとけよ。」

各々お雑煮を食べ終わり準備開始、馬鹿二人は案の定餅が多すぎて苦戦、元旦から胃袋虐めるなよ。
玄関に集まった俺たちは、一人残らず完全防寒、誰も着付けとかできないからな。
太陽がキラキラと眩しい雪道を、五人連れだって歩く。
目指すは神社の境内、実はちょっとだけ俺の店からも援助してる。
前の二人は腹痛から回復し、既にくるくるとはしゃぎ回ってる、騒ぎを起こさなきゃ良いんだが。
段々と道行く人が増えてきて、やがて神社の前に到着した。

「ウチには今、神が宿っている！縁日制覇の神が！」
「神が宿ってるなら神社入れないな。」
「やっぱいない、いつも通り。」
「あっはっは、俺は神など降臨しなくとも貴様ごときに負けはしない！」
「言ってろ馬鹿めが！では先にたこ焼き屋に着いたほうが勝ちだ！」
「おい止めろ、人がたくさんいる中で走るな。」
「レディ……。」
「ゴー！」

「聞きゃしねぇ。」

二人は人混みの隙間を擦り抜けて、出店の道へと飛び込んでいった。賑やかな話し声や、ソースや甘い匂いが漂ってくる、腹が減ってくるよ。

「俺はホカ達と一緒にいるよ。」
「気を遣ってくれるのか？」
「ありがとうヒロトくん。」
「んじゃ、急いで探します。確かたこ焼き屋にとか言ってたし。」

急ぐと言いつつゆったりと歩いていくのはヒロトらしいな、まぁ爆発でもしない限りは大丈夫だろう。
俺はカオリの手を取ると、二人で出店を見て回り始めた。

「何処に行きたい？綿飴とか食べるか？」
「食べる食べる～。」
「なら探しに行こうか、匂いを辿って。」
「おぉ～！」

提灯の明かりって何かわくわくさせてくれるよな、楽しい事が起こりそうな雰囲気と言うか。
綿飴はすぐに見付かって、二人で分け合いながら回っていく。
暫く回ってると、案の定というか、馬鹿共の声が聞こえてきた。

「ウチの実力はまだまだこんなもんじゃないぜ！」
「はっ、馬鹿は実力差ってのも判らないらしいな！」
「もう何度目だよお前ら。」
「相変わらず馬鹿だなお前ら。」

ん？
何か今の誰だ？
懐かしい声が聞こえたような。

「よ～ヒロイ、遅かったな！」
「は？いやいや、何故お前がここに居る！？」
「偶然だって、ご都合主義とも言うけど。」
「こんな田舎の縁日に元旦から偶然ふらっと現われるとか怖いわ！」
「おぉ、確かにそうだな。」
「久し振りだねシカマくん。」
「アベさんも久し振り…ってヒロイだったね今は。」
「呼びやすい方で良いよ～。」
「じゃあ兄貴、久し振りにあれやるか！」
「毎回やってるよなこれ、いくぞ弟よ！」

力強くハイタッチ、昔から会った時と別れる時には毎回やってたな、懐かしい話だ。

「てかこの射的珍しいな、エアライフルでやるなんて。普通コルク銃だろ？」
「まぁ珍しいわ、何しろこの射的のライフル提供したの俺だしな。」
「……納得だわ。」
「どうりで見たことあると思ったよ、店の備品か。」
「いや兄さんの私物だろ。」
「店の備品って…お前のカフェは軍事基地か何かか？」
「普通の洋風カフェだよ。」
「いやいやお兄さん、銃とか刀を調度品みたいに置いてる店は異常だから。」
「誰のせいで置く羽目になったと思う？」
「おいホカゾノ！お兄さん困ってるぞ！」

「絶対ウチだけのせいじゃないって！」
「いいから早く撃てよホカ、オジサン困ってるぞ。」
「この二人は迷惑しか掛けないね。」
「よしホカゾノ、これでラストだな！」
「１１回目にして勝利とは、我ながら遊びすぎたぜ！」
「もうそんなやってんの！？」
「ヒロイ、こいつらちゃんと躾けろよ。」
「すまない、何も言い返せないな。」
「カズくんのせいじゃないと思う。」
「間違いなくこの二人が悪い、成長してない。」
「倒すぜあのオッサンを！」
「倒したらウチらの奴隷にしてやるぜ！」
「やめんか馬鹿！」
「でも確かにお手伝いさんは欲しいね……頑張って二人共！」
「カオリ！？」
「いい加減冗談も程々にしとけよ、オッサン困ってるぞ。」
「厄介な客に絡まれてるよなあのオッサン、可哀想に。」
「オッサンオッサン言うなよ、可哀想に。」
「ホカゾノ、一斉射撃だ！」
「ファイアー！」
「このたわけ！冗談も大概にせぇやー！」

腰のホルスターからガバメントを抜くと、容赦なく二人の頭に撃ちこんでやった。
怯える哀れなオッサンに迷惑料を払い、頭を抱えて蹲る馬鹿共を引き摺っていく、今日はシカマが居たから楽だよ。
ずるずると二人を引き摺りながら出店を回っていると、おみくじを引く建物に辿り着いた。
せっかく来たんだし引かない手はないよな。

「すみません、おみくじ六人で。」
「はい、六百円だよ。」
「ほらお前ら、一人一回引け。」
「一番槍は貰ったー！」

キヨシが意気揚々と八角形の木筒をガシャガシャ振った、ありゃ箱が壊れそうだな。
細長い棒が出てきて、そこに書いてある番号のおみくじを受け取る、ちょっとドキドキする瞬間だ、どんなクールくんも大抵は内心気になってしょうがない。
キヨシがテンション高くおみくじの糊を剥がしていく、ちょっと破れてるぞー。

「俺は……大吉だ！」
「こらこら不正はいかんぞキヨっちゃん。」
「弟くん、見え透いた嘘は止めろよ。」
「キヨシ、俺は信じてるぜ……本当のことを言えよ、笑わないから。」
「オレ、暫く会わなかったけど、キヨシは嘘つきじゃなかったはずだ。」
「みんな辛辣すぎだよ、キヨシくんは嘘ついてないよ。キヨシくん、読み間違いとかしてない？」
「カオリの言葉が一番心を抉ります。」
「あはっ？」
「まぁまぁ嘘つきはほっといて。」
「俺は嘘ついてないから、見てみろし！」

みんなで確認する、確かに大吉だ、擦っても透かしても火で炙っても……燃えちった。

「おいお兄さん、何しやがんの！？」
「さぁホカゾノ、早く引きなさい。」
「はーい。」
「クソ兄貴は俺の話を聞きなさい！」
「ウチは小吉だった、まぁ悪くはないな。」
「うん、凄い絶妙なラインだな。」
「見栄も張らず、実にちょうど良いね。」
「会わないうちに成長したなホカゾノ。」
「よく判らないけど、なんか小吉ごときでスゲー誉められた。」
「それよりあのお兄さんおみくじ燃やしやがったよ！？誰か俺の話も聞いて！」
「あたし引きま～す。」
「カオリさんは良いの引きそうだな、ヒロイの姓を手に入れた女性だし。」
「俺もヒロイだから大吉か～。」
「カオリ、例外もあるぞ。」
「酷い！」
「最近キヨシが扱い悪くてウチは助かるな。」
「大吉だ～、ラッキー！」
「流石だ、おめでとう。」
「やっぱヒロイの嫁は強いな。」
「兄さんは大狂を引くな。」
「お、面白いなそれ。」
「とりあえずヒロイ、一緒に引くか。」
「おう、せっかくだし良いのが引きたいな。」

俺とシカマで同時に引く。

「オレは中吉、悪くない気分だな。」
「俺は……勇往邁進。」

「どしたのカズくん、何だったの？」
「だから勇往邁進。」
「兄さん何をはぐらかしてんの？もしかして大凶だったの？」
「うわ、あんだけ偉そうに言って自分は大凶とかダサっ！」
「黙れボケナス！勇往邁進だと何度言えば判るんだ？」
「ちょっと見せてくれ。」
「ほら、もはや凶とか吉ですらなく、勇往邁進なんだ。」
「ホントだ、むしろ凄いな！」
「ヒロイさんおみくじ引いたのにおみくじじゃないな。」
「カズくんの好きな言葉じゃん、良かったね。」
「ある意味大吉より嬉しいな。」
「勇往邁進って何？」
「困難をものともしないで恐れず立ち向かうことだ。」
「キヨシ達には絶対ないな。」
「シカマさんに同意、こいつら逃げる。」
「失礼な！ウチだってやるときゃ戦うさ！」
「俺の実力はお兄さんの実力の１割を軽く凌駕するぜ！」
「それって雑魚じゃん！」
「ふふん、そこは知略と創意工夫に満ちあふれたこの頭脳で上回るさ！」
「この前のクイズ散々だったよねキヨシくん。」
「あぁ、ずたぼろだったな。」
「あれは酷かった。」
「ウチでも何個か判ったよ。」
「キヨシって頭良かったっけ？」
「私は虐めを受けている！虐め反対！」
「これは愛だよ弟くん。」
「歪んだ愛などいらぬ！」
「じゃあ本格的に虐めようか。」
「無視だな、無視。」

「さて、リンゴ飴でも食べ行くか。」
「俺は焼き鳥食べよう。」
「弟虐めてそんなに楽しいか！」
「……。」
「早速無視！？」

ぐだぐだとしてるのは変わらない、このテンションずっと続くのか。それからそりゃもう飲み食いしたよ、たこ焼き屋は大繁盛だろうけど。

「どちらがより多く食えるか勝負だ！」
「ウチが負けるか！焼きそば五人前を食った胃袋を舐めるなよ！ほら兄さん、かかってこい！」
「そろそろ朝のお雑煮がかま首もたげる頃だろう。この勝負、勝機はないぞ馬鹿め！」
「あんな前菜じゃ小腹も膨れねぇぜ！お兄さんは無様に負けるのさ！」
「負け惜しみはこちらの番号まで～てね！」
「はっ、小僧ども、泣いて謝ろうと許さぬぞ。」

この街の人間は勝負事が好きなのか、周りにはギャラリーが集まってきて大騒ぎ。
シカマとの別れ際まではしゃぎまくった一日だった。
今年もまだまだ楽しくなりそうだな。

1月15日　Day. 13－1

「武道大会…ですか？」
「そうなんだよ、頼めないかな？各街から三人まで参加可能なんだが、この街は年寄り多いからさ。」
「はぁ、俺は構いませんが。」
「ホントかい？良かった、助かるよ。」
「ウチから三人出して構わないんですか？」
「あぁ、そうしてほしい。因みに優勝地域には補助金が出るから、フラトレスには優先して要望が通るようにするよ。」
「それは助かります、頑張らせてもらいますよ。」
「それじゃよろしくね。日時は２２日の１０時から、場所は市営体育館だから遅れずにね。私たちも応援に向かうよ。」

「以上が事の顛末だ、参加は俺とホカゾノとキヨシで登録した、異論はないな？」
「あるわけない、最高の舞台だ！」
「腕が鳴るぜ！」
「あたし応援に行こう！」
「俺も見に行こうかな。」
「優勝は俺だがな。」
「ははは、お兄さんにしては冗談が月並みだね。」
「ウチが優勝に決まってるのにさ。」
「上等だテメェら、今ここで結果出してやっても良いんだぜ？」
「三人が暴れたら店が壊れるから止めてね。」
「てか普通にヒロイさん優勝だろうな、キヨシが一番早く負けそう。

」
「冷静な予想をありがとうヒロト、だが俺は負けないぜ！」
「キヨっちゃん瞬殺して脳ミソスープであさげと洒落こむぜ、グロくて飲まないけどな、あっはっは！」
「貴様、言わせておけば！」
「Ｔｈｅｎ，　ｐｌｅａｓｅ　ｒｅｔｕｒｎ　ｙｏｕ　ｔｏ　ｗｏｒｋ．」
「Ｏｋａｙ　ｂｒｏｔｈｅｒ．」
「止めて、ここは日本よ！」
「今の言葉を訳すと「ウチは英語なんて判らないから日本語喋れ！」となる。」
「流石ヒロトくん、適確な説明だね。」
「黙ってろヒロト！」
「いやいや、ホカゾノ馬鹿だろ。」
「流石は馬鹿日本代表、愛国心に満ちた馬鹿っぷりだぜ！」
「よしキヨシ表出ろ、今すぐ出ろ！」
「どうでも良いがお前ら、鍛練は怠るなよ？ウチの従業員として無様な戦いは許さん、必ず勝て！」
「日頃から鍛練してるカズくんは良いとして、ホカゾノ達はサボってるなぁ。」
「一週間もあれば取り戻せるさ、槍の調子も見ないと。」
「ウチも刀出そうかな、そろそろ埃被ってそうだし。」
「ホカゾノ、かなりやる気だろ？」
「表舞台で兄さんとガチバトルなんて中々ないからね、甘く見てると兄さんだって負けるぜ！」
「よく言った、楽しみが増える。正直参加はする気なかったんだ、言われたから出るようなものだ。」
「まぁお兄さん出たら楽しむ前に優勝セレモニーだしね。」
「まさかこんな田舎のカフェに魔神がいるとは誰も思わないでしょ。」

「お前らがやる気出すなら俺も手は抜かない、全力を出そう。」
「カズくん、体育館壊すのだけは止めてね。」
「こいつらが腑甲斐なかったら壊れるかもな。」
「よしホカゾノ、早速鍛練に向かうぞ！」
「そうだな、河原に行くぞ！」
「今日はお前ら休みで良いぞ、呆気なく倒してもつまらないからな。」
「はっ、見てろよ魔神！あんたを倒して俺の武勇伝に箔を付けるのさ！」
「新年あけていきなり兄さんを倒す……むしろ一生もののネタだぜ！」

バタバタと二階に上がっていく二人、刀と槍を取りに行ったんだろう。
珈琲をカオリに任せ、俺は料理、ヒロトは……何処か行ったな、アイツも便乗しやがった。
まぁ二人が暴れすぎないように見に行ったと信じよう、行っても無駄な気もするけど…。

カランカラン。

「こんちはマスター、久し振り～！」
「あぁ君か、文化祭以来かな？」
「あの時はお世話になりました、お陰で大成功！板橋さんにもお礼言っといてもらえますか？」
「了解した、次の仕入れの時にでも言っておこう。」
「てかマスター、来週の武道大会出るってホント？」
「ん？もう広まってるのか？」
「今朝商店街の掲示板に貼られてて、それをみた先生が学校で喋ってた。」

「情報回るの速いんだね～。」
「でも気を付けてねマスター。ウチのクラスの男子が出たかったらしくて、マスター倒せば出れるだろうって張り切ってたから。」
「うぁかったりぃ、まさか決闘でも挑まれるのか？」
「カズくん負けたらダメだよ？でも大人気ないのもダメ。」
「キツい制約だぜ。」
「てかマスターって強いの？ただのカフェのマスターでしょ？」
「まぁそうだな、ただのマスターだ。」
「カズくんがただのマスターだったら世の中大変だね。」
「何か凄そうだね！」
「フラトレスのマスター！俺と勝負しろー！」
「ほらカズくん、外にお客さんだよ？」
「はぁ、マジで来るかよ普通。最近の高校生って案外行動力あんのな。」
「マスター、頑張ってね。」
「やれやれ、かったりぃ。」

俺はエプロンを外すと、面倒だが店から出る。
おいおい、ガチンコ勝負じゃねぇのかよ。
外には２０人くらいの高校生が半円を描いて店を囲んでいた、まるでカチコミじゃないこれ。
俺はため息一つ、煙草に火を点けながら問い掛けた。

「えっと、全員珈琲で良いか？」
「要らねぇよ！そんな事より俺たちと戦え！」
「そんな事よりとか言われると俺も商売出来なくなるんだが。」

俺は見に来ようとした緋結華（俺をマスターって呼ぶ女子高生）を店内に押し戻す。

「何すんですかマスター？」
「こいつら結構過激だからな、お前がウチに出入りしてるのが知れたら厄介なことになるやもしれん。とりあえず中で大人しくしとけ、すぐに済むからな。」
「緋結華ちゃんこっちから見えるからおいで。」
「は～いカオリさん。」

さて、どうすっかな。
わくわくした気配は良いとして、あの制約がかったりぃ。
まぁ敗けるなんて全力でお断わりだが、大人気ないってどうすれば良いのかね。

「まぁいっか……なぁ君達。」
「なんだ！」
「かったりぃからまとめてかかってきてくんない？俺も仕事中だからあんま時間取れないから。」
「舐めんじゃねぇ！」
「調子乗んなよ！」
「お前みたいな奴が何で無条件で大会に出れるのか不思議だぜ！」
「それは君達が判断したまえ、俺は口の悪い餓鬼は大嫌いだ。因みに俺を倒したらどうするつもりだったのかな？」
「河原にいる他の参加者も潰して、この中から三人選ぶのさ。」
「じゃあまだ河原の奴等には手を出してないな？」
「あんたを倒したらすぐに行くけどな！」
「やれやれ、勇ましいね。さて、君達に良いことを教えてやろう。」
「何だコラ？」
「アイツらには会わなくて正解だ、何しろ今は鍛練に行ってる。君達がノコノコ行ったら、間違いなく皆殺し確定だよ。」
「俺たちを舐めんな！たったの二人だろ？」
「いや、今からたった一人に潰される程度じゃ荷が重いと言うこと

さ。」
「上等だコラァ！」
「やっちまえ！」
ヤンキーみたいな金髪二人が勢い良く突っ込んでくる、やれやれ面倒だな。
喧嘩キックを躱すと、首筋に一回ずつチョップする。
人形みたいに崩れた二人を担ぎ上げると、若干ビビり始めてる残りの奴らに放り投げた。
「力の差は判っていただけただろうか？」
「ふざけんな！」
「こいつらの仇打ちだ！」
「へぇ、そこんとこはちゃんとしてるのか。良いぞ、仲間は大事だもんな。」
次々殴りかかってくる高校生の隙間を縫うように歩きながら、確実に一人ずつ気絶させていく。
三分後。
雪の残る地面には２０人の高校生が倒れていた。
緋結華が店から出てきて、俺の隣で驚いている。
「マスターってホントに強いんだね。」
「こいつらすぐに起きるからまだ出てくんな。」
「そんな調節までできるんだ。」
「寒い中で放置もできないし、中に入れてやるほどお人好しでもないんでな。」
「そんな事まで考えてたんだ。」
「これだけ何もできずに敗けたら流石に諦めるだろ？少なくとも誰も大会参加を認めない、俺に勝てないなら優勝も有り得ないからな。

」
「てかマスター、そんなに武道大会楽しみにしてるの？」
「今回はリーグ戦らしいからな、俺も本気を出せる相手がいるのさ。」
「もしかしてホカゾノさん達？」
「アイツら俺を本気で倒すつもりらしいぞ、そりゃ楽しみにもなるさ。」

凄そうだねと呟いて、緋結華は目の前の光景を眺めている。
つか緋結華ってこういういかにも喧嘩ってのに慣れてるな、もしくは単に肝が太いのか、鍛えたら面白そうだが。
まぁあんまり女子高生に暴力を教えるものでもないか、護身くらいは必要だけど。

「さて面倒も片付いたし、仕事に戻ろうかな。」
「あたしもそろそろ帰るね、課題とか貯まってるから。」
「あぁ課題か、かったりぃよなぁ。」
「それじゃマスター、また遊びに来るね～！」

緋結華が鞄を背負って走っていく。
てかアイツ、何にも頼まないで帰りやがった、無駄に時間食ったな。

「あれ、兄さんだ。」
「何でこいつら伸びてんの？」

振り向くと若干汚れた格好の二人が高校生たちを指差しながら立っていた、ヒロトは雪で奴らを埋めようとしてる、コラやめなさい。

「何か大会に出たいからって俺を倒しに来たらしい、やれやれだ。」
「うわマジで！？こいつら勇者！？」

「お兄さんをリンチなんて、魔王誘っても辞退するわ。」
「強くはなかったが肝が据わってる、まぁ二度とやらないだろうが。」
「兄さん相手に何度も挑む奴は脳外科行ったほうが良いな、多分そいつ重度のマゾだ。」
「っ……何が起きたんだ？」
「あ、目覚めた。」

雪にまみれた高校生たちがふらふらと立ち上がる。
ヒロトを手招きして後ろに隠すと、俺たちは見下ろしながらトドメの言葉を放つ。

「まだやるか？」
「兄さんばっか楽しませるな、ウチも混ぜろよ！」
「俺はお兄さんみたいに手加減とかできねぇからな、病室予約しとけよ？」
「ヒィ。」
「ビビるくらいなら始めから挑むなよ、戦いを舐めんな！」
「挑む相手を間違えすぎだよ、もうちっと賢く生きようぜ！」
「兄さんに挑むならまずウチらを倒せないと話にならないよ。」
「すみませんでしたー！」

蜘蛛の子を散らすように逃げ出していく、また嫌な噂が広まりそうだ、まったく迷惑な。

「そろそろ新聞の片隅に載りそうじゃない？魔神が経営する喫茶店、高校生２０名返り討ちに遭うって感じで。」
「そんな載り方は嫌だな、客足が減りそうだ。」
「でも原因は兄さんじゃない？」
「俺は被害者だと思うが…。」

「てか意外に大会出たがる人も居るんだな、強さを試したい奴らって多いんだ。」
「もしかしてこれから襲撃が増えるとかないよな、流石にかったりい。」
「ここまでするのは稀でしょ流石に。」
「てかヒロイさんなら関係なくない？どうせ一瞬でしょ？」
「まぁあと一週間くらい我慢しなよ兄さん。」
「やれやれ、良い運動になりそうだ。」

1月22日　Day. 13－2

「これはまた、凄い人だな。」
「経済効果高そうだね～。」
「酒は何処に売ってるの？」
「キヨシ、あっちでたこ焼き売ってるぜ！」
「いい匂いだ、食欲をそそる！」
「受付が先だ馬鹿共！揃って行かなきゃいけねぇんだよ！」
「すぐに試合開始らしいね、ヒロトはあたしと一緒に席取りに行こうか。」
「了解です。」
「じゃあ頑張ってね三人共！」
「俺は敗けないさ。」
「お兄さんとの戦いがメインだ、他はおまけだぜ！」
「本命の前の肩慣らしってね。」
「あまり大声で言うなそういうこと、睨まれるぞ。」

むしろ既に周りからは注目を集めてしまっている、てか若いのが多いな、やっぱ各街の精鋭ってところか、場所によっては予選まで開催するくらい本気らしいからな。

「敗ける要素が見当たらないくらい弱そうだ、やる気が萎えるぜ！」
「おいおいキヨシ、ホントのこと言ったら傷ついちゃうだろ？あ、でもどうせウチらにやられるから一緒か。」
「黙れアホ、余計な手間こさえるな。そういうことは試合の時に言え。」

やれやれ、こいつらの挑発ほど神経逆撫でする言葉もないな。
……結構な強さの奴もいるみたいだ、用心しておこう。

俺たちは体育館入り口に設置された受付で選手登録を行い、選手の証である腕章を取り付けた。
意外に市営といえど広いらしく、各街の選手に一部屋あてがわれた。
参加したのは四つの街、選手は１２人になる。
戦いは総当たり戦、一番勝ち星を取った選手が所属する街が優勝となり、優勝選手には賞金十万円が贈呈される仕組みだ。
武器の使用は可、但し刃物は刃を潰した模造品に限る。
過度の攻撃や暴言は厳重注意、二度目から失格、明らかに危険だとされる物、ルール規定外品の所持は即失格。
こんなところか、まぁ普通にルール付きの喧嘩に近いな、グローブも着けないし武器もありなんだから、単に死なないってだけだ。
更に言えばこの大会では多少の怪我は自己責任、治療費も自分で出さなきゃならない、ウチの馬鹿共はナイフ刺さっても自己再生するだろうけど。
さて、そろそろ一回戦開始かな。
俺たちは運動ホールに集まると、各街ごとに整列した。
舞台に市長が立つと、観客も含めて皆が静まる。

「この度はこの柿崎体育館にお越しいただき、誠にありがとうございます。面倒な私の話は飛ばしましょう、皆さんが観に来たのは私ではないでしょうから。では選手の皆さん……良い戦いを！」

館内に歓声が響き渡る、やるな市長、これだけ判りやすい言葉ならまた票が集まるだろうな。
すると舞台裏から和服に刀を差した老人が出てきた、あのジジイまだ生きてんのかよ。
老人は荘厳な顔つきで選手を見渡し、俺を見て一瞬顔が引きつった。
だけどそのままマイクを取ると、歳の割りに張りのある声がスピーカーから響く。

「ワシは小峰宗十郎、小峰剣術道場の師範代である。本日は試合の審判として馳せ参じた、皆正々堂々と戦うが良い！」
「ねぇねぇ兄さん、あのじいさんって…。」
「黙ってねぇと斬られるぞ。」
「貴様、ワシの台詞を邪魔するか？」

小峰老人はいつの間にか抜刀状態でホカゾノの前に立ち、首筋に刃を向けていた。
相変わらず化け物じいさんだ、ホカゾノが動けないくらいだしな。

「すみませんでしたー！」
「それで良い、理解力は大事なことだ。それよりカズタカ、何故お前がアマチュアの大会に参加しとるのじゃ！」
「頼まれたからだジジイ。それより演説は良いのかよ、皆待ってるぞ。」
「そうだったな、ワシとしたことが。後で控え室に行くからな、待っておれ。」
「はいはい判ったから、舞台に戻れジジイ。」

また一瞬で消えると、納刀した状態で舞台に戻っていた。
二言三言喋ると、

「誰あのご老人は、兄さんばりに人間じゃないよ？」
「小峰宗十郎、こっちに来た頃に目を付けられてずっと勧誘されてんの。」
「何に？」
「剣術道場師範代、あのじいさんの相手、道場の跡継ぎと色々な、しつこいじいさんだ。」
「はぁ、意外とお兄さんって大変なのね。」
「まったくだ、馬鹿共の相手もしなくちゃいけないしな。」

「言われてるぞキヨシ。」
「は？お前だろホカゾノ。」
「ウゼェ。」
「それでは早速第一試合に入ります、各選手は所定の椅子にて待機願います。最初の選手は椚町の春川選手と並木町の三田村選手、両者中央へ！」
「俺たちはあっちの席に行こう、他の奴の戦いもちゃんと見ておけ。」
「でもあれは微妙じゃね？」
「普通にしたら弱くはないけど、強くもないじゃん。あれじゃ技術が介入する余地もない、ただの打たれ強さだよ。」
「ふむ、ただ雑魚と貶さないだけマシか。」

両者素手での格闘戦か。
まぁあれは腕自慢と言うより力自慢、洗練されたものでもないな、戦い方も喧嘩と変わらない、相手が武器とか持ってたらダメだろうな。
下手に武器とか持たず正解だろうな、怪我させるだけだし。
はぁ、やっぱ参加辞退すりゃ良かった。

「勝者、椚町の春川選手！」
「ハァ……ハァ。」
「あれはもう戦えないっしょ、体力なさすぎ。」
「自分に対して危害を加えようとしている者との対峙は、ただそれだけでも極度の緊張をするからな。結果常に全力で身体を動かす事になり、必要以上に体力を浪費するんだ。」
「ウチらは慣れてるから普段通りだけどね。」
「第二試合！木野塚町のヒロイキヨシ選手対椿町の武蔵選手！互いに中央へ！」
「おっしゃー！」

「やり過ぎるなよ？」
「ブッ潰せキヨシ！」
「キヨシ君頑張れー！」

客席からもカオリの声援、ヒロトは日本酒持ってる。
武蔵選手は刀か、名前に見合う実力かお手並み拝見。
小峰老人が互いを見やり、声高らかに言い放つ。

「いざ尋常に……初め！」
「はぁぁぁぁあ！」
「うわ、遅いな。お兄さんよか全然遅い。」

キヨシは相手の踏み込み斬りをバックステップで避けると、槍を高く真上に投げた。
相手は槍に目を向け、身体は隙だらけ、はぁ。

「月の裏側までぶっ飛びやがれー！」

渾身の回し蹴り、容赦してやれよ。
武蔵って選手は何が起きたのかも判らないまま舞台に向かってぶっ飛んだ、ありゃもう戦闘不能だな、いや戦意喪失か。
でも刀だけは手から離していない、ちゃんと侍じゃないか、そこは誉めるよ。

「勝負あり！勝者ヒロイキヨシ！」
「あと１００年修行してきな。」
「武蔵選手を医務室へ、ダメージ自体は大したことないじゃろ。」
「圧倒的！これが彼のカフェに属する武神の実力なのか！？」
「いやいやあんま誉めるなって。」
「この戦いをふまえ大会辞退者が出るかも知れません！それほどに

圧倒的だカフェ・フラトレス！」
「もはやウチらの所属が木野塚町じゃなくなってるよ。」
「まぁ正直虐めだからなこれ。」
「第二試合から既に優勝確定な気がします、いかがですか小峰さん？」
「ワシが各町に一度だけ代理として出るかの、じゃなければつまらない試合になろうて。」
「おぉっと意外な展開だ！審判自ら剣を取ります！」
「面白いじゃん、負けねぇよ俺は！」
「結局戦いたいだけかあのジジイ。」
「兄さん以外にも楽しめそうな相手だ、ワクワクしてきた！」
「市長のＯＫサインも出ました！各町に小峰宗十郎さんが参戦、確実にフラトレスの方々にぶつけてくるでしょう！」
「ではワシが試合中はフラトレスの奴らに審判を任ずるぞ、不正な判断は下すなよ？」
「かったりぃな、まぁ仕方ないか。」
「初開催から波乱の幕開けです！これは会場が大いに盛り上がるでしょう！」
「つか俺らの独壇場になりつつあるぞ、恨みを買わなきゃ良いんだが。」
「さて続いて第三試合！椚町の大塚選手対椿町の木崎選手！両者中央へ！」
「いざ尋常に……初め！」

それから二試合、フラトレスチームは後回しにされた、盛り上げるための対策かねこれは。
今のところ椚町が一番勝率が高いな、武蔵選手は復帰できてないようだ可哀想に。
「次で午前の部最終試合になります！椿町の武蔵選手対木野塚町の

ホカゾノ選手！ですが武蔵選手は戦闘不能のため、急遽代理の選手になります！」
「この状況で代理になるとは勇者がいるもんだな！あっはっは！」
「椿町の武蔵選手に代わりまして、シカマ選手！」
「何ぃ！？」
「よぉお前ら、正月ぶりだな。」

控え室の方からシカマが現れ、手には弓を持っている。
てか遂に来たって感じだな、こりゃ激しい大会になりそうだ。

「ホカゾノ敗けたな。」
「御愁傷様ホカゾノ。」
「シカマくん頑張れー！」
「おぅ！」
「カオリさんはせめてウチを応援して！」
「両者中央へ！」
「さて、準備運動を始めますか！」
「今は一人の男としてシカマさんを倒します。」
「言うじゃん、手加減しないぜ？」
「あっはっは、ブッ潰す！」
「いざ尋常に……初め！」
「一撃で眠れホカゾノ！我流弓拳術・剛掌打！」

シカマは張り詰めた弓を放つように、高速の掌打を放つ。
体育館が揺れ動く衝撃、直撃したら相当なダメージになる。
……けどあれは。

「その程度の威力と速度、毎日兄さんにボコられてりゃ見えるようになるんですよ！」
「へぇ、流石に真正面からじゃ受けられるか。」

「年間ボコられ回数が３６５回を余裕で凌駕するウチを舐めないで下さいよ！」

……や、得意気に語るなよ。

「それに単純な力比べなら、ウチは兄さんさえも越える！」

「化け物め、化け物レベル（モンスターハンター）の狩人と呼ばれたオレの技の冴えを見せてやる！」

「我流・龍葬斬！」

「甘い！降り注げ破魔矢！」

暴風を生む斬撃を躱し、シカマは空中から雨のように矢を放つ。

暴風と豪雨、二つの災害が真っ向から衝突する。

弓兵の矢はそのことごとくを斬り落とされ、剣士はその間合いに捕らえられない。

しかし矢はいずれ尽きる。

それまで耐えれば剣士にも勝機が見えてくる、互いに近距離戦となれば刀を持つホカゾノこそ有利だ。

まぁシカマはそこまで甘くない。

ホカゾノは高く跳び上がると、落下の勢いをつけて斬りかかる。

「我流・月光斬！」

「跳ぶのを待ってたんだよ！我流・崩天弓！」

残りの矢と必殺の斬撃が空中で弾けた。

着地するホカゾノは右肩を押さえ、シカマの弓は真っ二つに折れてしまっている。

単純に考えればホカゾノの勝利だろう。

だが小峰老人は未だ判定を下さない、戦いはまだ終わっていない。

シカマは折れた弓を床に置くと、拳を握ってファイティングポーズ

をとる。
ホカゾノは矢の当たった右肩から手を外し刀を握り直すも、すぐに刀身を鞘に戻した。

「勝負あり！勝者シカマ！」
「おっしゃー！」
「くっそー！」
「遂に激しい戦いに終止符が打たれました！何と大会開始から最強と呼ばれたフラトレスチームを打ち破ったのは、急遽代理として参加したシカマ選手だ！」

会場が歓声と拍手で割れるような音に満たされる、確かに一番楽しい試合だったな。

「互いに人とは思えない動きでした！小峰さん、いかがでしたか？」
「十分に鍛練を積めばあれくらいは可能じゃが、特にシカマ選手の精密さは感服するものがあった。ホカゾノ選手も良く凌いだが、若干敗けてしまったようじゃな。だが勝負は無情、勝者のみが生き残る世界じゃ、次の試合も楽しめそうじゃの。」
「ありがとうございました、では午後1時まで休憩となります、皆さましっかりとご休憩なさってください。」

さぁて、俺もそろそろ身体を温めてしまうかな。

1月22日　Day. 13－3

「貴様の弟子、中々見所があるじゃないかのぉカズタカ。」
「弟子じゃねぇよジジイ、つか帰れ。」
「年上に対する礼儀をわきまえよ！何じゃその言葉は！」
「あんた以外の人には丁寧を心掛けてるよ、大体何の用だ？」
「貴様、その実力にしてアマチュアを気取るほど腐ったのか！」
「別にどの流派にも技は賜ってねぇし、大体我流な上に公式の経歴もなけりゃ十分アマチュアだボケ！遂にもうろくしたか？」
「だからと言って許されることではないだろうが！」
「そう言いつつも参戦してきたのは何処のクソジジイだ人外！シカマまで呼び寄せたのもお前だろ？結局テメェも楽しい要素目白押しだなくそったれ！」
「だって審判なんてつまらないじゃろ！挙げ句の果てには小粒以下の雑魚ばかりでは欠伸を我慢する方が難しいわい！」
「本性だだ洩れだ老人、言い訳まで始めやがってみっともない、枯れ木みたいに出しゃばらず転がってろ！」
「良いからワシと勝負せい！」
「テメェそれが一番の目的じゃねぇか！」
「あの日のことは鮮明に覚えとるぞカズタカ、ワシが初めて負けた日じゃからのぉ。」
「あんな昔のことをまだ覚えてるのか、執念深さだけは衰えねぇな！衰えるのは大人の人間としての振る舞い方ばかりか？」
「今すぐ殺してやるわい！真剣で殺るわ！」
「上等だ腐れジジイ、お気楽審判すら出来ねぇくらい叩きのめす、病室の予約しとけや！」
「あのさ兄さん……ちょっと良いかな？」
「何だ！」

「殺伐としたコントは楽しいんだけどさ、そろそろ紹介してくんない？」

振り返るとキヨシやカオリまで頷いている、ヒロトは興味なさげに食後の一杯。

俺は溜め息一つ吐くと、ジジイを指差して説明する。

「このジジイ……この人は椚町にある小峰剣術道場の師範代である小峰宗十郎さん、日本にいる数少ない武神の一人だ。」

「やっぱリアルな武神なんだ。」

「どうりでウチが反応すら出来ないわけだ。」

「意外とこの県って化け物多いんだね。」

「それを倒すヒロイさんって。」

「そうなんじゃよ、だからこやつを次期師範代の位に据えようと思ってるんじゃが中々首を縦に振らん、お主らも説得してくれんかの？」

「いや無理でしょ。」

「お兄さん人に教えるの下手だし。」

「こんな俺様な人に師範とか。」

「ヒロイさんは鬼神であって人じゃないから技も普通の人じゃ使えないしね。」

「貴様、散々言われとるの。」

「まぁ後でカオリ以外は塵になるから。」

「差別、さべ～つ！」

「喧しいぞユ〇ィ！」

「あ、通じた。」

「間もなく午後1時となります、選手の皆様は速やかに指定の座席へとお戻り下さい。繰り返します……。」

「ほらジジイ、とっとと戻るぞ。」
「次は貴様の試合じゃったの、まぁ一度目からワシを当てるとは思わないが。」
「まぁ普通は実力を確かめてからだろうからな、暫くは戦わないだろ。」
「貴様ならちゃんと手加減するじゃろうが、あまり若い芽を摘み取るなよ？」
「あぁ、心得てるよ。」
「なら良い。では皆の衆、また後でな。」
「きちんと兄さん止めてくださいよ？」
「無論じゃ、止めるだけならば大丈夫じゃよ。」
「マジな武神が止めるだけとか言うお兄さんって……俺達よく今まで生き延びてるよな。」
「ウチらも武神だし、そりゃそうでしょ。」
「なんか現実の会話じゃないよね。」
「鬼神の旦那がいるのに何言ってんすか。」

ぞろぞろと体育館へと移動を始める、カオリとヒロトは客席へ。
午前の噂を聞き付けたのか、会場にはとてつもない数の観客が犇めいていた。
体育館に入れない人達は、急遽設置された大型スクリーンで屋外観戦らしい、用意が早いねホント。
因みに広まってる噂とは、「カンフーハッスルをノンフィクションで観れる！」ってものらしい、確かにあの映画と大差ないが、今どきあの映画を知ってる方が驚きだわ。
さて、前置きはこれくらいにして、そろそろ始めるかな。

「皆様お待たせ致しました！これより午後の部を始めさせて頂きます！まず最初のバトルは、並木町の御奈坂選手対、カフェ・フラトレスのマスターであり総大将のヒロイカズタカ選手だー！」

「カズ君も緋結華ちゃんも頑張れー！」
観客が一斉に歓声を上げる、悪くない気分だな。
これはある程度良い試合にしないと後々の評判にも影響が出そうだ、緋結華を殴るわけにもいかんし。

「あの娘ってよくウチのカフェに遊びに来るよな？」
「この前の高校生瞬殺事件の時も居たらしいぞ、何でも情報提供者だとか。」
「二回戦で最強たる片鱗を見せ付けたキヨシ選手は、カズタカ選手の弟になります！その戦闘力ははかり知れません！対して御奈坂選手は並木高校の学生、仲間内からも鬼神と恐れられる男を相手に一体どんな戦いを観せてくれるのか！小峰さんはどう思われますか？」
「勝ち負けは別として、彼女がどういった戦いをするのかが気になるところじゃ、当然秘策もあるじゃろうな。」
「やはりあの鬼神相手には秘策なしでの正面突破は不可能だと？」
「あの男は強い、ワシですらかつて一撃で沈められた男じゃ、この世界でもまともに戦えるのはごく僅かじゃろう。」
「小峰さんにそこまで言わせる男、世界最強とも言える戦いが見れるのか！では両者中央へ！」
「まさかお前が最初の相手だとはな、戦いづらい。」
「マスターが強いのは判ってるけど、全力で戦うよ！」

緋結華は重たいハルバートを大きく振り回すと、体勢を低く構えた。
あれは擦るだけでも重量だけでダメージを負うな、まぁ当たるとは思えないが用心しよう。
俺も紅い鞘から兼定を抜くと、上段斜めに構えた。
それを見た小峰老人は頷いて、声高らかに叫ぶ。

「いざ尋常に……始め！」

「小峰流斧槍術・揚羽の舞！」

肉体を弾き跳ばす重撃が、足元から顎へ跳ね上がってくる。
即座に上体を反らし躱す、破壊的な気配が目先１ｃｍを通っていく。
ん、小峰流か。
緋結華はそのまま回転を始め、止まらずに連撃を加えてくる。
俺は良く目が回らないもんだと感心しつつ、躱しながらジジイに話し掛けた。

「意外な隠し玉だなジジイ。初めにこいつをここで見たときは何の冗談かと思ったが、なるほど中々に鍛えたみたいだな。」
「こやつは元々スケートリンクで活躍しておったようじゃからの、こういった攻撃も出来ると踏んだんじゃわい。」
「だからか、しかも相当に飲み込みも早そうだ。だからこの大会に出場させたな？」
「こやつの成長速度ならこの大会で確実に何かを吸収する、またとない機会じゃろ？」
「私が強くなる為に、マスターには負けてもらいますよ！」
「面白いな、ジジイに先を越されたというわけだ。では緋結華、鍛練に付き合ってやる、お前は全力で向かってこい！」
「いきますよ～！続いて飛燕の舞！」

緋結華の回転攻撃がより速く、より複雑に吹き荒れる。
軸をずらしても急角度でも追い付き、動きを先読みして退路を断ってくる、だからこの前俺の戦いを見たがったのか、行動パターンを確認するために。
まったく、本当に惜しい逸材を逃したな、やってくれるじゃないかジジイ、ちょっと羨ましいぞ。
攻防一体の攻撃、これじゃ迂闊に斬り込んだら痛い目を見る。
だけどこいつは……もう少しかな。

俺は躱すさいにわざと体勢を崩すと、片膝を付いて刀を構えた。
「おぉーっと！あの鬼神に片膝を付かせたー！あの少女は一体何者だー？」
「この隙を待ってたんですよ！小峰流斧槍術・大旋風！」
回転の勢いをそのままに、最も遠心力を使いやすい回転、横の振り回しを頭に向けて放ってきた。
踏み込みによる一点集中打撃、恐らくは緋結華の大技。
「駄目だな緋結華、まだ早いよ。」
俺はハルバートと床の僅かな隙間に転がり込み、通り抜けた瞬間裏拳を床に叩き込む。
三角跳びの要領で、もう一度元いた位置に戻る。
目の前には空振りした格好の緋結華が、驚愕に目を見開いてこちらを見ていた。
深く腰を落とし、飛び込む。
「我流・一閃。」
すれ違いざまの高速居合い。
だが驚いたのはここからだ。
踏み込みで動けない筈の緋結華が、蹴りによって俺の刀を防いだんだ。
確かに技までに一瞬ながら間はあった、多少の油断があったのは認めよう。
だがあの体勢から踏み込んだのと逆の足で即座に回し蹴りを放てる人間がどれだけいようか。
刹那の間にそれを考え付き、体勢が崩れるのを覚悟で蹴りを放つ、

しかも正確に。
刀を鞘に戻し、床に倒れた緋結華を見下ろす。
結果として俺は勝てる、だがちょっと悔しい。
これほどの逸材を逃したことが、途方もなく惜しいのだ。

「いたた、やってしまった～。」
「……。」
「どうしたカズタカ、まだ試合は終わっとらんぞ？」
「くそ、すぐ行動に移さなかった俺の負けか。」
「ワシの目の方が幾分か良かったということじゃな。」
「年老いたジジイって訳じゃなかったってことか。」
「まだまだもうろくしとらんよ、はっはっは！」

俺は舌打ち一つして、緋結華に刀を向ける。
こいつも負けは判っているようで、その潔さも悔しさを大きくした。
小峰老人が手を上げて叫ぶ。

「勝者、ヒロイカズタカ！」

わっと歓声が会場の外からも湧いた。
俺の強さを褒めるものもあるが、殆どは緋結華の奮戦を讃えるものだ。
あぁ、戦いにも試合にも勝ったが、別のとこで二人には負けたな、やれやれ。
俺はちょこんと座り込む緋結華に手を差し伸べると、緋結華もそれに応じて掴み、立ち上がる。
俺は緋結華の頭を撫でながら苦笑した。

「しっかりこのジジイのとこで修行してみろ、お前は必ず強くなるぞ。」

「マジっすか！？頑張るよマスター！」
「だが気を付けろ、このジジイは最強だが、性格も最高にウザイ。」
「そうですか？結構優しいと思いますけど。」
俺はジジイを睨み付けると、ジジイは口笛を吹きながらそっぽを向いた、白々しいな。
手を差し出すと、緋結華もそれを握り返す。
そこで更に歓声が響き、後日この試合は最も良い戦いだったと称賛されることとなる。

「予想外の展開が起こりました！なんと、なんと高校生が彼の鬼神に対し十分すぎる戦いを観せてくれました！結果としては負けとなりますが、これは他の選手に大きな励みとなるでしょう！圧倒的実力差の中、勇敢にも立ち向かった少女に皆様今一度盛大な拍手をお贈り下さい！」

体育館が震えるほどの大歓声が、拍手と一緒に緋結華へと贈られた。
ハルバートを携えた緋結華は静かに頭を下げて、その拍手に手を振っている。
俺は兼定をしまうと、その歓声を背に席へと戻ろうとして、ジジイに止められた。

「貴様を越える戦士にワシが鍛えておく、それまで鍛練を怠らずに待つが良いぞ。」
「せいぜい期待しておこう。だが奴はまだ高校生だ、あまり根を詰めすぎるなよ？勉強や遊びだって大事な人生なんだからな。」
「心得ておるよ、まだ跡継ぎには早いからの。」
「チッ、まぁいい。」
「さぁ続いての戦いは、椿町の沢木選手対、並木町の滝沢選手の戦いです！両者中央へ！」

またも歓声が響き、会場はかつてない熱気に包まれつつある。
また両選手も緋結華の戦いに感化されたのか、初めの頃の闘志を取り戻していた。

「お疲れ兄さん、あの娘凄いね。」
「あぁ、稀代の才能と言えるな。まだまだ強くなるだろうよ。」
「お兄さんにそこまで言わせるとは……俺も手合わせの時は全力でいこう。」
「お前らも負けるなよ？」
「まだ流石に負けないさ。」
「本気を出したら一瞬だね。」
「違う、未来の話だ。」
「あぁ確かに、あの成長速度ならいつか追い付いてくるね。」
「鍛練して待ってなきゃな。」

そこで試合に決着がついたのか、大きな歓声が上がった。

「二人も熱い戦いを観せてくれました！惜しくも負けてしまった沢木選手には次の試合で活躍してほしいものです！さて次の試合に参りましょう！木野塚町のヒロイキヨシ選手対、同じく木野塚町のホカゾノ選手！武神同士の戦いです！一体どんな戦いが繰り広げられるのでしょう！それでは両者中央へ！」
「よっしゃー、ホカゾノ殺す！」
「今なら謝れば手加減してやんよ！」
「舐めんなよアホが！床を舐めさせてやんぜ！」
「上等！その言葉、後悔すんなよ？」

やる気満々の二人が中央へ歩いていく。
……体育館壊れないか心配だぜ。

1月22日　Day. 13－4

「いざ尋常に……始め！」
「我流・疾槍蓮華！」
「我流・虎連爪！」

金属同士の激突音が、これから始まる戦いの前奏曲を奏で始めた。
目にも止まらぬ突きと斬撃の応酬、確かに奴ら、一週間で相当鍛えたみたいだな。
でも厄介なのが一つ。
お互いに高め合ったせいで、お互いの技を知り尽くしている。
この戦い、ろくな終わり方をしない気がするよ。

「潰れろ馬鹿が！食らえ、我流・空落とし！」
「甘いわ！我流・星撃ち！」

上空からの降下斬撃とそれを打ち返すフルスイングが、またも派手な音を立ててぶつかる。
着地してすぐさま突撃、その場に踏み止まっての大激突。

「はぁあああああ！」
「オラオラオラオラ！」

激しくぶつかり、汗が飛び散り、とても晴れやかな笑顔で二人は戦っている。
まるで最高のライバルに出会えたかのような、そんな嬉しそうな闘志。
……暑苦しい戦いだ。
いやもう全然爽やかじゃないよ？

熱い戦いって俺も好きだけどさ、これはなんか気持ち悪いわ。
まぁ会場は歓声でいっぱいだ、何せ普通の人にはあの速さは驚愕だろうし。
はぁ、長くなりそう。

「我流・破魔滅殺剣！」
「その技見切った！奥義！」

ホカゾノの連撃を槍で捌きつつ、キヨシの槍が風を帯びた。

「旋風槍・突風！」

超高速の突きが風の塊を作り出し、ホカゾノを正面から吹き飛ばした、体育館壊すなよ？

「続けて行くぜ！奥義！旋風槍・乱れ風！」

より高速で連弾をたたき込む、これは中々凄い技だな。
すると突くのを止めたキヨシが、くるくると槍を回し始めた。
風は更に大きく強く、あれはまるで…。

「奥義！旋風槍・大竜巻！」

強烈な竜巻を帯びた一撃が、よろめくホカゾノに向けて解き放たれた。
体育館が揺れる程の衝撃、全てを吹き飛ばす風が館内に爆散する。
やるな、あれは相当の大技だ、良く完成させた。
だけどアイツの堅さと重量には、風じゃちと足りなかったか。

「もはやファンタジーの世界を見ているかのような一撃が決まった

ー！果たしてホカゾノ選手は無事なのか！？」
「やっぱまだ完成度が低かったか、俺も精進が足りないな。」
「はっはっは！甘いぜキヨっちゃん、ウチの豪腕を舐めすぎだぞっと！」

片膝を付きつつも、ホカゾノが刀を構えて立ち上がる。
かなりの傷を負ってはいるが、いずれも致命的なダメージではない、まったく規格外な腕力してやがるぜ。

「まさか剣圧だけであの竜巻を相殺したってか？」
「おうよ！伊達にマウンテンゴリラとか言われてないぜ！」
「なんとホカゾノ選手は無事だー！大自然の力を取り入れた技を受けてなお健在！なんという豪腕、なんという堅牢さ！これがフラトレス最強の腕力を持つ武神の実力なのか！？」
「いやいやあんま褒めるなって、調子乗っちゃうぞ？」
「だが流石に無傷じゃ済まなかったみたいだな。それにその刀、もうボロボロなんだろ？」
「やっぱバレるか。あぁ、次にあれをやったら確実に折れるだろうなぁ。やれやれ、ウチの豪腕に耐えうる物質がこの世界にないのが悔やまれる。」
「この化け物め、巨人の霊でも憑依合体してんのかテメェは。」
「はっはっは、巨人なんて甘い甘い！ウチに宿るは最強の雷神トールその人よ！」
「チッ、化け物風情が神を気取るなよ！」
「キヨシこそ隠れてあんな技まで修得しやがって、竜巻出すような奴に化け物と言われたくないわ！それになキヨシ……ウチだってただお前と鍛えてただけじゃないんだぜ？」
「ほぅ、ならその技とやら、正面から打ち破るまでだ！」
「お前の細腕でウチの豪腕を受け切れるかな？」

ニヤリと笑い、飛び出す。
床を蹴った衝撃で体育館が揺れ、観客は更にヒートアップしていく。
激しい打ち合い。
迸る闘気は苛烈な攻撃に乗り、踏み込む速度は連撃に更なる加速を生む。
まさに死闘と呼べる戦い、俺も今ではその一部始終を食い入るように見ている。
余計な感情は捨て去り、ただ身体は戦いのために最適化されていく。
アドレナリンが痛みや疲労を忘れさせ、もっと強く、なお速く、限界突破の更に上、最高の動きを可能にする。
暫く全力が出せなかっただろう、さぁお前ら、力を解放しろ！

「唸れ！奥義！心臓破（ゲイボルグ）りの魔槍！」
「砕けろ！奥義！豪腕（フラガラック）にて生じる矛盾！」

一撃必殺の刺突、それより速く到達する光速剣。
僅かな差で、キヨシに奥義が直撃した。
だが奥義を食らってもなお、キヨシの槍はホカゾノへと届く。
しかし強烈な一撃ではなく、追撃をさせない牽制にしかならない攻撃。
吹き飛ばされたキヨシは着地するも、槍を支えに膝を折る。
ホカゾノは胸を押さえ、己が刀を見た。
二度に渡る物理的限界攻撃は、金属製の刀を真ん中から折ってしまっている。
ホカゾノは苦笑すると、折れた刀を床に置き、すぐに拳を構える、まだ終わりじゃない。
よろよろとキヨシは立ち上がり、しかし衰えぬ目付きで槍を構え直す。

「ウチの膝を折った借りは返したぜ！」

「上等じゃねぇか、このままじゃ済まさないぜ。」
「ほら来いよ、格の違いってやつを見せてやる。」
「吹くじゃねぇか三下ぁ！武器が折れたことを後悔しやがれ！」
「ウチは拳の方が戦いやすいんだ、病室の予約しろよ、待っててやる。」
「その言葉、そっくりお返しするぜ！塵になれバーカ！」
「うっせぇアーホアーホ！」
「うらぁ！ぶっ飛びやがれー！」
「槍ごと叩き折ってやるわー！」

お互い奥義を食らったとは思えない覇気で、再びの突撃。
てかせっかくカッコいい展開だったのに、挑発が稚拙すぎるだろ。
しかしリーチの違いは大きい。
槍と刀でさえ三倍の力量差がなければ戦えないと言われているが、
あれでは本来戦いにすらならない。
だがあの馬鹿は、圧倒的な腕力で相手の攻撃回数を減らし、大きく
外側に攻撃を弾くことで間合いの中へと踏み込んでいた。
今も素早いステップとフェイントで何とか食い付いている。
するとキヨシが放った斬り払いを、ホカゾノが拳で上へといなした。

「はぁぁぁ！豪腕鉄砕・鋼牙！」
「なんのこれしき！」

渾身の正拳突きに対し、キヨシは体を浮かせると足裏を両足とも拳
に突き出した。
拳はキヨシの足裏に直撃するが、その衝撃を膝をクッションとして
減退させたのだ。
それでも打ち消せない威力はキヨシの体を吹き飛ばし、舞台の縁に
叩き込む。

「ちっくしょー、ムカつくわ！」
「ふふん、拳で槍を打ち破れるって教えてやるよ！」
「言ってろボケ！すぐに貫いてやる。」
「ぷぷっ、そう言いつつまだウチを倒せてないじゃん！」
「……ブチッ！」

あぁ、あれはムカつくわ。
俺が出たらダメかなぁ、すっごいムカついたわ。
あの人を本能的にイラつかせる顔、意外と手強い実力とタフさ。
更には猛烈に稚拙な挑発、あれが意外なほど殺意が湧く。
でもこの状況、ちょっとヤバいぞキヨシ。

「テメェは欠片も残さねえ、跡形もなく消え去れゴミがぁ！」
「ヘイヘイカマン！」
「我流秘奥義・雷庭！」

キヨシ……あの技使うの！？
マジ止めさせないと、確実に体育館使えなくなる。
昔書いてたファンタジー小説の技。
魔力を雷に変化させ、空中から地上へと超高速連撃する。
話の中では礼拝堂がぐちゃぐちゃになったクロニクルの奥義。
俺は刀を掴み、飛び出す姿勢になる。
小峰のジジイも刀に手をかけている、流石にあの闘気なら感付くか。
するとホカゾノが上のキヨシを見ながら、こちらを制止した。

「大丈夫だ兄さん、止めなくてもウチは死なない！受けきってみせる！」
「止めろボケェ！誰もテメェの心配なんぞしとらんわー！大事なのは体育館の方だー！」
「え……？」

ホカゾノが驚愕に目を見開いて、こちらを見た。
その瞳は、とっても悲しそうな小動物みたいで、物凄く腹が立ちました。
小峰のジジイもムカついたらしく、目を吊り上げて刀を鞘に戻しました。
俺は躊躇いなく叫んだ。

「その馬鹿殺せキヨシー！」
「ワシらのためにもやってくれー！」
「おっしゃー、死ねやホカゾノ！雷庭！」
「クゥゥン！」

子犬に似てもにつかない鳴き声が、紫の雷によって打ち消されていく。
チッ、地球のためにも早々にくたばれボケ。

「私は夢を見ているのでしょうか！？まるでファンタジーの世界に迷い込んだような技が放たれました！あれで生き残れる人間がいるのでしょうか！」

体育館の床は砕け、何ヶ所も焦げ目がついている。
着地したキヨシは相当の体力を使ったのか、肩で息をしながらホカゾノを見た。
破壊の中心でボロボロとなったホカゾノが、大の字うつ伏せで倒れている。

「おぉっと、ホカゾノ選手ダウン！遂に決着か！？」
「まだじゃ、奴はまだ生きている。」
「いや死んだらまずいだろジジイ。」

「……ふっふっふ、ウチはまだ戦えるぜー！」
ゆっくりとホカゾノが体を起こす、なんてタフさだあいつ。
だがこちらも相当に効いたらしい、足元がふらついている。
あと一撃、それで勝負が決まるだろう。

「甘いぜキヨシ、痛みで技が鈍ったぞ？」
「は？お前何言って……。」

直後、キヨシの槍が真っ二つに折れた。
カランカランと音を立てて、赤い槍が床に落ちる。

「突きの一回一回、同じ場所を殴り続けた。」
「チッ、気付かなかった。」
「まぁお陰で余計にダメージを負ったけどな。」
「ってことは。」

キヨシは槍を置き、拳を構える。

「やっぱ男なら！」
「拳を握って殴り合いだろ！」

その言葉に会場が沸く。
熱い戦いの最後を飾る、一発の拳。
それが今、放たれようとしている。
刹那の静寂。
無音で放たれた二つの拳は、中央で激突した。
衝撃で拳が痛む。
だが闘志は折れない。
弾かれ、滑りながら左右へと離れた。

勝利への咆哮が木霊する。

「ウオォォォ！」

「ウラァァァァァ！」

たったの一歩で辿り着く最高速。

技も何もない。

ただ拳が答えを決める。

同時の踏み込み……。

終焉が鳴った。

吹き飛んだのはキヨシ。

背中を思い切り舞台へとぶつけ、床に落ちる。

「勝者、ホカゾノ！」

「よっしゃー！！」

鼓膜が破けるかと思うくらいの歓声が、体育館を満たした。

爆発のように拍手が響き、両者を讃える。

最高の漢の闘いだったと。

ホカゾノも手を振り返すが、疲れ果てたのか倒れこんだ。

キヨシも一緒に急ぎ担架で医務室へと運ばれていく。

「武神同士の戦いは遂に幕を閉じました！人間とは思えぬほど激しい戦いを制したのは、ホカゾノ選手！両者とも武器は折れ、奥義を受け、なお倒れぬその闘志！同じ男として興奮で奮えてしまいます！」

俺も十分に堪能させてもらった、中々やるじゃないか二人とも、良

く闘った。
またこの試合で気合いを入れられただろう、他の選手も知らず知らずの内に拳を握り締めている。
シカマも緋結華も自分の武器を掴み、素直に感動しているようだ。
こりゃあ単なる市内武道大会じゃ終わらないだろうな。
俺は審判を勤めるジジイを見る。
向こうもこちらを見て、口元に笑みを浮かべた。
あぁそうだよな。
俺もあんたも、間違いなく戦闘狂だ。
だからこそ強い奴を育てようとする、自分を倒しうる逸材にするために。
なぁ小峰宗十郎？
あんたも闘いたいよな？
アイツらの戦いを見て、あの熱い勝負の決着を間近で感じて、疼かないはずがないんだ。
俺もあんたもさっきから刀の柄から手が離れないでいる。
さぁ、俺も本気を出す時が来たみたいだな。
喜べ小峰宗十郎。
俺は久しぶりにやる気らしいぞ！

1月22日　Day. 13－5

幾つかの試合が終わり、大会はいよいよ後半戦に入っていた。
雷庭によって破壊された床は、大工さんの素晴らしい手腕により見事元通りとなった、凄い技術だな、錬金術かあれは。
俺は一人席に座りながら、左右の空席を見る。
二人はまだ戻らない。
だけど俺は心配すらしていなかった、寧ろいつもの事だ。
アイツらがじっとしていられないのは。

「たっだいま～兄さん、たこ焼き食べる？」
「いゃあ～遂に俺にも春？そと出たらめっちゃ女の子に囲まれて幸せだったわ～。どの女から孕ませようかずっと考えてたぜ！」
「貴様らもういっぺん死にやがれー！」

そう、こいつらは全然なんともない、普通にさっきの試合の傷など何処にもない。
こいつらの次の試合が終わった頃にはけろっとした顔で帰ってきて、腹が減ったからと外の屋台に買い物へ行ってたのだ。

「蘇生には沢山のカロリーが必要なのさ～。」

そう言ってたこ焼きやらを貪る二人、うん化け物。
戦闘中は流石に回復に体力を向ける余裕はないらしい、何のことやらって感じだよ。
さ、次の試合を楽しむか。

「続きまして並木町の御奈坂選手対、椿町のシカマ選手の試合を開始します。両者中央へ！」
「お、中々面白い組み合わせじゃね？」
「兄さんには負けたけど、これは良い勝負しそうじゃない？」
確かにあの攻撃方法は遠距離攻撃に対して相性が良いだろう、あの回転速度に精度があれば尚更だ。
さて、シカマがどうやってあの鉄壁の攻守を突破するのか見物だな。
シカマは予備の弓と矢を、緋結華は巨大なハルバートをそれぞれ構える。

「マスターには負けましたけど、今度こそ黒星は刻みません！」
「その意気だ、オレもこの試合で学ばせてやるよ。」
「はい！よろしくお願いします！」
「ではいざ尋常に……始め！」

シカマは己の最適間合いを取るため、即座に強烈なバックステップを踏む。

「逃がしません！私の間合いで闘ってもらいますよ！」

それに勝るとも劣らない速度で、緋結華も前へと跳んだ。
始まりと同じ距離を保ったまま、緋結華の斬撃が放たれる。
しかし見事な円運動だ、あの筋力でハルバートを扱うとはもはや天性の才能としか言えんな。
ただまだ小さな円運動は苦手らしいな、どうしても攻撃が大振りになる、まぁそのための舞いなんだろうが。
シカマはやりにくそうに矢をつがえると、ハルバートを躱した直後に至近距離で矢を放つ。

しかし緋結華は少しだけ体を反らすと、その矢を躱した体勢のまま強烈な突きを出してきた。
シカマは瞬時に後ろへ体重を逃がし威力を殺すも、体は大きく吹き飛ばされる。
緋結華は体勢を立て直すために、一瞬追撃を止めた。

「ダメだよそこで止めちゃ、せっかく間合いを維持してただろ？」

攻め急いだな緋結華、あそこで反撃するべきじゃなかったぞ。
シカマの言う通り、反撃するなら吹き飛ばすより上に飛ばすべきだった。
自ら詰めた間合いを自分で広げてどうする、相手と間合いを離すのは攻められている時だ。
まぁシカマもそれを狙って体勢を崩す場所に矢を射ったんだろうが、見事に成功したな。

「さぁ、オレも反撃させてもらうぜ！」
「くっ、マズいッス。」

シカマの矢が次々と緋結華目がけて飛んでいく、緋結華は後ろに下がりつつ迎撃していくしかない。
どんどん間合いが離れていく、緋結華は攻撃すら出来ない距離だ。
更にシカマは体育館の壁や手すりを足場に、高速で跳び始めた。
縦横無尽に跳び回りながら、目にも止まらぬ速さで矢を射っていく。

しかも少しだけタイミングをずらしながら、体勢を崩しやすい位置や、武器で弾いた直後など、戦略的な攻め方。
真正面から倒すには難しい戦い、恐らく緋結華は未だに経験したことのないタイプの相手だろう。
さぁ緋結華、ちゃんと攻略法を戦いながら考えられるかな？

「どうかな御奈坂さん、オレを倒す算段はついたか？」
「とりあえず一つだけ。」
「上出来だ、それが正解だと良いな。」
「てか少しは攻撃させてくれませんか？ずっと離れてるとか卑怯じゃないですか？」
「そう言わないでほしいね、一応オレも戦いづらいんだ。」
「それだけ強いのにまだ強くなりますか？」
「なに、元来弓兵とは広大なフィールドの中で如何にして標的に察知されず、一矢一殺の戦いをを心掛ける者だ。そもそも室内ってだけで戦いに向かないし、一撃で戦闘不能に出来ない矢では手数に制限がある以上、こういった一騎討ちには適さないってわけ。」
「ならやるべきは一つですね。」

緋結華の目付きが急に鋭くなり、少しずつ矢を捌く精度が増していく。
やがて完全に追い付くと、そのまま回転を始めた。

「小峰流斧槍術・揚羽の舞い！」

攻守一体の回転攻撃、あれを物体として長い矢で抜けるのはそう容易いことではない、例えるならば高速で回転するプロペラの隙間を通すに等しい。
だけどあの技、今のシカマなら抜ける隙があるんだが、恐らくアイツは気付いてないだろうな。
シカマは二・三本矢を射って弾かれるのを確認すると、予想の通り緋結華の足元に弓を床と水平にして矢を放った。
そう、如何に高速でプロペラでも、壁にぶつからないように僅かな隙間は作られる。
今回も同じ、緋結華の技も床すれすれには僅かな隙間があるんだ。

ただそれは小さすぎる隙間、通常攻められたりしない。
その慢心に、シカマの矢は容赦なく飛んでいく。
矢じりを潰しているから、矢は床に刺さらず床を滑って行く、だからこそ出来る攻撃方法。
壁を使った反射は出来ない、これは反射ではなく方向修正。
間髪入れずに放たれた矢は、回るために軽やかに動く軸足を見事に払った。

「あれ……？」

急にバランスを失い、ハルバートを回したまま緋結華が傾いだ。
重い武器を円運動で扱う以上、急には止まれない。
床に打ち付けられたハルバートはあらぬ方向へと滑っていき、緋結華は思い切り腰から倒れた。

「痛っ！」

漸く何が起きたのか理解し周りを見渡すと、矢をつがえた格好のシカマが傍に立って見下ろしていた。
小峰老人はやれやれといった風に首を振ると、シカマを手で示して叫ぶ。

「勝者、シカマ選手！」

シカマは遠くに転がっていたハルバートを取りにいき、緋結華に返しながら言う。

「ホカゾノとの戦いを見て弾切れを狙ったんだろうけど、オレはまさに揚羽の舞いを出す瞬間を待ってたんだよ。ヒロイですら正面突破しなかったから負けないと思ったんだろ？」

「はい、お陰でこの技の弱点にも気付けました、ありがとうございます。」
「あとは間合いの取り方をものにできれば大丈夫だ、あの無茶な体勢からの攻撃も凄いと思う、頑張れよ。」
「ありがとうございました！」

シカマも緋結華に可能性を感じたみたいだな、やはり逃した魚は大きいか。
歓声の中それぞれの席へと戻っていく、さて次はいよいよ……。

「さぁ次の試合はまたも同じ町内での戦いだー！木野塚町のホカゾノ選手対、同じく木野塚町のカズタカ選手！」
「よし兄さん、勝負だ！」
「ふん、初めて本気を出しても壊れない玩具が相手か、心が踊るな。」
「なにこの壊されるフラグ！？」
「通常同じ町同士が試合の場合白星の少ない方が棄権しますが、このチームは真剣で仲間と戦うようですね。」
「まぁそうじゃろうな、あやつらのレベルになると本気なんてそうそう出せないんじゃ、受け止められる相手がいないからの。」
「もはや人間の話をしているとは思えない内容となってきましたが、今はただ熱い戦いに集中したいと思います！では両者中央へ！」

俺たち二人は中央のラインへ歩いていき、お互いを正面に向かい合う。
互いに得物は刀。
ホカゾノは剛の剣、俺は技の剣。
事ここに到り、言葉は不要。
アイツのかつてないほど真剣な目を見れば判る、これこそ本来の目的だったと。

ここ一週間の鍛練の成果、存分にぶつけてこい。

「いざ尋常に……始め！」

開始直後、俺は身体を左へとずらす。
僅かに遅れて到達する、岩をも砕く剛剣。
更に跳ね上がる刃、顎を打ち抜く軌道。
半身だけ、最小限の動きで躱していく。――まだ足りない。
俺は躱す動きでホカゾノの足を払うと、技のために腰を落とす。

「我流・咆戦禍！」

宙に浮いて無防備な腹に、捻りを加えた掌打を叩き込む。
強烈なインパクト。
ホカゾノは勢いよく体育館の壁まで飛んでいき、壁に半分ほど埋没する。
流石に腹筋を瞬時に固められたが、あれは内臓まで届く衝撃、相当効いただろ。
後頭部から血を流しながら、ホカゾノが壁から抜け出してくる。
首を鳴らし、衰えぬ闘志でこちらを睨む。――そうだ、もっとだ。

「はぁっ！」

気合いの咆哮、全速力で突進してくる。
身構えた俺の手前で急停止すると、勢いをのせた斬撃が真横から振られた。
俺は切っ先に狙いを定め、肘と膝で挟みこむ。
流石にこいつの豪腕を中央で止めるのは難しい、ならば力が伝わりにくい切っ先を狙うだけだ。
そしてまだ終わらないな。

ホカゾノも止められたことに驚きもせず、次いで刀から手を離し回し蹴りを打ってくる。
いい動きだ、普通なら躱せない。
俺は受けた刀を支えたまま、角度を調節して腰を捻った。
回し蹴りの体勢に入っているホカゾノの顔面目がけ、刀を軽く撃ちだす。
咄嗟に身体を反らし回避するが、回し蹴りは僅かに胴から狙いが逸れた、これなら躱せる。
俺はしゃがみ、頭上を健脚が通り抜けていく。

「チッ！」

俺はあえて追撃をせず、ホカゾノは飛んでいった刀を取りに後ろへ下がった。
一瞬の静寂。

「我流・地奔り！」

勢いよく床に打ち付けられた斬撃が、衝撃破を伴って俺へと奔ってくる。
爆発は爆発で消すものだよな。
拳を握り、衝撃破がこちらに届く直前で床を殴った。
床が破砕し、衝撃破が相殺される。
木片が煙のように舞い、目の前が見えなくなった。
甘いな、もっと工夫しないと俺には通用しないぜ？
また最小限の動きで身体をずらす。
直後上から落ちてきたホカゾノが、元いた場所を斬りつけていた。
大丈夫だ、お前はタイミングをしくじったわけじゃない、余計な時間も刹那となかったはずだ。
だがどんなに速い弾丸も、飛んでくる場所が判っていれば躱せるだ

ろ。
俺は無表情のまま、着地で動けないホカゾノの顔面を上へと殴り飛ばした。
「グハッ！」
「我流・至天掌！」
浮いたホカゾノを更に上へと飛ばす。
追撃は止めない。
「我流・流星脚！」
ホカゾノより速く上に跳ぶと、回転をかけた踵落としを叩き込む。
派手な音を立てて、床に激突する。
俺が隣に降りると、呻きながら立ち上がろうとするホカゾノがこちらを見上げてきた。
その目には、先程までの闘志はない。
僅かに混ざった絶望が、その瞳を濁らせている。
「圧倒的！あの凄まじい戦いを観せてくれたホカゾノ選手が、まるで赤子のように遊ばれています！あれが鬼神の真の実力なのかー！？」
「まさか、あれが本気なはずがないじゃろ。」
「お兄さん、まだ刀すら抜いてないし。」
「私、あんな人と戦ってたんだ……。」
「久しぶりかもな、ヒロイがあんな真剣なのは。」
「どうしたホカゾノ、そんなもんか？」
「くっ……。」
「テメェの真剣はそんなもんかって訊いてんだ？」
「まだ……まだだ！」

「その調子だ、せめて俺に刀を抜かせてみろ。」
「上…等！」
ホカゾノが気合いを込めた咆哮で立ち上がり、渾身の一刀を放ってくる。
———これこそ戦いだ！
即座にバックステップ、しかし剣圧で吹き飛ばされた。
床を滑って止まる。
目の前に立つホカゾノは、先程までとは別人のように闘志に満ちている。
「今度こそ倒すぞ兄さん！」
「ならばその幻想を粉々に打ち砕いてやろう！」
「言ってろ鬼神！」
「現実を見せてやる武神！」
同時に飛び出す。
ここからが本当の戦いだ。

1月22日　Day. 13－6

いつだって、絶対的強者に数値的には勝てない弱者の刃が届くのは、ほんの少し、気合いが勝った時だ。
どんな勇者だって、決して最強じゃない。
大抵は魔王と呼ばれる奴が、最強の力を持っている。
そう考えるならば、俺は現時点で魔王って事になる、何しろ負ける要素がない。
だが、きっとファンタジーで散っていった魔王たちはこう感じたはずだ。

あぁ、きっとこういう奴が勇者なんだろうと。

俺は頬に打ち込まれた拳を感じながら、ふとそんなことを考えていた。
遡るは5分前、こいつが気合いと共に起き上がった頃になる。

「我流・龍葬撃！」

俺の拳打がホカゾノの顎を打ち抜き、脳を揺さぶる。
普通なら脳震盪を起こして気絶する、だがこいつは倒れない。

「オオオオオオオォ！」
「良いね、最高だよ。お前は立派にフラトレスの仲間だ。」
「兄さんしつこいぞ！早く倒れろー！」
「あっはっは、遅いぞ中年。」

「そこは少年で良かったやんかー！」
「確かにあたしたち中年だね。」
「つかさっきまでの格好よさは何処へ？」
「さ、そろそろ刀を抜かせてくれよ。」
「勝手に抜けばええやん！」
「あ、良いの？それじゃちゃんと避けてくれよ？」
「え？」

恐らく観客には俺が何をしたのか見えなかっただろう。
ホカゾノですら俺が刀を抜き始めた動作と戻し終えた動作しか見えてない。
人の目が光を見るよりも速い、光さえ越えた速度の抜刀術。

「我流・閃光・終の太刀。」

ホカゾノは何もできず、静かに倒れた。
なんだ、呆気ないな。
やはり刀を抜くべきではなかった、楽しい時間まで一緒に斬ってしまう。
でもま、長引かせる必要もないか、もう十分に実力も把握した。
終わらせましょう、観客も静かになってきたし。
振り返り、倒れたホカゾノを見下ろす。
息も絶え絶えに、仰向けで寝転がる。

「よく頑張ったじゃないかホカゾノ、もうゆっくり休みな。」

俺は最後の一刀を、気絶させる気持ちで振り下ろした。

「舐めんなよ兄さん！せめて一発入れるぞ。」

刀が、受けとめられた。
しかも片手で、しっかりと。

「ウチを倒すなら殺すつもりでやりな！」

勢いよく引っ張られる。
完全に予想外だった俺は動けず、そのまま強烈なヘッドバットを額に食らった。
大きくよろめき、完全な隙を見せてしまう。

「たまには殴らせろー！」

重い、俺が唯一勝てない豪腕、その拳が俺の頬を打ち抜いた。
まるでダンプカーに衝突されたかのような衝撃、俺は為す術もなくブッ飛ばされる。
床を二・三度跳ねて、舞台にぶつかることで停止した。

「おっしゃーあぁぁあ！」
「やりました！一方的な展開から、なんと気迫で鬼神に一矢報いた！客席からも大きな声援が贈られています！その姿はまるで魔王に立ち向かう勇者、このまま勝つことはできるのか！？」
「まぁ俺はそこらの魔王と違うけどな。」
「まぁ兄さんだし、ウチも流石にそろそろ死ぬかも。」
「棄権するってか？」
「うん、割と出し切った感があるし満足かなって。正直まだまだ勝てる気がしない、ならせめて他の試合のために体力残すべきかなってね。」
「意外に先を見て物を言うじゃないか、上出来だホカゾノ。」
「つーわけで審判、ウチは棄権しますわ。」
「確かにその状態では戦えんじゃろ、正しい選択じゃな。では――

―ホカゾノ選手棄権により、勝者、カズタカ！」
「やはりホカゾノ選手限界でした、勝者はヒロイカズタカ選手、そして未だに無敗だー！一体誰が彼を止められるのか！」
「俺だな。」
「いやオレだろ。」
「あんな化け物止められるのはワシしかおらんよ。」

俺と戦ってない残りの奴らが、ニヤニヤとこちらを見ている。
やはり来て良かったか、こんなにもワクワクさせてくれるとはね。

「他の選手たちも白熱してきましたぁ！さぁいよいよこの大会も大詰め、残り少ない試合はどれも強豪揃いです、一試合たりとも見逃せない試合となりそうだー！」
「確かに、俺もそろそろ連戦が始まるか。」
「貴様みたいなのには連戦なぞ特に意味もないじゃろ？暫くそこから動かなくて良いぞ。」
「はぁ、一応喫煙者なんだから労れジジイ。」
「ふはは、知らぬわ！」
「一度会場を修理した後、そのままカズタカ選手対キヨシ選手の試合を行います、皆さま少々お待ち下さい。」

俺たちが退くと、さっきの大工さんたちがぞろぞろと現れ、凹んだ壁や砕けた床を修理（何度見ても錬金術）していく。
もう手品を織り交ぜた大工さんなのだろう、そう割り切らないとあまりに作業が速すぎる。
あっという間もなく、なんか壊した事実から改竄されたように元通りになった、俺も錬金術習いに行こうかな。

「お兄さんは戦闘以外頭使えないから無理無理。」
「ナチュラルに思考読むの止めてくれる？」

「絶対錬金術って英語使うから俺たちには無理だし。」
「あぁそりゃ無理だ、英語は昔からラ〇ホーの呪文にしか聞こえない。」
「アバタケタブラー！」
「永眠するわボケ！」
「寝～むれ～、寝～むれ～。」
「狂い始めるにはまだ早い時間ですよ～？」
「そうだね！ボクの本領発揮は夜中の１時から！」
「迷惑な時間帯！？」
「そこでボクは歌うのさ！オ～レはキヨシ～、た～だの人～って。」

「嘘は止めなさい、人は竜巻やら雷やら出せません！」
「やだな出せますよ、魔力って知らないの？」
「そろそろ夢の世界から戻れカス！」
「修理が終わりましたので再開致します！それでは両者中央へ。」
「お前はどんな戦いがしたいんだ？」
「俺もお兄さんも技の精度や速さで戦うタイプだし、出来ればお互い全力で技をぶつけてみたいね。」
「それは面白いな、同系統の技同士をぶつけ合うのか。」
「派手じゃない？」
「少なくとも面白そうだ、お前の成長も判りやすい。幸いにも多少壊しても大丈夫そうだしな。」
「んじゃそんな感じで手合わせ願うよ、俺も一発くらいは入れてやるからな！」
「そうでなければつまらないな、存分に技を振るえ、全て打ち負かせてやろう。」
俺たちはそれぞれ槍と刀を構え、中央で向き合う。
「いざ尋常に……始め！」

キヨシがすぐに後ろへ跳ぶ、俺もそれに合わせ後ろへ跳んだ。
間合いは大きく離れ、ジジイも感じ取ったのか大きく距離を取った。

「ではまずはこいつからだ！我流奥義！旋風槍・乱れ風！」
「俺もいくぜ！我流・鳳凰翔裂破！」

高速で打ち込まれる風撃に、俺は己の斬撃破を飛ばしていく。
始めから奥義とは勇ましい、さて、俺の速さについてこれるかな？
俺は更に速く、より苛烈に攻撃を飛ばしていく。
キヨシもどんどん速度を上げて、段々と腕の動きが見えなくなってきた。
中央は爆風の嵐、だが少しずつ爆発の位置がキヨシ側へとズレていく。

「前回の戦いはまさに一瞬の判断や速度が勝敗を分ける堅実なものでしたが、今回は正面からの真っ向勝負だー！派手です、ファンタジーです、人同士の戦いとは到底思えません！」
「言われてるぞキヨシ。」
「いやいやお兄さんでしょ？」
「いや両方じゃろ？」
「黙ってろジジイ。」
「何で貴様はワシにばかり酷いんじゃ！」
「老人を虐めるなんて最低だよお兄さん！」
「うっせえぞ馬鹿ども！俺は平等に酷いんだ！」
「自慢げに言うことか貴様！」
「ほらほらんなことよりキヨシ、動きが遅れてるぞ！喋ってる余裕なんかねぇだろ！」
「判ってるっつの、クソッ！」

「このまま押し込むぜぇ！我流・狼牙無限刃！」
今までバラバラに飛ばしていた斬撃を、今度は一度に無数、ほぼ同時に飛ばす。
その様はまるで狼が口を開けて襲い掛かるが如く、キヨシに食らい付いた。
全身を斬られたような痛みに、キヨシが片膝をつく。
「決まったー！壮絶な技の応酬に決着がつきました！キヨシ選手これはキツいか！？」
「お兄さんの攻撃なんて屁でもないぜ！」
「ほぅ、ではその片膝は疲れてしまったと判断しよう。ではもっと激しく、凄絶に攻めてみようか。」
「キヨシ～、意地張るなよ～。」
「黙っとけホカゾノ！俺は逆境の方が燃えるんだよ！」
「おや？全然効いてないのでは逆境でもなんでもあるまい？」
「クソッタレ、その強がりもそこまでだぜ！我流奥義！旋風槍・大竜巻ー！」
キヨシは超高速で槍を回転させ、巨大な竜巻を作り出す。
「おぉ、その技は気になっていたんだ。打ち破るのは容易いが、それっはつまらなかろう？格の違いを見せ付けるなら、もう少し面白く抜けなければな。」
「できるもんならやってみやがれ！はぁぁぁぁあ！」
高く跳んだキヨシは、気合いと共に竜巻を撃ちだした。
強烈な気流の渦が、大自然の力を見せ付けるように迫ってくる。
だが、竜巻ならば穴はある、その中心に。
俺は刀を鞘に納めると、迷うことなく竜巻へ飛び込んだ。

蛇のように渦巻くそれが、ほんの一瞬真っ直ぐになった瞬間、キヨシへ向かって最高速で突っ込む。
竜巻を越えた向こう側で、キヨシが驚愕し、すぐさま竜巻を閉じようとした。
だが遅い。
俺は口元に笑みを浮かべて、兼定に手を伸ばす。

「我流・空中楼閣！」

足場もなく身動きが取れないキヨシへ、高速の四連撃を叩き込んだ。
俺はダメージを受けて仰け反るキヨシを掴むと、急激に収束する竜巻へと放り込む。

「な！？」
「己の技に呑み込まれろ！」

暴風の爆発。
館内に台風が通り過ぎたような風が巻き起こり、キヨシが床に叩きつけられる。

「またもカズタカ選手が勝利！あの竜巻の中へと恐れず飛び込み、見事あの大技を突破しましたー！キヨシ選手無事なのかー！？」
「無事に決まってんだろー！」
「おぉーっと！キヨシ選手無事、何というタフガイだー！小柄なのが功を相したかー？」
「おいテメェ実況！小柄なのがとか余計だろ！」
「ぷぷっ、良かったね～キヨっちゃん、チビだから助かったじゃん。」
「お前マジ覚えとけよホカゾノ！後で拷問だかんな！」

「あれ〜？ウチに負けた槍使いはは何処の誰さんだったかなぁ〜？」
「はぁ〜、お前ら一応試合中だからな？」
「そうだった、うっかりだぜ！」
「意外に余裕だったりするのかお前。」
「まさか、今にも死にそうだぜ！」
「なら早めに引導を渡してやるか。」
「ヤバいホカゾノ！俺は今選択肢をミスったのか！？」
「うん、間違いなく地獄の直行便を選んだね、まぁどのみちそこへ辿り着くようになってるけど。」
「いいさ！どうせ人間はいつでも死と隣あわせだからな、他の奴とさして変わりはない！」
「自ら死に飛び込んでいく奴はお前くらいなものだがなぁ！」
「どちらにせよこれでラストだ、気張るぜ俺！」

俺は兼定を構え、キヨシは槍を下段に構えた。
お互いの奥義が勝敗を決める。
技の精度と速さ、それを極めようとした者同士の戦い。
必ず当たると言われる超高速の刺突か、何者も逃げられぬと言われた斬撃か。
強く床を蹴り、跳びだす。

―――遂にその決着を。

「奥義！心臓破りの魔槍（ゲイボルグ）！」
「奥義！逃れる術なき鳥籠（燕返し）！」

刹那の交差。
その一瞬、俺さえも捉えるのがやっとの速度で、必殺の槍が心臓へと迫る。

俺は逃げ道を奪う三連撃を放ち、辛うじて槍を逸らす。
互いに有名過ぎる大技、その特異性や、どういった動きをするのか知り尽くしている。
だが、俺の鳥籠はより強固に作ってあるぞ。
キヨシは予想通り、三撃目を放たれた時点で回避に移ろうとしていた。
でもそんな中途半端な逃げ方じゃ、俺の鳥籠から出られないさ。
キヨシが槍を引き戻そうとする僅かな隙。
俺の兼定が展開するもう一つの鳥籠が、容赦なくその扉を閉じた。
二度目の燕返し。
刹那の間に放たれたもう三連撃に、キヨシの体は斬り裂かれる。
膝をつき、前のめりに倒れこむ。
決着はついた。

「勝者、カズタカ！」

歓声が響く。
兼定を鞘に納める、キヨシを担ぎあげる。
朦朧とした意識で、キヨシが問う。

「いつの間に……あんな奥義を…？」
「毎日の仕事は忙しいが、強くなったのはなにもお前らだけじゃないってことだ。」
「ははっ、負けるわけだよ。まったく……お兄さんはまだ強くなんのか。」
「フラトレスのマスターって看板は存外に重たくてな、生半可な強さじゃ皆を守れないだろ。」
「この勇者…め……。」
キヨシは気絶し、体重を預けてくる。

残るは二人。
こいつらに勝った以上、負けられないなこれは。

1月22日　Day. 13－7

「ぷぷっ、マジざまぁ！一発も入れられないでやんの、やっぱ口だけの男は違うね！」
「お兄さんと最後まで戦えず棄権した腑抜け野郎には言われたかねぇなあ！ほらほらチキンちゃん、医務室行って女医さんに癒してもらえよ～！」
「あんなむさいオッサンが居たら寧ろ悪化するわ！テメェだってさっき運ばれたんだから知ってんだろ！」
「ホントだぜ、我らが愛しの美人女医はいずこへ行ってしまわれたのか！」
「仲が良いのか悪いのかわからんな貴様ら、まぁ仲良しなんだろうが。それよりホカゾノ、出番だぞ。」
「遂にあのじい様か、腕が鳴るぜ！」
「あいつ一切容赦とかしないから覚悟しとけ。何でも戦いは神聖だから手加減とかは無礼に当たるんだと。」
「燃えるじゃんか！老兵の時代は終わったんだとその身に刻み込んでやる！」
「老いて短い人生に幕引いてやれホカゾノ！」
「もう知らないからな。」
「さぁいよいよこの方の登場です！木野塚町のホカゾノ選手対、椚町の春川選手に代わりまして、小峰剣術道場師範代、小峰宗十郎！」

真打ち登場で会場が熱気に包まれた。
俺やキヨシ、ホカゾノやシカマの人間離れした戦いを常に間近で見ていた者。
巻き込まれる事もなく、それでいて逃げていた訳でもなく、激しい

攻撃の度に全てを躱し続けたご老体。
遂に奴が刀を握る。
中央へ移動する二人。
俺も審判として中央へ移動する。
にやけたホカゾノと、目を閉じ、刀を杖のように床に突き立てる宗十郎。

「開会式の借り、利子付けて返してやるよ！」
「……。」
「おい爺さん無視は良くねぇなぁ、淋しくて泣いちゃうぜ？」
「……存分に泣いておくがよいぞ小僧、今であろうが後であろうが泣く事に変わりはない。」
「寝言いうにはまだ早い時間だぜ爺さん、ご老体にしては威勢がよすぎるだろ？」
「戯け者が！！」

一喝。
空気が研ぎ澄まされ、ただそこに居るだけで首筋に刀を押しあてられているような威圧感。
相変わらず馬鹿げた気だな、一般人はこれ向けられただけで吐くぞ。
ホカゾノも力量差を感じたのか、腑抜けた表情から引き締めた。
流石は現世に生きる武神の一角、あと１００年は余裕で生きそうだ。
宗十郎は刀を袋にしまい、静かに俺へと預けてきた。

「貴様なら扱い方も知っておろう、この試合の間預かっておれ。」
「あぁ、しかと受け取った。」
「まさかあんたまで刀を抜かないつもりか？」
「あの刀は九州肥後胴田貫藤原正国が拵えし一振り、銘は「影裂き」

、ワシが武神であるが故に手放さずに済んでいる国宝級の代物じゃ。歴史上には記されず、小峰の家に影で加藤清正殿より賜った家宝である。貴様如き戯け者に使うには無礼に当たる。故に貴様はこの小峰宗十郎の身一つで倒そう。」
「流石は武神、端から端まで化け物だ。」
「全力で来るが良い小僧、ワシは手加減せぬ、せめて1分耐えてみせよ。」
「1分と言わずずっと付き合ってもらう、ウチのタフさを舐めるな！」

俺は相対する二人を見ると、大声で言い放つ。

「いざ尋常に……始め！」
「小峰流・天衝峰砕！」
「んなっ！」

開始直後、巨大な気を込めた拳がホカゾノを吹き飛ばした。
……腕を上げたなジジイ、前より鋭くなってやがる。
回避も防御もできぬまま直撃したホカゾノは、血反吐を吐きながらゆっくりと立ち上がった。

「ゴホッ……ったく、いきなり内臓潰しに掛かるとは殺すつもりとしか思えないな。」
「無駄口を叩くな痴れ者が！戦いの最中に隙を見せるでないわ！」
「やべっ！」

既にホカゾノの目の前に来ていた宗十郎が、胸ぐらを掴み、凄まじい勢いで宙に放り投げる。
深いダメージを負った状態で無防備、こりゃ沈むかな。
すぐさま宗十郎は跳び、更なる追撃を仕掛ける。

「小峰流・絶影！」

天井、床、壁、手すり。
およそ足場とできるあらゆる場所を使った空中連撃。
相手を落とし、上げ、吹き飛ばす。
影さえ追い付けない速度、まさに絶影。
ボロ雑巾みたいになったホカゾノがボトリと落ちてきた。
どうやらもう戦えないな、やれやれ。

「勝者、小峰宗十郎！」
「これが日本最強クラスの力なのかー！？武神として格の違いを見せ付けました、私では何が起きたのか判らない戦いです！」
「一度戦いになったなら終わるまで油断すべきではない、そう教えておけカズタカ！」
「はいはい、怒鳴らなくとも聞こえてるって。」
「まさか次の奴まで同じではあるまいな？」
「……多分。」

流石にこいつのやられっぷりを見て同じことをするとは思えないが、どうだかなぁ、微妙だ。

「続いても小峰さんの試合です！木野塚町のヒロイキヨシ選手対、並木町の三田村選手に代わりまして小峰宗十郎！」

先の試合を見てその凄さが判ったんだろう、歓声が凄い。
ジジイはまだ刀を取りに来ない、まぁ使う必要はないだろうさ。
キヨシが槍を携えて向かい合う、言葉はない。
キヨシの目は真剣だ、しっかりジジイを見据えている。

「いざ尋常に……始め！」
「小峰流・天衝峰砕！」
初撃は変わらず神速の掌打、だが……。
「……やるな貴様。」
「無駄口叩くと舌噛むぜ！我流・烈光刺！」
拳を槍で受け流したキヨシは、穂先を思い切り蹴りあげる。
視界の外から襲ってくる穂先を、宗十郎は素早く後退することで躱そうとした。
だが更に追撃をするため、キヨシは低く体勢を落とす。
「奥義！瞬光槍・疾風（ハヤテ）！」
「うぬ。」
宗十郎は光が瞬く速さで突き出された槍を躱し、それでもまだ余裕を見せる。
キヨシは冷静に、更に技を放つ。
「奥義！瞬光槍・天雷！」
さっきと同じ速度で、機関銃のように突きを連ねていく。
流石の宗十郎も腕で穂先をずらすしかなく、躱すことができない。
「貴様には刀を使うべきだったな！」
「甘く見んじゃねぇー！奥義！瞬光槍・四面楚歌！」
一瞬、キヨシが分身したように見えた。
実際は残像が残るほどの高速移動を行いながら、天雷を放っている

のだ。
逃げ道を閉ざす刺突の壁。
自分より強い相手を倒すなら、相手が本気を出す前に最大級の技で潰す。
キヨシにとって不幸だったのは、小峰宗十郎が見切りの達人だったことだろう。

「馬鹿な……。」
「同じ系統の技を使った連撃は感服じゃが、ワシには効かぬよ。」
キヨシの槍は宗十郎によって掴まれていた。
緩急がついた攻撃でなければ瞬時に見切り、止める。
同じ系統の技、パターンが決まった技は、如何に速くとも見切られてしまう。
奴を倒すには、一撃必殺の単発攻撃のみ。
これこそが武神と認められた、生きる神話の実力だ。

「貴様の突きは驚嘆に値するほど速い、故に見切るのに時間がかかった。じゃがもっと早く決着をつけるべきじゃった、更に鍛練せよ。」
「ったく、お兄さんはこんなのを倒したのかよ。」
「あの男を今日こそ倒す。見ておれ小僧、貴様の兄がワシに敗れる様を。」
「期待しとくよ、武神。」
槍を引き寄せられ、そのまま腹部に肘を食らうと、キヨシは電源が落ちたように気絶した。
「勝者、小峰宗十郎！」

拍手喝采とはこのことだ。
皆の歓声が、強敵へ立ち向かったキヨシに注がれる。
本人には聞こえていないが、良く頑張ったと俺も思うよ。

「激しい技をものともせず、小峰さん勝利！この圧倒的実力差に恐れず立ち向かったキヨシ選手に、もう一度拍手をお願いいたします！」

盛大な拍手の中、俺は宗十郎に胴田貫を返しながら言う。

「相変わらず見切りは化け物じみてるな。で、どうよウチの奴らは。」
「図体がデカい方は礼儀がなっとらんが、他の試合を見る限りでは十分じゃな。弟の方は十分な鍛練を積んでおる、単に相性で負けたのじゃろう。その辺りをしっかり鍛えておけカズタカ。」
「別に弟子でもないし、俺が鍛えるまでもなく勝手に強くなるさ、この大会はいい刺激だな。」
「まぁ貴様はワシに倒されるのじゃがな。」
「お、何だそれ、今朝見た夢の話か？」
「言っておれ。ワシが敗けてからどれほど経ったと思っている、ただ静かに余生を楽しんではおらぬわ。」
「そうか、それは楽しみだよ。」

互いに昂ぶった精神が、自然と覇気を発し始める。
それは濃密で、熟練の武道家でなければ耐えられない強さ。
覇気に当てられ、気絶していたキヨシが目を覚ます。
ホカゾノもシカマも、緋結華も。
この密度の中で普通にしてられる奴らこそ、この辺りの最強クラスだろうな。
俺の黒く、他者に威圧と畏縮を叩きつける覇気。

小峰宗十郎の白い、他者に威圧と気高さを感じさせる覇気。
だがな、白とは黒に呑み込まれるって相場が決まってるんだ。
同じ刀を使う者同士、技と力、覇気と気概が勝敗を左右する。
あの頃は気概以外は俺が圧倒していたが、覇気に関しては並んできたな。

――もしかしたら、シカマやキヨシたちに止めてもらうことになるかもしれない。

その前に、俺はアイツと戦わないといけないが。
俺はシカマを見る。
シカマも、弓を掴み、こちらを見据えた。
最も戦いたくはない相手が、本気の目で俺を見ている。
この力を得るに至った理由。
親友を傷つけてしまった弱さを克服したくて、その為に鍛えた力。
結果を理由にぶつける、それは結果を壊すことに他ならない。
かつての俺自身を、今の俺が殺すのと変わらないんだ。
かといって、棄権したらシカマは怒るだろうな。
さて、どうしようかね。

1月22日　Day. 13－8

「小峰宗十郎さんの圧倒的な戦いを終え、体育館は建設以来最高潮の熱気に包まれています！さぁ日本最強クラスの武神に続き、もはや無敵とも囁かれ始めた鬼神の登場です！木野塚町のヒロイカズタカ選手対、椿町のシカマ選手の試合だー！」

体育館の中も外も、闘気を含んだ歓声で埋め尽くされる。
兼定を携えた俺、弓を携えたシカマ。
この国でも相当な実力者同士が、こんな片田舎の体育館で、今邂逅する。

「この二人、高校以来の同級生であり、無二の親友とのことです。互いに思い入れもある中で、果たしてどのような戦いが繰り広げられるのか！」
「オレは本気で行くぜヒロイ。」
「……あぁ。」
「手加減とかすんなよな。」
「そのことなんだがシカマ、一つルールを追加しないか？」
「……なんだ？」
「１０分だ。」
「ん？」
「１０分間俺はお前に攻撃しない。それまでにお前が一度でも俺にダメージを与えたら、俺は棄権する。だが逆に一撃も入らなかったら、お前が棄権してくれないか？」
「は？お前なに言って…。」
「勝手なことを言ってるのは重々承知だ。だけど俺の力は元々……。」

「まさかあの夜の一件をまだ気にしてるのか？」
「……。」
「はぁ、まったくお前は変わらない。今更気にする必要があるのかね？」
「お前を護るために鍛えた力を、お前相手に振るうなんてできない。」
「……。」
「だが今の俺に一撃入れる実力さえあれば、この力は必要なくなる。だから１０分、俺に見極めさせてほしい。」
「……舐められたものだなオレも。仕方ない、どうせお前は言いだしたら曲げないんだろ？」
「まぁな、俺はやりたいようにやるだけだ。だからこの問い掛けにも実質的な意味はない、俺の自己満足みたいなものだ。」
「判ったよ。だがあんまり甘くみるとすぐ棄権させっからな、覚悟しろよヒロイ！」
「あぁ、俺としてはそれも本望だ。審判、一応時間を計ってくれるか？」
「勝手なこと言いおってからに、仕方ないのう。そのルール追加もワシが許可しよう。じゃからとっととその腑抜けた考えと決別せい、それではワシにも失礼じゃ。」
「これは借りにしとくぜジジイ。」
「一撃と言わずハリネズミにしてやる！」
「俺はタフではない代わりに見切りには自信あるぞ、抜けられるか？」
「いざ尋常に……始め！」
「我流・月光！」

間合いを取る間も許さない速射が、僅かな距離で飛来する。
更にそれは互いにぶつかり、微妙な方向転換までしてくる。
瞬時に抜刀、囮の矢には目もくれず、有効な攻撃だけ斬り落として

いく。
俺は動かない。
始めの場所で１０分間、ひたすらに斬り伏せてみせよう。
シカマは一旦距離を離し、一瞬の間に四方から矢を放つ。
俺は体を反らすだけで全て躱し、そこで気付いた。

超極細のワイヤー。

二本一対に繋げたワイヤーが、動かなかった俺をしっかりと縫い付けた。

「我流・影縫い、逃がさないぜヒロイ！」
「やるな、上手く光に隠されてて見えなかったぞ。」
「躱せなくとも油断はしない！我流奥義！慈愛なる終焉の雨（アポロン）！」

瞬間的な超高速移動、一矢乱れぬ同時波状攻撃。
その数にして２０、身動きが取れない俺にそれらは降り注いだ。

「そしてトドメだ！我流奥義！捻り貫く魔剣（カラドボルグ）！」

矢の代わりにつがえた一振りの剣。
捻れた剣は銃弾のように回転し、その破壊力を増大させる。
爆発が起きた。

「決まったー！一部の隙もない凄まじい連撃が決りました！シカマ選手縦横無尽に跳び回り、トドメのカラドボルグは直撃か！？」
「いやぁ、流石に怖かった、ワイヤーが細くなかったらやられてたかもな。」
「一応オレの奥義なんだが、簡単に捌くんじゃねぇよ。」
「いやいや、あの時確かに動けなかったんだ、もう少し抜けるのが

遅れてたら躱せなかったよ。」
俺は構えた刀を鞘に納め、粉々に砕いたカラドボルグを見る。
一瞬だが完全に捕まっていた、ワイヤーを見えなくする為に極細でなければ斬れなかっただろう。
抜けてしまえばアポロンは問題ない、あれは影縫いと組み合わせることでこちらの余裕を削るための技だ。
カラドボルグは危なかった、あの威力、単発の攻撃力なら最強クラス。
キヨシの槍より速く、ホカゾノの豪腕より強力。
当たっていたら骨どころか内臓までやられてただろう、まさに一撃必殺。
しかしそれもしっかりと相対できるなら捌ける、捻れのせいで剣の強度は脆かったからな。

「かなり真剣だろヒロイ。」
「当然だ、真剣にやらなきゃやられる。」
「ホントかねぇ、オレは奥義も矢も使って打つ手なしなんだが？」
「時間もないぞ、あと7分だ。」
「忙しい戦いだ。因みに１０分経ってもオレが棄権しなかった場合どうするんだ？」
「俺としてはやりたくないが、一撃で倒す。」
「そりゃヤバい、まだ死にたくはないな。」
「さ、お喋りの時間は終わりにしよう。こういうのは今度ウチの店で珈琲でも飲みながらだ。」
「そうだな、オレらの話は長くなる。とっととお前を倒して珈琲淹れてもらうとするか！」
「来い！兼定を越えるのは難しいぞ。」
シカマは即座に矢を放つ。

難なく躱すが、すぐに矢の軌跡を斬り付けた。
案の定ワイヤーが張られていた、同じ技とは感心しないな。

「掛かったなヒロイ！」
「む、斬れないだと？」

さっきのワイヤーとは質が違う、まさか。

「さっきの攻撃自体が布石だったのか！」
「それだけじゃないぜ！」

シカマは手元のワイヤーを引っ張る。
すると後ろに行った矢が反転し、戻ってきた。
そうか、今度は矢羽じゃなく先に繋がってたのか。
背後から襲ってくる矢、更に前からも続け様に放たれる。
完全な前後同時、しかもこちらは既に攻撃した直後、刀を戻す僅かなタイムラグがある。
次々と矢は飛んでくる、これを捌いても終わらない。

「我流・影縫い！」

今度は見えても躱せない、どれかを躱せばどれかに当たる。
多撃必中。
ワイヤーを扱うのにどれほど鍛練を行ったのだろう。

「我流奥義！慈愛（アポロン）なる終焉の雨！」

徹底的に余裕を奪ってくる。
流石にこれは躱せないか――――なら！
俺はワイヤーに向かって突撃する、左腕を突き出して。

左腕にワイヤーが絡み、使えなくなる、だが危険域は脱した。
正面から飛んでくる矢を片手で構えた兼定で砕き、活路を見いだす、あとは。
カラドボルグをつがえたシカマが、口に笑みを浮かべてこちらを見ている。

「恐れも抱かず突き進む、勇往邁進とはお前のことだなヒロイ！だがこれを片手で受け切れるか？」
「正直厳しい、だがここまで可能性を潰されたら行くしかないだろ！」
「たまには負けても良いと思うぞ。」
「悪いな、あの夜から負けないって決めてるんだ。」
「もうあの時のオレじゃないぞ？」
「それでも俺は負けられない、それに俺は負けず嫌いなんだ。」
「ならば受けてみよ、オレの最大出力！」
「砕くぞ、あの日の誓いを守るために！」
「我流奥義！捻り貫く（カラドボルグ）魔剣！」
「我流・龍爪鋼斬！」

剣と刀が衝突し、重い金属音が響く。
俺は背後へ抜けたカラドボルグを感じながら、残心をしているシカマの首筋に刀を添えた。

「まさかあれを片手で抜けてくるとはな、オレの負けか。」
「……いや、負けたのは俺だよ。」

静かに刀を納める。
俺の首筋に刻まれた一筋の紅。
それは俺の敗北を示す証だった。
ジジイもそれを確認すると、高らかに宣言する。

「勝者、シカマ！」

惜しみない拍手が響く。

ルール付きとはいえ、初めて俺に黒星をつけた男を讃える拍手が。

「続けてたらオレの負けだが？」

「続かないのだからお前の勝ちさ。」

「鬼神の血も紅いんだな。」

「喧しいわ！こんなんでも一応人間だっつの！」

「やはり片手じゃ弾き切れなかったか？」

「まぁもともと龍爪鋼斬は両手で出す力技だ、片手じゃ無理だと判ってはいた。」

「つか擦った時点で何故止まらなかった？」

「悔しいだろ、一応勝つつもりでいたんだから。」

「お前のお茶目は心臓に悪い。」

「はっはっは！」

「笑って誤魔化すな！」

「いゃあ、負けた～！なんか清々しい気分だ。」

「もうあの夜のことは気にするなよ？」

「あぁ、そうするわ。もう守る必要もなさそうだし。」

「大体オレはお前に守ってほしいだなんて一言も言ってない、勝手に抱えて強くなるな。」

「悪かった、調子に乗った。」

「これを機に肩の力抜けよ。」

「うん、重くてくたびれた、たまには休む。」

片手を上げる。

シカマも笑って、片手を上げた。

パンッ、とハイタッチ。

さぁ憂いは断った、十二分に戦える。

「もうこういう世界に迷い込んだのだと私納得しよう、そう思える激しい戦いも終盤、残りも僅かとなりました。単なる市内武道大会という枠組みに納まらない試合ばかりでしたが、そろそろ終わりが近づいています。皆さん是非とも最後までその目に焼き付けて下さい！」

マジで今回の実況は心をくすぐるのが上手いな、皆戦いたくてウズウズしてる。
かつてない強敵も、同じくらいのライバルも、素晴らしい相手が集まった。
観客も激しく苛烈な戦いを見て、まるで映画の中に入り込んだような楽しさを感じただろう。
大成功と言って良い、正直来年も開催してほしいとさえ思っている。

ただこの化け物同士の戦いを見て自分もやってみようと思う奴がいるかは疑問だが。
そんなことを思いつつも、試合は着々と進んでいく。
キヨシはシカマの猛攻によって潰された、槍ではワイヤーの拘束と相性が悪かったようだ。
アーチャーとランサーの戦い自体は物凄く熱かったが、結果はやはり厳しいな。
だがホカゾノもキヨシもきちんと緋結華には教えていた。
どこに隙ができるのかをホカゾノが教え、円運動に関してはキヨシの十八番だ。
ハルバートの扱いをしっかり鍛えれば、恐らく最強クラスの攻撃力になるだろう。
皆に期待を抱かれて成長していく、来年が楽しみな逸材だ。

「遂にこの時がやって参りました、次の試合で第一回市内武道大会も終わりを迎えます。残された二枚のカード、史上最強の鬼神と、日本最強の武神。恐らく会場にいらした皆さんが、この大会を通して最も期待と高揚を感じている組み合わせだと思われます。私も震えが止まらなくなっています！互いに侍の気概と武器を携え、数多の戦いを乗り越えてきた猛者！それでは最後の号令です！木野塚町のヒロイカズタカ選手対、椿町の浅田選手に代わりまして小峰宗十郎！」

大歓声。

今までの比ではない、これだけで一つの攻撃になりそうだ。

中央へ赴く。

胴田貫正國を携えた宗十郎が、静かに此方を見据えている。

俺も一振りの真剣を携え、相対する。

「なおこの試合でのみ互いの実力を考慮し、真剣での戦いが特別に認められています！また当施設が激戦に耐えきれない恐れもありますので、総合順位五位以内のシカマ選手、ホカゾノ選手、ヒロイキヨシ選手、御奈坂緋結華選手には四人での特殊審判とさせていただきます！また同選手は施設と一般人の保護及び有事の際のストッパーとしての任も合わせてご了承ください！」

「まぁ当然の措置だよな。」

「兄さん止めるには四人でも少ないくらいだし。」

「私に止められるでしょうか？」

「オレたちもついてるから安心しな。緋結華ちゃんは一般人の保護を頼むよ、厳しいなら呼んでくれて良いから。」

「はい、判りました！精一杯頑張ります！」

「よし、なら行こうか。」

「ウチが華麗に守ってみせるぜ！」

「逃げんなよホカゾノ！」

「当たり前だ、絶対弾く盾となろう！」

四人が各所に散る。
準備は整った。
いざ参る！

1月22日　Day. 13－9

「遂にこの時が来たのぉカズタカ。」
「あぁ。あまりにも大袈裟な守備態勢だが、俺とあんたが暴れるには相応しいかもな。」
「はっはっは、違いないの。して貴様のその刀、相変わらずの兼定と見受けるが？」
「和泉守兼定が拵えし一振り、銘は「白漣」、二代目兼定が創意工夫して打ち、表には出さなかったものだ。」
「貴様もきちんと己に合う刀に巡り合っておったか。以前の戦いでは刀が貴様と合わず泣いておった。」
「確かに、「光影」には悪いことをしてしまった。だがだからこそこいつと巡り合えた、もう泣かせたりしない。」
「ふむ、試合前であるが貴様とは語るべき事が多いようじゃ。後の語らいはこやつらに任せるとするかの。」

宗十郎は腰の「影裂き」に触れながら、静かに腰を落とした。

――――気配が変わる。

数多の戦いを経て研ぎ澄まされた覇気。
それは真実、刀のような鋭利さを持って威圧してくる。
対して俺も、覇気を全開で押し返す。
先程より濃密、下手な武術家なら吐き気を催す圧力。
一般人でも敏感な者なら気が付くかもしれない。

「今回は私が開戦の言葉を言わせていただきます！――――いざ尋常に……始め！」

始まった。
しかし互いに動かない。
微動だにせず、刀に手を添えて目を閉じる。
先に動いた方が、覇気による戦いの敗者。
堪らない時間だ、相手の覇気が強ければ強いほど俺の覇気は増していく。
心臓が早鐘を打ち始め、身体は戦いに最適化される。
ただ立っているだけの準備運動、互いの実力を測る時間。
涼しい顔をしている俺に対し、宗十郎の気配には不安が混ざり始める。
ははは、楽しいな宗十郎。
静かに目を開けた。
額に汗を浮かべた宗十郎が、刀の柄を握る。
いよいよ接近戦だ、最高の戦いにしたいな。
鞘から解放される影裂きと白漣。
互いに一歩、そして跳び出す。
一尺三寸の間合いで、最初の衝撃が弾ける。

「小峰流・散り紅葉！」
「我流・天昇空牙！」

風を伴う横斬りを、下から食らいつく斬り上げが弾き飛ばす。
高い金属音、宗十郎に隙を作った。
しかし即座に斬り返し、連続して斬りこんでくる。
実に十合、一瞬の間に激しくぶつかり合う。

「足止めての斬り合いなんて俺たちの戦いじゃないだろ？」
「ワシらの戦いとは即ち超高速剣術、ならば相応の戦い方があるものじゃな。」

一度離れ、再びの接近戦。
だが今度は立ち止まらず、すれ違いざまの交差戦だ。
一瞬の攻防。
更に僅かな時間、瞬時に三度、烈火の如く火花が散る。
着地と同時に相手の気配へ跳ぶ。
追い付けなくなった時、必殺に等しい一刀が身体を薙ぐだろう。
すぐ隣に死が鎌首をもたげる感覚、際限なく上がる最高速に理性が剥き出しになる。
己の全力に対することが可能な敵の存在、それに打ち勝つ未来への高揚感。
第二の人格が目を覚ます。
ニヤリと、口元が勝手に嗤う。

「あはははは、楽しいぞ小峰宗十郎！こんなにも楽しい殺し合いは久方ぶりだ！」
「また貴様か！前にも増して汚れた気配を放つのぉ！周りに一般人がいることを忘れるな！」
「はっ、下らぬ事に意識を削ぐなよ小峰宗十郎！オレの興を冷ますな、テメェは自分の命を気に掛けろ！老い先短けぇ身体なんだ、気の弛みで壊れられたら堪らねぇ！」
「それこそ下らぬ事よ！貴様ごとき戯け者に今のワシは斬れぬ！戦いに溺れた貴様はもはや侍ではない、ただの魔物じゃ！」
「オレは鬼を越えた鬼神、魔物なんてカスと同列とは笑わせるな！」

血がたぎる、視界には宗十郎しか映らない。
一体どれほど刃を交えたのか、もはやそれすらも定かではなくなってきた。
感覚はより鋭敏に、刀は大気を斬り、真空へと押し寄せる風は、鋭

利な刃物のように宗十郎を傷つけていく。
あぁ、やはりテメェは最高だ小峰宗十郎。
もっといけるだろ？
これで終わらないだろ？
剣撃を奏でろ、まだ最高潮には遠いんだ。

「オラオラどしたどしたぁ！動きが鈍ってきてるぞ小峰宗十郎！少しでも遅れたら代わりにテメェの腕を食らうぜ！」
「流石のワシでも貴様のその殺意にはあてられてしまったようじゃの、やれやれじゃ。」
「ははははは！立ってるだけで立派だぜぇ？だが立派だってだけで、オレを満足させるには遠いがなぁ！」
「深く重く、どこまでも黒い。貴様の殺意は暗闇そのものじゃな、人が恐怖する驚異じゃよ。」
「オレが出てくるのはテメェクラスの奴がいる時だけだ、ただの一般人など知ったことか！」
「では早急に消えるが良い！」
「何？」
「小峰流奥義・封魔討刃！」

一瞬の八刀一突。
迎撃は間に合わない。
可能な限り捌き、致命傷を避けて躱す。
腕や首に赤い筋が刻まれ、血が流れる。

「凄いなあの爺さん、兄さんに技を入れたぞ。」
「あのお兄さんが捌けない速度って……十分あの爺さんも化け物だぞ。」
「ヒロイ、相当キテるな。」
「師匠もマスターも、本当に人なの？」

着地し、そのまま高速戦闘は続く。
互いに傷を負ってはいるが、オレの方が深いな。
流れ出る血を、生命の赤を見る。
一歩、死の気配が近づく。
薄汚い黒装束を纏った死神が、卑下た声で嗤う。
ふはは。

「最っっ高だぁ！強くなってくれて嬉しいぞ！」
「戦闘狂め、すぐに引導を渡してくれるわ！」
「上等だぁ！返り討ちにあっても知らねえぞ！」
「小峰流・不浄滅刀！」
「我流・狂い咲き！」

連撃が連撃にて相殺される。
だが僅かにまだオレの方が速い。
最後の一刀が宗十郎の左腕を斬り裂き、血の花が咲く。
苦悶の表情で着地する宗十郎。
その腕はだらりと下がり、赤く染まっている。

「口ほどにもねぇ！引導を渡す？その腕で何が出来るのか見物だなぁ！」
「くっ、貴様。」
「更なる強さを求めてテメェの道場に足を運んだが、この程度なら教えを請うまでもない！」
「おのれ、我が流派を侮辱するかー！」
宗十郎が血を流しながら突進してくる。
「下らねぇ挑発にも激情して突っ込む、余裕がないにしてもいよい

よつまらねぇな。そろそろ終わりにすっか。」
「小峰流・蒼龍牙斬！」
「遅いな、片腕じゃやはりこの程度か。」
速度の落ちた連撃ほどつまらないものもない。
オレは白けた心で刀を納め、居合いの姿勢をとった。
「……油断をするなと言ったはずじゃ。」
「何だと？」
「戦いの最中に刃を納めるとは愚の骨頂じゃ！」
刹那、宗十郎が眼前から姿を消した。
否、一瞬でオレの背後に回ったのだ。
わざと激情したふりをし、オレを油断させ、刀が抜刀状態なら見切れる動きを当てる。
完全に出遅れた。
即座に振り返り、全力で抜刀する。
しかし既に振り下ろされている刃は止められず、大きな傷を左肩に刻んでいった。
血飛沫が散り、激痛が全身を駆け巡る。
斬られた？このオレが？
左腕が上がらない、流石に試合中の復帰は難しい。
やるじゃないか小峰宗十郎、まさか小細工まで使うとは。
「ふはははは！流石だな小峰宗十郎！小さなプライド捨ててまでオレに攻撃を当ててくるとはよぉ！真っ向から叩き潰すのがテメェの戦いじゃなかったのかよ？」
「ふん、貴様を相手にするならそのような信念を捨てる覚悟を初めからしておるわ！」

「良いねぇ、勝利に貪欲なのは良いことだ！オレらみたいな人間は、生きるか死ぬかの戦いしか楽しめねぇんだよ！そうだろ小峰宗十郎！テメェは楽しくねぇのか？こんなにも全力で殺し合えるのによぉ！」

「貴様は人の死ですら何も感じないのか？」

「戦いで得るのは勝利のみ、人の死なんてその過程で起きた些末事だろうが！殺した相手に報いたいなら、そいつの分まで戦って勝ちゃ良い！」

「もう良い。影裂きにて、その歪みきった人格ごと斬り裂く！」

「そうじゃなきゃつまらねぇ！戦いの哲学なんてのは個人の自由だ、いざ戦いになれば毛ほどの役にもたちゃしねぇ！土台無理な話だ。武人ってのは元来拳を打ち合わねぇと語り合えない、お喋りは平和な日常って中ですれば良いのさ！」

互いに鞘を審判に投げる、もう終わるまで納めることはない。
瞬間の最高速。
肉体の限界を超えるように、力を振るう。
接敵の度に交わされる刃は、回数を重ねる毎に増えていく。
風がぶつかり、突風が吹き荒れる。

「強くなるって……あんなに。」

「まぁ緋結華ちゃんもあの域に達すると判るだろうね。」

「俺たちもまだまだだが、武神や鬼神なんて呼ばれる奴は大抵なにかしらの信念が確立してるもんだ。」

「一つの信念を極限まで突き詰めないとああはなれない、だからこそ見える境地ってやつだろうな。」

「なに、緋結華ちゃんは宗十郎さんのようになるさ、ヒロイのは狂気に近い。あれはマズいよ、戦闘狂だからな。」

右腕が唸る。

互いにもう僅かな時間しか許されない。
流れゆく血液は凄まじい速度で体力を削り、動きを鈍らせる。
気力で身体を動かし続け、勝利を得んがために刀を振るう。
着実に忍び寄る死の気配。
笑みがこぼれ、歓喜に身を焦がす。
あぁ、オレは生きている。

「老体にはキツい状況じゃないか小峰宗十郎！」
「舐めるな、この程度ならばいくらでも戦えるわ！」
「なぁ小峰宗十郎！楽しんでるか？」
「ふん、ワシとて貴様が相手でなければ本気なぞ出せぬわ！」
「なら生まれた時は違えど、こうして同じ時間を交えられた奇跡を喜ばないといけないな！」
「ここまでの強さに至ってしまったことを悔やんだこともあったが、今は寧ろ僥幸とさえ思っておるよ！」
「ははははは！ならば悔いも未練も残らぬくらい叩き潰すのが礼儀ってもんだよなぁ！」
「ぬかせ！地に横たわるのは貴様じゃカズタカ！」

着地と同時に地を蹴り、真正面から突っ込む。
もう小細工も必要ない、どちらの全力が上か、競うならばそれのみ。

「壊れるなよ小峰宗十郎！我流奥義！逃れる術なき鳥籠（燕返し）！」
「その身に刻め！小峰流奥義！臥龍戦咆刃！」

刹那の間に三度放たれた刃と、覇気を刃に乗せた斬撃が激突する。
すれ違いの一閃。
だが互いに片腕、体力も技の冴えも落ちている。

オレは宗十郎の右腕を僅かに斬り、傷を負わぬまま振り返った。
宗十郎は振り返る力もないのか、片膝を付いて蹲っている。

「もう終わりか？」
「今更ワシのことを気に掛けるとは、未だ鬼神になりきれていない証拠か。」
「黙ってねぇと死期を早めんぞジジイ。」
「さて、次で最後かのう。貴様を倒して医務室に行かなければ。」
「おやおやぁ、既に寝てんのかぁ？スッゲェ寝言が聞こえたんだが、オレの空耳だよなぁ？」
「流石にこの傷では自然治癒も時間がかかるでのぉ。」
「……わざとだろテメェ。」
「もう一踏ん張りじゃ、行くぞ影裂き、奴を倒す。」
「行くぜぇ白漣、ジジイの人生終わらせるぞ！」
「はぁぁぁぁぁぁ！」
「うぉぉぉぉぉ！」

最後の覇気を解放し、気合いの咆哮が響く。
ビリビリと空気を伝う重圧。
あれだけ傷を負っても尚これか、最高だよあんたは。
存分に楽しんだ、あとはオレの勝利で終わらすだけだ。
全力の踏み出し、最後の接敵。
どう転んでも、決着がつく。

「小峰流秘奥義！瞬閃影裂き！」
「我流秘奥義！終劇葬刃！」

神速の斬撃、やけに遅く見える瞬間。
オレは目を疑った。
宗十郎の身体が傾いでいる、刀もしっかりと握れていない。

瞳に力はなく、完全に気絶している。
オレの刀は既に宗十郎へ向かって放たれている、今から軌道は変えられない。
くそったれが！

「やれやれ兄さんは世話が焼けるなぁ。」
「お兄さんってテンション上がると後先考えなくなるからなぁ。」
「凄い戦いだったからな。」
「よく皆さん迷わずここに飛び込めますね。」

オレの刀は一瞬で飛び込んできた四人によって止められた。
たまには役に立つじゃないか。

「もう爺さんは戦えないな――勝者、ヒロイカズタカ！」
「あぁ！それウチが言いたかったのに！」
「はっはっは、早い者勝ちだせ！」
「下らねぇなこいつら。」
「やっと終わりましたね、審判って疲れます。」
「試合終了！鬼神と武神の試合は鬼神の勝利によって幕を閉じました！やはり壮絶な戦いでした、私は未だに圧迫感で動けません！では少々の休憩を挟んだ後、閉会式とさせていただきます！皆さん長らくありがとうございました！」

長い長い戦いはこれにて終結した。

1月22日　Day. 13－10

綺麗に整列した十二人。
誰も彼も傷を負い、激しい戦いの爪痕がありありと伺える。
まぁウチの面子だけは普通に回復しているからおかしな光景だ、常識というかなんというか、まともな人間はいないのか。
だが疲労感は否めないようで、流石に疲れた顔をしている。

「本日はお忙しい中お越しいただき誠にありがとうございました、お陰さまで最高の戦いを見ることができ、私は非常に感動しております！」

割れるような歓声が上がる、誰もが納得する企画だっただろう。
歓声が収まり、市長が話を続ける。

「まさかこんなにも素晴らしい試合が見れるとは夢にも思いませんでした、今は素直にこの武の祭典を誇りましょう。」
「私も一日実況をさせていただき、この市に住まう最強の武人達を間近に感じ、武人の生きざまをまざまざと見せ付けられました。是非とも来年も開催された暁には、再び実況を勤められたらと存じます。また同じく一日審判をして下さった小峰宗十郎さんには深く感謝します。」
「ワシも久し振りに熱い魂を持つ者たちに出会うことができ、ワシ自身も戦うことができた。満足いく一日じゃった。」
「ではここで皆さんも気になっている結果発表と移らせていただきます。第五位からの発表です、呼ばれた方は是非観客の皆さんに手を振ってください！では第五位！並木町の御奈坂緋結華選手！」

歓声が上がる。
緋結華も恥ずかしそうに手を振って、栄光の瞬間を感じていた。
しかし良く戦ったよ、将来が楽しみだな。

「続いて第四位！木野塚町のヒロイキヨシ選手！」
「くっそー、三位以内にいないのが悔しい！」

キヨシは観客に対し槍によるリアクションを返していた、お調子者だな。
まぁキヨシも凄い技の冴えだった、あの連続技は中々美しい。

「続いて第三位！木野塚町のホカゾノ選手！」
「はっはっは！流石はウチ、やはり武神とはウチのことだぜ！」

刀を振り回しはしゃぐ馬鹿、危ないだろうが！
後ろでウザい、殴って止めたら怒られるだろうか。

「さぁ最強を決める戦いの第二位に輝いたのは、木野塚町のヒロイカズタカ選手！そして栄光の第一位は……椿町のシカマ選手だー！！」

粋な計らいだな実況、まさか二人同時に発表することで更に盛り上げるとは。
会場はもう手の施しようがないくらい歓声で埋め尽くされた、まぁ悪い気はしないな。

「両者とも勝利数は同じですが、カズタカ選手がシカマ選手に敗北しております故このような結果となりました！しかし互いに素晴らしい戦いをした事実、また木野塚町には小峰さんというハンデもありました。よってカズタカ選手にも表彰状が贈呈されることとなり

ます。残念ながら優勝の賞金などはシカマ選手所属の椿町のみですが、この誉れは二人に捧げるべきものだと思われます。それでは両者とも舞台に上がってください！」

大歓声の中、俺とシカマは舞台に上がる。
そこには市長と、傷だらけの小峰宗十郎が立っていた。
市長が読み上げる。

「表彰状。貴殿は第一回武道大会において最も強く、最も素晴らしい戦いをし、それに勝利したとして、ここに優勝の誉れを授けるものとする。これからも絶えず研鑽を積み、更なる高みへと昇ることを願う。……おめでとう。」
「ありがとうございます！」
「以下同文。」
「端折りすぎだジジイ、以下もなにも始まりすら言ってねぇぞ。」
「ふん、ワシをこんな姿にした貴様にかける祝辞など持ち合わせておらぬわ！」
「んだとテメェ、なんなら今すぐにもう一度叩き潰してやろうか？」

「ヒロイ落ち着けって。」
「チッ、仕方ないな。」

俺もジジイから表彰状を奪い取り、振り返る。
こちらを見上げている武道家たちと、静かにしている観客たち。

「それではお二人には締めのお言葉を賜りたいと思います。」

俺たちはマイクを渡され、前を見た。
騒ぎたくてウズウズした雰囲気が伝わってくる。
まったく、いい街だよここは。

シカマと笑い合い、皆に笑いかける。

「今日俺たちは、己の武を競い合った！」
「今日オレたちは、鍛えた技を出し切った！」
「思い残すことがねぇくらいに、全力で闘った！」
「更に強くなれる可能性を、皆を通じて学び合った！」
「だが胸に残る思いは同じ！」
「痛みも喜びも、全部含めて！」

俺とシカマは刀と弓を打ち鳴らし、大声で告げる。

『最高に楽しかったなお前らー！！』

溜まった熱気を吐き出すかのように、歓声が爆発した。
拍手、指笛、武器を打ち鳴らす音。
そのどれもが、今日という長い日に相応しい雄叫び。
抱き合って喜びを分かち合う者や、良き戦いに握手する者。
興奮して叫び、あるいは泣き、笑う。

「うひゃあああぉう！」
「ぺぎゃあああう！」
「訳分かんねぇ奇声発してんじゃねぇよボケェ！」

本人たちも意味を考えてない奇声を止めるため、俺は舞台から跳び、すかさず抜刀。
間一髪躱した馬鹿共はなおも奇声を発しつつ、右往左往と逃げ回る。

「あばばばべぼぼぼ！」
「うほっ？うほうほ……うほー！」

「黙れっつってんだろうがー！生き恥曝すなカスが、さもねぇと見るも無残に刻むぞ！」
「うぷぷ～。」
「ゲ～スゲスゲスゲス！」
「我流・鋼牙滅爪！」
「マジで技出してきやがった、キヨシ逃げろー！」
「……今までありがとう……ギャアー！」
「キヨシー！」
「喧しい連中じゃの。」
「あれがあいつらの持ち味ですよ、はた迷惑ですけどね。」
「やっぱりフラトレスは賑やかですね～。」
「カズ君頑張れ～。」
「ＺＺＺ。」

俺が二人を叩きのめしたのを見て、実況は楽しそうに言葉を紡ぐ。

「それではこの素晴らしい一日もこれにて終了となります！長い時間お付き合いいただき、皆様本当にありがとうございました！」

最後の歓声が響き、この武道大会は幕を下ろした。
まぁその後は大変だった、まるでアイドルのような人気っぷりだ。
緋結華やシカマを呼んで店で打ち上げをするつもりが、体育館を出たらギャラリーに取り囲まれたのだ、かったりぃ。
早く帰りたい俺と、みっともなくはしゃぐ馬鹿二人。
またも乱闘、学習能力がないのかこいつらは。
適当に殴ったら無視して帰る、流石に疲れた。
何処までもギャラリーが続くからいつまでたっても店に着かない。

「ウチが守ってやるよお姉さん。」
「俺の槍は貴女の心を貫くぜ。」

『きゃ〜！』

きゃ〜じゃねぇよ、白膜症ですか？ぼやけてイケメンにでも見えてんのか？

或いは難聴で今のウザい台詞が愛の囁きにでも聞こえるんだろう、可哀相なこって。

入り口のベルを鳴らして店に辿り着く、はぁ落ち着く匂いだ、珈琲でも淹れるか。

「おいそこの馬鹿野郎、適当にデザートでも取ってこい！」

「おっけ！出でよたくあん！」

「なぁ死ぬか？今度こそ死ぬか？」

「あっはっは、やだな兄さん軽いジョークですよ？」

「ならばこれだー！出でよキムチ！」

「飲みか？酒をご所望か？」

「うん、酒持って来いホカ。」

「テメェは観客席で死ぬほど飲んで最後寝てたじゃねぇか！」

「騒いでたわりにはちゃんと見てるんだねホカゾノ。」

「ふふん、もっと褒めて良いよ！」

「やめろカオリ、カスが図に乗る。」

「ヒロイ〜、珈琲くれないか？」

「あ、マスター私も欲しい！カフェラテで！」

「了解、緋結華は甘いのが良いんだろ？」

「うん、あまあまで！」

「肥えるぞ？」

「マスター……怒るぞ〜！」

「女の子には禁句だよカズ君。」

「うわ〜兄さん無神経。」

「いくら自分が太らないからって最低だよお兄さん。」

「む、すまないな緋結華。」

「や、そこまで真剣で謝らなくても良いですけど。」
「空気読めよお兄さん。」
「ただのおふざけでしょ？」

あ～殺意湧く。
あまあまのカフェラテとミルク珈琲を四つ淹れて、それぞれの前に置いた。

「ねぇお兄さん？」
「なんだ愚弟。」
「なんで俺の珈琲はないの？」
「へいへいキヨシ、そこは俺らのだろう？」
「うるせえぞ馬鹿。」
「キヨシまで敵に！？」
「俺は分のいい方につく！」
「だが俺は受け入れない。」
「な、何だってー！？」
「ぷぷっ、ざまあ。」
「死ねゴリラ！」
「返り討ちだおチビちゃん！」
「言ってはならぬことをー！」
「ぷぷっ、ぷぷっ。」
「貫くぜ！心臓破（ゲイボルグ）りの魔槍！」
「店を壊す気か戯け！」
「痛いっ！」
「ぷぷっ、ぷぷっ。」
「テメェも黙れ！」
「おふっ！」

いつまでも賑やかに、喧しく、遅くまで騒いだ。

一応緋結華を家まで送り、店を片付けてようやく眠りに就く。
あぁ、最高に楽しい時間だった。
また明日から頑張るとしようかね。

2月3日　Day. 14－1

一面の銀世界。
キラキラと光る光景には、誰もが感嘆の声を上げるに違いない。
踏みしめる大地も白く、サクサクと軽い音がする。
この武骨で重たいブーツも、今日は仕方ない。
その代わりに、風を存分に感じられるんだから。

「いやぁぁぁぁぁ！」
「キヨシー！」

視界の端で、馬鹿が奇声を上げながら林に突っ込んで行った。
鈍く嫌な音を立てて、木に正面衝突、死んだんじゃなかろうか。
おまけに枝に降り積もった雪がしこたま落ちてきた、馬鹿達磨の完成。

「うわダサっ！」
「うっせぇぞゴリラー！テメェも後で同じ目に遭わせてやっかんな！」
「ふ、これが格の違いさ。」
「黙れ！そして転けろ！」
「ボードは友達さ！」
「気取ってんじゃねぇよ馬鹿野郎！似合わねえぞブサメン！」
「雪だるま風情がほざくなよ下手くそ！」
「初めてなんだから当たり前だろカスが！ちょっとやったことあるからって調子乗るな！」
「僅かな差が勝敗を分ける、勉強になったな坊や。」
「死ね黙れ、食らえ雪玉！」

「イテッ、ざけんなアホ！」
「不憫な頭の子たちだな。」

そう、俺たちはウィンタースポーツの最高峰、スキースノボに来ている。
二泊三日の温泉食事付、それなりに値は張ったがまぁ仕方ないだろう。

「スノボの奴はホカゾノに教われ、スキーはヒロトだな。んじゃ後は自由にしてくれ。」

そんなこんなでキヨシはホカゾノと、カオリはヒロトと滑りに行き、俺はスキーで馬鹿野郎共が迷惑を掛けないように見張ってるってわけだ。

「ほら早く下まで行ってリフト乗るぞ坊や。」
「ウゼェぞボケ！何様気取りだ！」
「こらこら、先生に対する口の利き方じゃないよ坊や。」
「死ね！死ね！」
「ぷぷっ、超楽しい！」
「そこら辺で止めろアホ。」
「てか何で兄さんはボードじゃないのさ。」
「今更新しいことにチャレンジする気概はねぇよかったりぃ。」
「俺は絶賛挑戦中だせ！」
「はいはい流石だね～。」
「もっとまともな感想を所望する！」
「わぁ凄い流石はキヨシくん、猪突猛進なチャレンジ精神だね～。」

「いゃあ誉めんなって。」
「四字熟語的に誉められてはいないぞキヨシ。」

「よし復帰！行くぞホカゾノ！」
「おっし、風になるぞ！」
「まぁ何だかんだ大丈夫そうだな、多少なら騒いでも怒られないだろうし。」

大声ではしゃいで雪崩とか起きなければいい、起きても一般人だけは救けだそう、原因たちには死んでもらう。
一切ブレーキもかけずに突っ走っていく二人は放置して、俺は残る二人の様子を見に別のルートから滑っていく。
溢れんばかりの人々を躱しながら、俺は比較的傾斜が緩やかなルートを目指す。
辿り着くとそこには楽しそうに滑る二人がいた。
……嫉妬なんてしてないよ？

「やほ〜、楽しんでるか？」
「あ、ヒロイさん。」
「カズ君だ、ホカゾノ達は大丈夫だった？」
「一応マナーに反するおふざけはしてないよ、今のところは。」
「てかカオリさん俺が教えなくても普通に滑れるじゃん。」
「久し振りだったから一応先生を付けようとな、まぁ必要ないなら良かった。」
「ふふん、あたしもやれば出来る子！」
「じゃあ俺はホカたちに合流しようかな、また下らないことしてそうだし。どこら辺にいますか？」
「向こうの傾斜がキツい辺りだよ、何かひたすらにレースしてると思う。」
「うん、じゃあ行ってくる。」

凄く軽やかにヒロトが滑っていく、やっぱ東北ってスキーとか上手いのかな。

「あたしたちはのんびり滑ろうか。」
「そうだな、のんびり…。」
……。
「ホワイトディザスター！」
「どのへんがのんびりだー！」
「あはははは～！」
「満面の笑みで雪玉投げないで！」
「見よ！そして食らえ！改良に改良を重ねて漸く完成したこの雪玉専用スリングを！」
「んなもんわざわざ用意したのかー！てかキャラ変わってますよ！？」
「あたしの愛が受け取れないの～？」
「わ～、それ引き合いに出されたら素直にリンチ食らうしかないのかなぁ～？」
「ほら食らえクソ兄貴！」
「前に小学生と一緒になってウチをリンチにした恨みー！」
「確か……こうやって……ガシャコ。」
「いつの間にこっち来たんだお前ら！てかヒロト！どっからショットガン取り出したの、しまいなさい！貴方は銃なんて持ってはいけないわ！」
「砕けろ兄さん！我流・地奔り！」
「武道編は終わりにしませんかー！」
「疾風槍！」
「わぉ、今日は氷属性までついてるね、クールだぜ！」
「ヒロイさんまだふざける余裕あるみたいだね。」
「ロッドアターック！」
「カオリのかさっきから一番痛いよ！」

因みにこれ滑りながらやってるからね、クラ〇ドもカ〇ージュもビックリだ、かなり躱すの辛い、俺にとってのエア〇ス敵になってるし。
ロッドで雪玉砕いてはいるけど、流石は改良型、威力が半端ないぜ。

「てかさ～、レースしないかいお兄さん。」
「そういう提案はせめて雪玉投げる動作を止めてから言いなさい！」

「じゃあやっぱいいや。」
「どんだけ俺に雪玉投げたいの！？」
「判ったよ我が儘だなぁ。」
「しまいにゃはっ倒すぞ！」
「山頂からスタートして、麓がゴール、ルートの指定はなし。」
「初めに訊いとくぞ、妨害は？」
「有りに決まってるじゃないか、お兄さん寝てんの？」
「このやろう。」
「兄さんには雪だるまになってもらうぜ！」
「はっ、吹くじゃねぇか。テメェの足りない脳ミソじゃ正しい未来は見えないらしいな。」
「因みに一位の人は昼飯が一割の値段で食べられます。」
「どゆことだ？」
「兄さん判んないの？ぷぷっ。」
「じゃあテメェが説明しろ。」
「判んない。」
「もう喋んなカス。」
「二位が二割、三位が三割、四位が四割、全部足せば十割になるでしょ？」
「ほぉ、例え一位になれなくても早い方がダメージが少ないわけか。

」
「やる気起きるじゃん？」
「確かにこれなら最後まで必死になるな、賢いじゃんかキヨシ。」
「誉めても何も出ないんだからね！」
「じゃあ誉めねぇよ阿呆。」
「やだな冗談だって、誉めて誉めて。」
「……。」
「誉めろよ！」
「さっき誉めたじゃん！？」
「足りねぇよ！」
「寂しい子かお前は！」
「二人とも早くしてよ、漫才は後にしてくんない？」
「とっとと山頂行こうぜ、昼前には戻らないとロッジが混む。」
「そうだな、早く登るか。カオリはどうする？流石に傾斜がキツいから止めとくか？」
「寧ろあたしも参加するし！」
「マジか！？」
「じゃあ一位は飯代タダ、二位が一割だな。」
「それでいこう、おっしゃ！腕が鳴るぜ！」
「俺も膝が鳴るぜ！」
「もうそろそろ病院行って診てもらいなさい！」
「ヒロイ家の宿命さ！」
「俺を混ぜるの止めて！」
「じゃあリフト乗りに行こうよ。」

二人乗りのリフトにぞろぞろと乗り込んでいく、寂しい子はホカゾノ。

「何でウチだけ一人なのさ！」
「お前みたいな不幸ちゃんとリフト乗りたがる奴は間違いなく自殺

志願者だ、ベルト締めとけよ馬鹿。」
「ねぇよベルト！つか失礼だ、ウチはそこまで不幸じゃない！」
「このレースが終わったらまず誰に報告しますか？」
「家で待つ……婚約者に。」
「お疲れ。」
「乙。」
「バイバイ。」
「今までありがとう、別に楽しくはなかったよ。」
「死ぬの！？ウチ死ぬの！？」
「そりゃあんだけ盛大にフラグおっ立てりゃ死ぬよ、その願いは叶わないよ。」
「そもそも婚約者いないのに嘘吐いたから死ね。」
「寧ろ殺される！？」
「世の中は不条理なものさ。」
「あれ、まだ生きてたの？とっととその薄汚い面を灰に変えて消え去ってくれる？」
「炎で燃えカスにされる死に様なんだ！？てか実は味方の魔法が飛んできたんじゃね？」
「あぁ、その手があったか！」
「素っ敵な名案だ、わざわざ手加減して魔王に殺させる手間が省ける。」
「いつの間に魔王と戦う設定に！？このリフト何処と繋がってるの！？」
「ム〇ーの城行きでございます。」
「観光地かよ！」
「まぁ最初の訪問は石化の呪文で手厚い歓迎を受けて彼方へ飛ばされるけどな。」
「よし降りよう、今すぐ降りよう！」
「うん、降りろよ。」
「いや止めて、今一番高いとこだから！」

「え～、やっぱ口だけかよ。」
「ホカゾノ飛ぶとこ見たいなぁ。」
「ほら飛べよホカ、恥ずかしがらずに、見ないでおくから。」
「どうせなら見ろよ！飛ばないけど！」
「やっぱゴミだな、死ねば良いのに。」
「酷くない！？」
「え、どこが？」
「もう良いよ……。」
「じゃあ飛べよ。」
「しまいにゃ泣くぞ！」
「うわ、ウザッ。」
「どこまで酷いの！？」
「どこまでも酷いよ？」
「ぐすん。」
『……。』
「せめて反応して！」

リフトから降りると、無言でホカゾノを置いていく、すすり泣きが聞こえても振り返ってはいけない。
言い換えるならば愛、そう、これは愛ゆえに生じるちょっとだけ激しいツンなんだよ。
俺たちは比較的上級者向けのコースの始まりに立った、中々に壮大な光景だ。
遥かまで広がる白き山脈、麓には白い絨毯のように雪が降り積もっている。
うん、カオリのように美しい。

「うわ、頭ん中でデレた。」
「何度も言うが弟くん、読心術はプライバシーの侵害だよ？」
「戦いに関しては読めないのが難点だ。」

「彼方へと吹き飛べカスがー！」

スキー板を付けたままで蹴りを叩き込む。
背中を海老反りにして飛んでいったキヨシは、上手く着地してこう叫んだ。

「レーススタート！」
『なにぃ！？』

俺たちも急いで滑りだす。

「はっはっは、お兄さんの蹴りが俺に最高の風をプレゼントしてくれたぜ！一位は貰ったー！」
「ズルいぞキヨシくん！」
「カオリさん、勝負は無情なのですよ。」
「兄さん！ウチにも蹴りを！」
「よっしゃ、アイツに一位は取らせるか！歯ぁ食いしばれ！」
「おっし、ってあぁぁぁぁぁぁ～！」
「誰がテメェなんぞに協力すっかよボケ、先に天国行きやがれ！」

ホカゾノを崖下に蹴り落とし、何事もなく滑っていく。

「カズくん、流石にホカゾノ死んだんじゃない？」
「いや、アイツはこの程度じゃ死なないように出来てますから、心配はいりませんよカオリさん。」
「あ、別にこれっぽっちも心配はしてないから大丈夫だよヒロトくん。」

いやぁ相変わらずカオリの言葉はキツいぜ、ここにいなくて良かったなホカゾノ。

「じゃあヒロイさん、俺は先に行かせてもらいますよ。」
「ヒロト速いね、俺たちも行こうか。」
「とりあえず奢る相手くらいは選びたいね。」
「勝つためならプライドすら棄てる奴らには奢りたくないな。」

すいすい滑るヒロトを目指し、俺たちは急斜面を降りていく。
キヨシを追い抜く時に、ロッドで一太刀入れる。

「な、いつの間に追い付いたお兄さん！」
「貴様が余裕ぶっこいて風を楽しんでる間にさ！」
「良く見るとヒロトが既に前に！？カオリさんまで追い付いてる……一人足んなくね？」
「え、あたしたちはもとから四人じゃない？」
「あ……あぁ、そうでしたねカオリさん、ボクうっかりしてましたよ。」
「ナチュラルにホカゾノ消滅。」
「じゃあとりあえずキヨシくんにはペナルティだね。」
「え、何故？」
「身体を張ったとはいえ、フライングだったのは事実でしょ？」
「あ、あぁそゆことですか…。いやでももう追い付かれてますしっていやぁぁぁぁぁ！！」

カオリによるロッドアタックが容赦なく刻まれた、哀れ愚弟。
みっともなく雪に突っ込んだキヨシを放置して、更に速度を上げていく。
残るは一人、ヒロトを出来るだけ優しく葬るとしようか。

2月3日　Day. 14－2

「逃がすかよヒロト！」
「美味しい雪玉を召し上がれ。」
「厄介な夫婦だなまったく。」

俺が滑りながら作成した雪玉をカオリがヒロトへと投げつける、これぞ連携プレイ。
ヒロトは左右に蛇行しながら華麗に躱していく、しぶとい奴だ。
コースも中盤、そろそろ仕留めないと逃げ切られる危険性もある。
キヨシもまったく妨害されないぶん追い付いてくる可能性がある、合流されたら確実にヒロトと共闘するだろうな。
ホカゾノは……多分死んだだろう、放置して構わないか。

「いやぁぁはぁぁあ！」
「のわっ！」
「英雄ってのは遅れて登場するもんさ！」
「うわ、ホカゾノ生きてたの！？」
「勝手に殺されてたまるかよ！ウチはこの世にのさばる天才だぜ！」

「ならば今度こそ遥かなる地獄へと落としてやるわ！」
「はははははは、やれるものならやってみろ！ヒロト、協力するぜ！」
「え？いらないよ？」
「まさかの拒否！？」
「無様だなゴリラー！」
「ホカゾノに味方はいないのだー！」
「さ、淋しくなんかないんだから！」

「死ねやツンデレ気取りがー！」
「全然可愛くもないぞー！」
「ウザいぞホカ。」
「ヒロトテメェ！」
「そこでヒロイ夫妻の的になっててくれ。」
「マジ殺す！」
「殺されんのはテメェだぜ！」
「そういえばホカゾノは来たけどキヨシくんは？」
「呼んだ？」
「あ～あ、呼んじゃったよ。」
「呼んだら出てこれるのかよ。」
「呼んでないから帰れ！」
「残念ながら取り消しは効きません。」
「さぁこっからが本場だぜ！」
「ホカゾノは黙って滅べやー！」
「兄さんたまには別の人を狙って！」
「わたし、貴方じゃなきゃダメなの！」
「出来れば女の子に別のシチュエーションで言われたかった！」
「贅沢な願いだな、永遠に叶わぬと知れー！」
「さりげなくトップ、イェイ。」
「逃がすかヒロト！」
「キヨシは家に帰ってＥｎｔｅｒを押す作業に戻るんだ。」
「そうだった、失念してたぜ。」
「悲しい作業だね。」
「カオリさんマジ勘弁してください。」
「泣くなキヨシ、君には二周目というやり直しのチャンスがある！」

「よし、今度こそってないわー！」
「何度あろうと変わらないだろう。」
「よ～し、今日こそお兄さんを亡き者にすっぞ！」

「へいへい、そろそろゴールだぜ！」
「ラストスパート！」
「やべぇまだヒロト抜いてない！」
「ボクの華麗なテクはこれからさ！」
「もう終わるんだよ！」
「ふはははは、鶴翼閉じ！」
「ここにきて技だと！？」
「ジジイの戯言もたまには役に立つもんだなぁ！油断は禁物ってやつだ！死ねやホカゾノ！」
「いつの間にか標的チェンジ！？ギャース！」
「残るは二人！」
「ヒロト、俺に構わず行けー！」
「……。」
「本当に欠片も構わない！？」
「仲間にさえ見捨てられた憐れな子羊よ。私がこの手で面白おかしく、無責任な神のもとへ送り届けてあげましょう。」
「懇切丁寧に誠実で真面目な神のもとへ送り届けてください！」
「はいはいそうする。」
「おざなり！？」
「てか死ぬのはオーケーなわけね？」
「……しまった！これが孔明の罠か！」
「何か勝手に自爆したな。」
「ヒロトくんはあたしが相手だよ！」
「俺が勝者は嫌だと？」
「嫌じゃないよ、敗けたくないだけ。」
「揃いも揃って負けず嫌いですか。」
「大正解、大丈夫痛くしないから。ロッドアタータック！」
「よっと。てかカオリさんて実は最強だよな。」
「何で？」
「だって背後に最強の鬼神が控えてる。」

「たまに暴走しそうになったら止めなきゃいけないけどね。」
「あぁ、それは大変そうだ。」
「よっしゃ、キヨシ撃破！」
「次は敗けないんだから！」
「そうこうしてる内にゴールだぜ！」
「いつの間に！？」
「あらま、ヒロトは倒せなかったか。」
「まぁヒロトくんならいっか、馬鹿じゃないし。」
「最近カオリさんもウチらに対して相当酷いよね。」
「同感だ。中立だと思っていたが、やはりお兄さんの嫁か。」
「さてさて、なら休憩も兼ねて飯にすっか。」

それぞれ板を外して一ヶ所にまとめて刺しておく。
ロッジに入るとむせ返る人の熱気、空いてる席を探すのも一苦労だ。

「席を探すのと飯を買うのに分かれよう、これだけ混んでる中で五人の移動は大変だ。」
「じゃあ俺は席を探してくるぜ！」
「ウチもそうするわ。兄さん、ウチはカレーね。」
「俺はラーメン！」
「はいはい、んじゃ頼んだぞ。」
「行くぞホカゾノ！」
「おう。オラオラ邪魔だカス共、道を開けやがれ！」
「あぁん？」
「何様だテメェら？」
「退けっつってんだよ！アレですか？難聴ッスか！」
「止めとけよホカゾノ、こいつらおつむが弱すぎて意味が判ってないのさ。」
「はっは、どうしようもないな。」

「上等だテメェ、表出やがれ！」
「売られた喧嘩は高値買い取りだぜ！」
「ついでに財布貰おうか！」
「黙れ馬鹿共、歩いて三歩で喧嘩始めんな！大体喧嘩売ったのは明らかにお前らだ！」
「だって兄さん、こいつら邪魔だし蹴散らしたくなるじゃん！」
「そうだそうだ！」
「塵に変わりたくなければ席を探しに行け。」
「ちぇ、仕方ないなぁ。」
「命拾いしたな。」
「黙って行け！」

今の騒ぎを見ていた奴らが道を開けていく、結果こうなるのかよ。
さて、目の前にはとってもキレたお兄さん達、雪焼けした肌が素敵だね、威圧感たっぷりだ。
はぁかったりぃ。

「なんだよテメェは、アイツらの仲間だよな？」
「勝手に喧嘩売っといてこのままで済むはずないよな？」
「そうだな、まったくもってその通りだよ。アイツらには後でキツく言っとくし、この騒ぎも俺が責任持つさ。」
「じゃあ表行こうぜ、こっちは相当きてんだよ。」
「人のいないとこ行くぞ、俺たち詳しいから見られねぇよ。まぁお前が見つからなくて死ぬかもしれねぇけどな。」
「あぁ、そりゃ都合が良いよ。んじゃ行こう。」

怖ーいお兄さん達に囲まれて連れていかれる、カオリ達は不憫なものを見る目でこちらを見ると、そのまま飯を買いに行った。
まぁ……不憫だよなぁ。
ロッジの裏側、普通の奴なら絶対に来ないだろう場所で六人の男に

取り囲まれる、嫌な光景だよ。
アイツらちゃんと席ゲットできたかねぇ。

「んじゃちゃっちゃと死ねよ。」
「食後の軽い運動ってな。」
「昼飯代が浮くと良いなぁ。」
「俺はあまり金を持ち合わせていないぞ、大金は持ち歩かない主義なもんでね。」
「ならサンドバックだな、ははは！」

つまんねぇな、品位の欠片も感じない。
薄汚い笑みを張りつけた顔で近づいてきた一人が、俺の胸ぐらを掴み殴りかかってくる。
はぁ、おっせ。
一瞬で拳を握り、できるだけ手加減して腹を殴る。
周りの奴らにはきっと仲間が突然倒れたように見えただろう、御愁傷様。

「テメェ何しやがった！」
「何って、見て判らなかった？」
「ざけんなよテメェ！」
「つまり見えなかったんだろ？やれやれ、相手の力量を計れる程度の観察眼くらい持ちやがれ。」

激情した五人の拳が一斉に飛んでくる、はぁかったりぃ。
足払いで雪を巻き上げて煙幕の代わりにすると、一人ずつ昏倒させていく。
所要時間僅か五秒、食前運動にもなりゃしねぇ。
六人を放置してその場を後にする、ウェア着てるし暫らくは大丈夫だろ。

ロッジに戻って周りを見回すと、ちゃんと五人分の席を確保したカオリ達が既に食事を始めていた。
何食わぬ顔で席に着き、伸び始めたラーメンをすする。

「どうだった？」
「雑魚。」
「まぁカズくん相手じゃね。」
「アイツら喧嘩売る相手間違えすぎだろ。」
「兄さんズルい、ウチにもやらせてくれれば良いのに。」
「大体俺たちが買った喧嘩だったしなぁ。」
「お前らが行ったら六人まとめて行方不明だろうが、手加減ってもんを知らないんだからよ。」
「塵に変えます！」
「春になったら雪解け水になって天然水になるよ。」
「だから嫌なんだよアホ。」
「ねぇ、食べ終わったらどうする？」
「夕飯を美味しくするためにも滑る！」
「まぁそれ以外にないけどな。」
「自由気ままに滑りたいね。」
「のんびりするかね、滑るだけでも楽しいし。」
「んじゃあ各自自由に…って言っても自然と分かれるけどな。」
「俺と！」
「ウチと！」
「俺だな。」
「ボンクラーズ完成。」
「ヒロトくんは除く。」
「意外にヒロトもボンクラーズっぽいぞ。」
「ざまあヒロト！」
「ヒロイさん、こいつら殺して。」
「ヒロトズルいぞ、鬼神は使用禁止！」

「彼の英雄王も裸足で逃げ出しそうな戦闘力なんだから、もはや宝具じゃんか！」
「いいから食い終わったなら食器かたせ、行くぞ。混んでるのに長居は無用だ。」
「了解。」
「さぁはしゃくぞー！」
「羽目を外すぞー！」
「なにお前ら、怒られたくてそういう発言してんの？」
「Ｎｏ！断じてＮｏ！」
「せっかく遊びに来てるからはしゃぐなとは言わないが、周囲の方々に迷惑となる行為は極力避けること、これだけは守れ。」
「はーい。」
「貴様らの場合、テンション上がって雪崩発生ともなりかねん、くれぐれも破壊行為はしないこと。」
「言われてるぞそこのマウンテンゴリラ。」
「ウチはキングコングだ！」
「マジで頼むぞ、面倒は御免だ。」

雪崩が起きたらせめて一般人だけでも救助せねば、こいつらは勝手に生き延びるだろうが。
ぞろぞろとリフトに乗る、前の三人は相変わらず五月蝿い。
やがてギャアギャアとじゃれあいだし、リフトが上下に揺れだした。

「ちょ、揺らすな！」
「うるせぇなジャンプしろジャンプ！」
「ジャンプしたら余計揺れるわボケ！それにこれは飛空挺じゃねぇ！大体テメェ誰に向かってその口調だあぁん？」
「ツッコミに忙しいねカズくん。」
「兄さんなら落ちても何ら問題ないでしょ？」

「そういう問題じゃねぇよ！」
「落ちるのが恥ずかしいの？いやいや、人間堕ちてしまえば楽ですぜお兄さんや。」
「途中から意味合い変わってるっつーの！てか貴様らは俺しか見えてないのか！」
「私の目には貴方しか映らないのよ！」
「揺らしたら他の人達も迷惑すんだよボケ！」
「あぁ、そゆことか！」
「ホントに今更気付いたのか！？」
「はっはっは、ウチらを舐めるな！」
「今すぐにそっちへ跳び移って壮絶なコンボを決めたい。」
「実は武道大会終わって一番寂しいのヒロイさんだよね。」
「うるさいよ！うるさいよ！」
「この戦闘狂！」
「殺戮マニア！」
「テメェの血で真っ赤な雪だるま作りてぇのはどっちだぁ？」
「二人ともです。」
『ヒロト！？』
「今から行くよ、ぴょ～ん！」
『可愛い効果音で鬼神きたー！？』
「いらっしゃいました～。」
『お帰り下さいませ、サヨウナラ～！』
「遥々来たのに酷いなぁ。」
『いえ！ホント！マジ帰れ！』
「ヒロトは歓迎してくれるか？」
「まぁ俺に被害が及ばなければ。」
『ヒロト最低！』
「今日ははもるね二人とも。そんな仲良しな二人をバラバラに落とすなんて可哀想だよねヒロト。」
「そう思う。」

「いやいやキヨシを先に！」
「ホカゾノくんこそ先に！」
「大丈夫、お兄さん頑張っちゃうぞ！」
『こんなとこで頑張るなー！』

二人の言葉は全く意に介さず空へ放り投げる。

「あぁぁぁあ！」
「飛んでる、ボク飛んでるよ！」
「すかさず追撃！」
「Ｎｏ　ＴｈａｎｋＹｏｕ！」
「遠慮すんなって。」
「雪に埋もれる前に言いたい！」
「何だ？」
「兄さんが一番迷惑かけてるよ！」
「エクスカリバー！」
「また何処からか剣が！？」

あえなく散っていった馬鹿二人、雪に立つオブジェ完成。
騒ぎだすと止まらない、いつもの風景だったとさ。

2月3日　Day. 14－3

昼間から大騒ぎして疲れ、夕飯を食べ過ぎて苦しみ、気が付いたら馬鹿二人は爆睡していた。
好都合だと思い風呂に向かい、少し熱いくらいの温泉に浸かる。
極楽極楽、毎日ツッコミに忙しい、安らかな日々が待ち遠しいね。
タオルを頭に乗せて、夜空を見上げる。
やはり山から見る空は格別だな、星がたくさんだ。
美しい景色に目を奪われて、ふと左右を見回した。

したり顔で俺をニヤニヤと見る馬鹿に取り囲まれていた。

はぁ、俺の安息って中々見当たらないなぁ。
一日中イライラせずツッコミもしなくていい日ってないのだろうか……。

……いや、ないないない。
ありえないな、俺がチーズ大好きになるくらいありえない。
あんな牛乳を腐らせてカビ生やしたような汚染食品を美味しく食すなど、こいつらみたいに頭が空っぽでそれが何なのかすら判断できないようなキチガイの食べ物だ、人の食い物じゃない。

「何でそんな全力でチーズを否定するかなぁ。」
「何でそんな普通に人の思考を覗くかなぁ？」
「まぁとりあえず兄さんに安息の時間など無いと。」
「あっはっは、ブッ殺すぞ？」
「俺たちを舐めてはいけない！例えこの命果て、この身滅んでもお兄さんに迷惑かけてやる！」

「朽ち果てろカス！」
「バタ足！」
「大人しく沈め！」
「馬鹿野郎！男は黙って犬掻きだ！」
「そうか！」
「そういうことじゃねぇ！」
「泳げないお兄さんはそこでじっとしてな！」
「金づちな兄さんは、ウチらのスウィミンクな談議を心淋しく聴いていたまえ！」
「……。」
「Ｏｈ、ブラザー、浮かない顔だね。どうしたんだい、体が水に浮かないのかぃ？」
「Ｈａｈａｈａ、ナイスジョークだなキヨシ！」
「……。」
「すぐに心が折れてはいけないよ、それじゃ現代の荒波には勝てないさ。」
「心を強く持とうぜブラザー、Ｈａｈａｈａ！」
「……来い。」
「Ｗｈａｔ？何が来るんだい兄さん。」
「ヤバい！ホカゾノ、逃げるぞ！」
「え、何で？」
「エクス……。」
「全力疾走！」
「こりゃ死んだぞっと。」
「……カリバー！」

光の帯が夜空を駆ける。
チッ、逃した手応えしかしねぇ。
てか前にも一回あったなこの感じ、確か温泉に行った時だったか。
今日は幸い客を巻き込んだりしてないから大丈夫、俺はちゃんと手

加減できる。
まぁいいか、とりあえず一時の安息は手に入れた。
「のんびりと風呂に浸かる、いいね。」
「君は本当に気配がないねヒロト、お兄さんも流石に驚くぞ？」
いつの間にか隣で浸かるヒロト、アサシンかお前は。

「そういえばあの話は考えてくれました？」
「ん？何の話だ？」
「俺がヒロイさんを兄さんって呼んでもいいかって話。」
「まだ続いてたの！？もう駄目って結論出たじゃん！」
「でも実際には呼んでるじゃない？」
「ヒロトくん、そういうリアルに触れる発言はよそうか。」
「そういえば酒あるけど飲む？」
「あ、あぁ頂こうか。」
「はいモルツ。」
「あ、あぁ缶ビールね、地酒の瓶とかじゃないのね。」
「ホカとキヨシが向こうで暴れてたよ？」
「早く言えよ！」
「３０分前くらいに。」
「もう終わってんじゃん！」
「この温泉ってさぁ…。」
「あん？」
「温かいよな。」
「冷たい温泉とかないから！」
「いやいやあるから。」
「マジで！？」
「多分。」
「つまんねぇ嘘つくなよ！」

「あんまり叫ぶと逆上せるよ？」
「お前のせいだよ！」

ダメだ、こいつのおかしなテンションの方が危険だ。
てか今更だけど酒の持ち込みって大丈夫なのか、心配になってきた。

そういえばアイツらはどこ行ったかな、あれが野放しってのはやっぱ不安だな。

「ちょっと馬鹿野郎共を蹴散らしてくるわ。」
「何で？」
「だって産まれてきた時点で罪じゃないかあの化け物共は。」

あのゴリラチルドレン達は単体の戦闘力とおふざけ半分で施設を破壊しかねん、やはりタングステンの手錠とかで拘束すべきだった。
ちゃっちゃと着替えて考えてみる、奴らの思考パターンを。
ナイターで人が少ないのを良いことにゲレンデで好き勝手。
あり得る、奴らなら雪崩にでも乗って平気でスリルを楽しみそうだ。

大人しく入浴後の珈琲牛乳。
定番だ、そして出来ればこの状況が一番好ましい、腰に手を当てて一気飲みが基本だな。
ゲームコーナーで大人気なくガンシューティング、エアホッケー、ここまで来てスロット。
あれ？
アイツら馬鹿すぎて行動が読めないだと！？
クソ、とりあえず部屋にこの荷物を置いてこよう、このイライラを理不尽にぶつけるのはそれからだ。

「ぶるる。」
「どしたホカゾノ？」
「今すっげ寒気した、多分兄さんが暴れだす寸前。」
「あぁ来た来た、このあり得ない殺気はお兄さんか。」
「てかお前らずっと隠れてたのか？」
「そうともよヒロトくん、実は気配を極限まで隠して風呂から出てなかったって寸法よ！」
「死ぬほど集中したからめっさ疲れたけどな。」
「確かにヒロイさん気付いてなかったみたいだな、ワクワクとイライラを組み合わせたような顔してた。」
「……兄さんの表情って器用だね。」
「他に何か言ってた？俺たち集中してて外の音とか聞こえなかったからさ。」
「産まれてきた時点で罪じゃないかとか言ってたよ。」
「お兄さんの方が世界に対して最強に有害だろうに。」
「あの鬼神は自分を棚に上げて暴れだすから困ったさんだぜ、ボクらの方が余程知的に行動するさ。」
「そうだな兄弟、あのお兄さんは厄介な鬼だ。」
「これは敗けられない鬼ごっこ。」
「捕まったら死、そして終わりは鬼が疲れ果てるまで。」
「勝算はあんのか？」
「ふっふっふ、お兄さんは今頃俺達を捜し回って走ってるはずさ。」

「つまりウチらはあまり動き回らず隠れるのさ。」
「なるほど、少しは考えたな。」
「だろう、狩られるだけのウサギちゃんで終わらないぜ！」
「賢く逃げるキツネになるのさ！」
「上手くいけば良いけどな。」
「よしホカゾノ、早速行動開始だ！」

「ヒロトも来いよ。」
「まぁ暇だし良いけどさ、俺を巻き込むなよ？」
「まぁお兄さんはヒロトに甘いから大丈夫っしょ。」
「な、ズルいよなヒロト。」
「日頃から大人しく慎ましく生きてれば怒られないのさ。」
「好き勝手やっといて偉そうにすんなテメェ！」
「お兄さんもヒロトが見えてないよな、実は一番悪い奴だよコイツ。」

「一体何処に行きやがった！」

ウゼェ、この拳を早く奴らにねじ込みたい。
もう最初の理由なんてどうでもいい、なんなら戦争でも始まればいい、俺一人で無双してやる。
おや、この気配は。
温泉前の休憩所でまったりしているカオリ発見、マッサージチェアーで珈琲牛乳、羨ましい。

「素晴らしく温泉を満喫してるなカオリ。」
「うん最高だよ、幸せ～。」
「俺も後で来よう。」
「ホカゾノ達ならさっき何処か行ったよ～。」
「流石はカオリだ、俺が何をしてるのかきちんと理解していらっしゃる。てかアイツら風呂から出てなかったのか、気配消すの巧くなったな。」
「あたしには気付かなかったみたいだけど、何か企んでる顔だったよ。」
「面白いな、ウサギちゃん風情が鬼を挑発とは。」

クックック、俺を舐めてると死ぬぜゴミ共。
「カズくん物凄く邪悪な顔してるよ？」
「いやいやとっても機嫌はいいですともよ、今なら何でも斬れそうだ。」
「物だけは壊さないでね。」
「任せろ、ちゃんと手加減はする、一般人も巻き込まないさ。」
「うん、じゃあ行ってらっしゃい。」
「ウサギ狩りの始まりだ。」
索敵開始――標的位置確認――行動開始。

「あれ？」
「どしたホカゾノ？」
「いや、何か感じないか？」
「この会話にデジャヴを感じる。」
「そうじゃなくてさ、もしかしたら兄さんにバレたかもしれない。」
「俺は何も感じないが、ヒロトは？」
「ヒロイさんはまだ温泉付近を歩いてるよ。」
「そこまで判るのか、スゲェなヒロト。」
「気配遮断と気配察知は得意なのさ。」
「確かにお前、よくウチらが襲われるときこそこそと事前に逃げるもんな。」
「よく襲われるって現実をナチュラルに受け止めてるね。」
「人間の環境適応能力を甘く見てはいけないわ、すぐに慣れるわよ。」

「ミ〇トさん！」
「え？」
「どしたヒロト？」
「……ヒロイさんの気配が消えた。」
「キヨシ、逃げるぞ！」
「オーライ！ヒロト、行くぞ！」
「既に気配遮断して逃げたよ、マジで汚いなアイツ。」
「こんばんはゴミ共、冥土に旅立つ準備は出来たか？」
「ははは兄さん、窓から入ってくるとか非常識だぞ。」
「てかここ七階、どうやって来たの。」
「跳んできたに決まっているだろう、寝てるのかい弟くん。」
「今世紀史上最高におかしな台詞だせお兄さん。」
「さてと疾風の如く逃げましょうかキヨシさん。」
「えぇそうねトシユキさん、この息をする暴力からね。」
「でも見て御覧なさいよキヨシさん。あんなにも爽やかな笑顔に狂気を含められる殿方はそういなくってよ？」
「その通りだわトシユキさん。ほら見てください、足が震えすぎて壊れてしまいそうよ。あらやだ、お手洗いに行っておくべきだったかしら。」
「今すぐ色々出てしまうかもしれないわね、脳ミソぶちまけられそう。」
「でもトシユキさん、あなたは私たちが塵にされる理由をご存知？」

「えぇキヨシさん。そちらの殿方は産まれてきたことが罪だと仰っていたわ。」
「まぁ理不尽。」
「下知な芝居は終わりか？では始めよう。」
「あらやだ何が始まるのかしら。」
「きっと私たちの解体ショーよトシユキさん。」

『いやぁぁぁぁぁあ！』
「待てやコラァ！」
女の子の走り方で逃げ出すゴミ共、ウザさ倍増。
でも走る速度はいつもと変わらず速い、いっそ殴られたいのではなかろうか。

「違う！俺達はボケないと個性が失われるのさ！」
「キャラクター作りは大事だよ兄さん！」
「喧しい！貴様らの個性なんぞ生命ごと剥奪してくれるわー！」
「この読心術ってスキル気に入ってるんだ、失うわけにはいかない！」
「ウチも超回復スキルをなくしなくないわ！」
「化け物共め。」
「兄さんに言われたくない！」
「そうだそうだ！」
「よし祈れ、今すぐ祈れ！せめて死んでも肉片くらいは残りますようにってな！」
「助けてくださいベルゼブブ様！」
「いやいやキヨシ、ブブさんは後ろにいらっしゃるよ。」
「貴様ら、素敵なアトラクションを用意してやる。ミンチにされて雪山に飛び込むってやつだ、最高に楽しめよゴミ共が！」
「ナイターゲレンデに舞う肉塊、新しい雪山伝説の誕生だね！」
「以上第一の犠牲者候補でした～。」
「いらっしゃいませゴミ共ー！本日全アトラクションは無料にてご利用いただけます！」
「アトラクション一つしかないやんかー！」
「黙って遊べやー！」
「死ぬと判ってる遊びを誰がするかー！」

喧しく喚きながら走り回る。
あれ、これってかなり迷惑じゃね？
心配ご無用。
俺たちの声が聞こえた頃には、俺たちが通り抜けている。
視認できないのなら怒られない止められない。

「そろそろ終わりにすっか！」
「Ｄｏｎ'ｔ　ｔｕｃｈ　ｍｅ．」
「Ｉ　ａｍ　ａ　ｂｒａｖｅｒ！」
「Ｎｏ！Ｙｏｕ　ａｒｅ　Ｄｅｖｉｌ！」
「サヨナラゴミ共！」
「Ｎｏｏｏｏｏ！」

その日ゲレンデに、奇声を発しながら飛んでいく二つの流れ星があったとさ。
めでたしめでたし。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7606x/

Fratres~フラトレス~　~The Crazy Cafe~

2011年12月12日00時48分発行